

きものを逮捕すべし、近地に火おこらば、各家に在てもはら火をいましめ、消防の備せしむべしとあり。  
——嚴有院殿御實紀

小普請同心  
増員

三日癸卯○寛文二年紀元二三二二年十二月○癸卯、三正綜覽。小普請奉行部下ノ同心ヲ増員シ、十

小普請奉行  
職務章程申  
令

五日乙卯○寛文二年紀元二三二二年十二月○乙卯、三正綜覽。小普請奉行職務章程ヲ申令ス。○殿中日

記。寛文録。嚴有院殿御實紀。御當家令條。

小普請同心  
増員事蹟

小普請同心増員 所傳左ノ如シ。

三日○寛文二年十二月小普請奉行同心不足付る都合七十人被仰付之。

——殿中日記

十二月三日○寛文二年御破損奉行十人招殿中、唯今迄同心十人ニ不足ニ付増都合七十人被仰付之。  
——寛文録

三日○寛文二年十二月小普請奉行所屬の吏を増加して七十人と定められ、隔年に費用會計すべしと命ぜらる。  
——嚴有院殿御實紀

小普請奉行  
職務章程申  
令事蹟

小普請奉行職務章程申令 御當家令條ニ據ル。元年五月廿二日ノ令ニ比スルニ多少ノ増減ヲ見ル。

條々

一、小普請方修覆、又ハ新規之造作、萬事費無之、不致遲滯、龜相ニ無之様、可入念、若難計儀ハ、御留主居衆御勘定頭、遂相談、可被申付。其上猶落着仕ゐたき儀於有之ハ、老中迄可被申伺事。

附、御城中御城外、節々見廻、小破以時、修理可被申付事。

一、小普請之役人、丁場等割渡之儀、無依怙、最良善惡之場所、人足員數以下相考之、正路可被致沙汰事。

一、御材木石瓦銅鐵壘繩竹、其外諸色御普請之上中下考之、相應可被申付、大工壁除等、至迄、上中下、可入所を致吟味、可被用事。

一、御普請道具場所へ相届儀、前廉、遂吟味、可取寄之儀、持運大工木挽不待居様、可被入念事。

一、以入札申付御普請日雇人足等、前廉請人以下、慥成をのをゑらひ、相定請負、以後ハたとひ何等之訴訟仕といふとも、一切不可被用事。

一、奉行十人之内、五人宛、隔年小普請之奉行相勤之、五人ハ御勘定、懸り、嚴密、可被遂結納事。



一、同心之者共、常々遂吟味、無作法私欲無之様、入念可被申付事。  
右條々、可被相守此旨者也。

寛文二年十二月十五日

老中連判

小普請奉行中へ

屋鋪賜給

五日乙巳○寛文二年(紀元二二三二)年十二月〇乙巳、三正綜覽。屋鋪賜給者有リ。廿六日丙寅○寛文二年(紀元二二三二)年十二月〇丙寅、三正綜覽。

亦同ジ。○柳營日記。

屋鋪賜給事蹟

屋鋪賜給 柳營日記ニ、

五日○寛文二年十月〇中略。

岡部直好

岡部志摩守○直好。

右、御成橋近邊ニ明地被下之。

松平市左衛門

御納戸 松平市左衛門

右永井彌右衛門上ケ屋敷被下之。

廿六日○寛文二年十月〇中略。

丹羽信氏

丹羽勘兵衛○信氏。

右木挽町ニ多屋敷被下之。

細井勝茂

細井佐次右衛門○勝茂。

右下谷ニ多屋敷被下之。

向井正方同心

向井兵部○正方同心。

深川ニ多屋敷被下之。

松平直矩京極高供

松平大和守○直矩。京極主膳正○高供。屋敷替、願之通被仰出。

柳營日記

分家

上屋敷 築地 坪數不詳

寛文四年甲辰分家丹羽權兵衛信氏賜フ。

享和三年戊戌九月信氏孫知氏年未タ十五歳ニ至ラスシテ瘍ス。是ニ因テ徳川氏制ニ從テ收メラル。此ニ至テ家絶ツ。

子爵丹羽家回答○三草藩。

〔附記一〕 本所屋鋪賜給

數直○從四位侍從。初號大和守。後改但馬守。幼名辰之助。

同年○寛文二年。於本所、下屋鋪拜領之。

市街充實時代

附記一、本所屋鋪賜給、土屋敷直



勝元初勝重。圖書。初理右衛門。

寛文二寅年本所駒形之向七百五十坪、櫻井圓忍屋敷拜領仕し。

寛政呈譜

〔附記二〕 街路掃除其他町觸

覺

一、跡々々相觸い通、町中海道掃除、朝ハ手桶之水を替打、無油斷掃除可仕い。  
并水溜桶手桶之水切々入替いる、水氷不申い様ニ可仕事。

一、町廻ニ兩御奉行様并御與力同心衆御廻りい共、其節水を打掃除杯仕い義、自今以後堅無用ニ可仕い。勿論商賣杯やめ罷在い義かつて無用ニ可仕い事。

一、先日爰相觸い通、火事之砌、御定之親類之方い見舞ニ參いえ、其者手桶水を入持見舞ニ可參い。鳶口棒杯持見舞ニ參りい義、自今以後堅無用ニ可仕い事。

右三ヶ條之趣、町中い相觸いハ、早々月行事印判を持、只今奈良屋所い可被參い以上。

寅〇寛文二年十二月十九日

町年寄三人

撰要永久録

是年〇寛文二年紀元二三二二年。社寺ノ起立轉移シタル者若干有リ。〇文政寺社書上。府内誌殘編。府内地古跡寺社帳。

社寺起立轉移

富岡八幡社旅所

社寺起立轉移 寛文二年中社寺若干起立若クハ轉移ス。

富岡八幡社旅所 本所一ツ目橋南ニ起立ス。

本所壹ツ目橋南之方  
永代嶋八幡宮旅所

一、境内拜領地、西之方表間口貳拾貳間貳尺、東之方裏拾五間餘、南之方奥行四拾九間餘、北之方奥行五拾九間、此坪數千百壹坪餘。

右拜領之儀、兼伊奈半左衛門殿迄御願申上置い處、本所御地割之砌、御老中久世大和守殿、土屋但馬守殿い御窺之上、寛文二壬寅年六月廿二日願之通拜領被仰付、本所御奉行徳山五兵衛殿、山崎四郎左衛門殿、右地面御渡被成下い。

文政寺社書上

富岡八幡宮旅所境内拜領地千百一坪。此町〇御船藏前町。の北北方本所と深川と接地にあり、寛文二年永代寺賜ハりし地と云。社ハ二間四方マて、常ニ紙幣を立、神會此市街充實時代



時神輿をまむらくこゝに安して、供奉此人くかれぬふぞとたむる處なれど、旅所とハ唱へしと。或ハ御假屋とも呼へり。

——葛西志

光臺院

光臺院 是年ヨリ寛文五年マデニ年貢地ヲ買添フ。

京都智恩院末  
芝三田  
浄土宗

月秀山榮照寺光臺院

一、當寺境内、除地表間口貳十貳間四方、此坪數四百八十四坪。買添御年貢地奥之方ニ多四百八十壹坪。合る境内九百六十五坪ニ御座也。略。中  
一、御年貢地買添之事、開基家長壽院殿寄附、寛文二寅年、同五巳年迄三度ニ買添申也。其砌本堂居宅等建立ニ多、光臺院殿廟所深川靈巖寺ヲ改葬御座也。由買添地最初ニ四百九十坪ニ多御座也。元祿八亥年、檢地御改之節、四百八十壹坪ニ相成由ニ御座也。

——文政寺社書上

本榮寺

本榮寺 中興開山示寂ノ年ニ因ミテ此ニ記ス。

武州荏原郡南品川本光寺末  
同所  
日蓮法花宗

寶光山本榮寺

一、御年貢地境内、表口七間半、裏行四十六間。坪數七百六拾二坪也。略。中

一、寶徳二庚午年起立之由申傳也。得共、此義不分明ニ御座也。略。中

中興開山雲光院日怡

示寂寛文二寅年三月十七日。略。中

一、門前町家、裏行十一間、間半。

町屋建也。其節之寺社御奉行所相知レ不申也。町役不仕也。得共、御茶壺上下之節、御雇人足差出シ申也。外門前ニ多御坐也。町家建也。年數相知レ不申也。

——文政寺社書上

眞英寺

眞英寺 四谷伊賀町ニ借地ス。

淺草本願寺末  
四ッ谷北寺町  
浄土眞宗

茲現山眞英寺。略。中

略。上 寛文二寅年南伊賀町同心衆村山太郎右衛門地面借地仕也。處、尙又南寺町西應寺境内借地仕、無程同十戌年四谷北寺町西應寺境内借地致也。

——文政寺社書上

萬昌院

萬昌院 市谷ヨリ牛込ニ移ル。

市街充實時代



境内拜領地二千四百六十三坪。内門前町屋八十二坪。

牛込御殿山

起立慶長甲辰年元寺地市ヶ谷ニ罷在<sub>レ</sub>處、寛文二壬寅年火消御屋敷ニ被<sub>レ</sub>召上、其節當所<sub>レ</sub>替地被<sub>レ</sub>下置<sub>レ</sub>。

續府内備考

寶祥寺 市谷ヨリ高田ニ移ル。

下總國葛飾郡關宿山王寺山東昌寺末  
牛込高田  
禪曹洞派 金谷山寶祥寺

一、境内拜領地東西七拾貳間壹尺。南北四拾貳間半。此坪數三千坪。

内三百六拾坪 末寺南昌寺<sub>レ</sub>分地。

右元地之義者市谷八幡宮之西谷ニ有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所、寛文二年尾州様地面御用ニ付、當高田替地被<sub>レ</sub>御付、三千坪拜領仕<sub>レ</sub>。右南昌寺<sub>レ</sub>分地之義者、安永二年法地立建之節致<sub>レ</sub>分地<sub>レ</sub>。

一、開闢起立

右年曆月日先年類燒之節記録燒失仕、相分<sub>リ</sub>不申<sub>レ</sub>。

文政寺社書上

法輪寺 牛込中里村ヨリ寶泉寺内ニ移ル。

牛込天台宗寶泉寺境内寺院屋敷御改以前者、年貢地共四千四百二十七坪内千四百二十七坪者、眞言宗龍泉院日蓮宗法輪寺屋敷ニ引。此兩寺ハ、寂前祖心領内中里村居住之處、略。中法輪寺ハ寛文二寅年祖心指圖を以て寶泉寺境内除地之内<sub>レ</sub>引移<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。

除地古跡寺社帳

龍興寺 持添地寄附ヲ受ク。

京妙心寺末  
禪宗濟家 慈雲山龍興寺

右往古釋迦文院と申<sub>レ</sub>、小日向隆慶橋邊ニ有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>由。其後市谷八幡邊<sub>レ</sub>引地ニ相成<sub>レ</sub>由。其後四ッ谷<sub>レ</sub>引移、外壹ヶ所移<sub>レ</sub>場所<sub>レ</sub>不相知、其後當地日○小拜領<sub>レ</sub>、引移<sub>レ</sub>へ共、年代不相知。右釋迦文院と申<sub>レ</sub>節<sub>レ</sub>、何宗<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>哉、不相分、後慈雲山龍興寺<sub>レ</sub>改、當宗派ニ相成<sub>レ</sub>年號ハ相分<sub>リ</sub>不申<sub>レ</sub>。

拜領地 貳千貳百坪。

古跡御年貢地 九百四十三坪餘。

右合三千百四拾三坪。寛文九己酉年古跡地ニ御差帳御座<sub>レ</sub>。

持添拜領地 六百四拾五坪餘。

市街充實時代



右者寛文二乙酉年持添拜領地之分を、松平美濃守殿拜領する、當寺に被致寄進し。

此内

百八拾五坪餘。

西北之方門前町屋を御座候。

惣合境内三千七百八拾八坪。

此内

百三拾九坪八合八勺餘。

明和七庚寅年より追々隣寺妙足院に借し置申し。

——文政寺社書上

宗慶寺

宗慶寺 松平頼隆邸地下爲り轉移ス。

○小石川 氷川明神社 除地九百四十二坪、内門前町屋有之、當社勸請之儀者、孝昭天皇

三年戊辰之由申傳し。○中

一、別當吉水山朝覺院宗慶寺境内古跡除地三千二百三十坪、小石川傳通院末開闢起立之譯應永二十二年に御座し得共、右往古ハ只今松平播磨守殿屋敷之場所ニ有之ハ處、寛文二亥年二月二十八日御用地ニ相成、其後當所に移住仕し。尤其砌於本所一万坪替地被下置し得共、手遠ニ付差上し由申傳し。○中

一、氷川明神自坊縁起左之通

抑當寺草創を應永年中三日月上人の遺跡也。師諱を聖岡、西蓮宗了譽を號せり。常陸國の人也。父ハ四國久慈郡巖瀬の城主白石志摩守源宗義新羅三郎義光の後胤にして、佐竹氏族たり。母を橘氏の女也。宗義世繼ふさおとをうまひて、巖瀬明神を祈りければ橘氏妊娠を覺ふ。遂に光明院の御宇曆應四年辛未正月廿五日巖瀬の城中として誕生し、所生の幼兒聰明倫りよえり。兒五歳の時、父の宗義戰場を命をねとせり。其後八歳の時、母堂亡父の菩提被吊ひ、我おん世をそと頼もしかんとて、兒をともふひ艸地山常福寺ふる了實上人に詣て、志の程を述給へば、上人承諾して、なうて剃髮授戒の式を行ひ、聖岡と名を多給ひたる。成長り及び錫を東西に飛し、所々乃賢哲を尋て法を求しうは、習學せよふりて、常陸の舊里を歸り、了實上人の讓を受て、常福寺に住せよ。晝夜講述をせよ。まふりたる。額を織月の形ちあり。光りをそふち、闇夜よ書を照し給ひ。まふり世に三日月上人と號したる。然るに高弟大蓮社西譽聖聰上人を江戸貝塚三縁山増上寺を開創ありて、時々師の許に來詣して、起居を問訊せよ。或時よ曰、今道容を多給へば、弟子晨昏此はかへをもふ市街充實時代



し奉るるを共、江戸の化益も一旦は捨るゝし、あそれ師武江より來臨しませむ、いりそり本望なると申せむ多き、師忻然として許諾し給ひ、明譽了知坊より草地山を附屬して、應永二十二年二月二日錫をうつして江戸におもむき、豊島郡小石川北ほとり閑寂の勝地ありたる播州侯の草地是也。草庵を結ひ住居し給へり。聖聰上人也、日頃の本意遂ふとせむ、常々詣て來りて孝順の營いいとねんおろりほしまさり、其頃のおとなりし、何所ともふく一人の化女來りて佛法を求む。師問て曰、汝もは何人そやいほくより來りしやとの給へと、化女答て曰く、妾も住居遠きより、氷川の神靈おき也、師の教化を隨喜し來れるなりと、師をなはち菩薩の大戒を授け、念佛乘の法を示し給へと、化女歡喜の掌を合せて申さく、かくほのゝり法施にあつかる、何を以て謝し奉らん、我も靈泉あり、供養しまひとせん、阿伽井も用ひ給へといひ畢りて、かきをち失ふなり。師あやしみて庭中を望み給ふ、庵近く沸然せして靈水涌出せり。是ふん法水流れて普く群生をうるほその吉瑞なりとて、吉水とせ指名つけられたる。播州侯中の極樂水是なり。師此より於て、氷川明神を念佛守護の宮居とあかた、社壇を修補せむとせたり。此よりして當寺今に至るまで別當職兼帶あり。師草庵よ

六とひ春秋をうへ給ひ、穢土の化縁も漸くほきて、應永廿七庚子九月二十七日の曉き辭世の偈を書て示寂し給へり。壽滿八十也なり。其より歲月をるて後、草庵精舎となり、吉水山傳法院と號せり。此時無本寺也。慶長七壬寅年八月東照神君大母公御逝去、當寺より御入棺ありしと、境地をまさりよりて、新一字を創立し給ふ。今の傳通院是也。師滅後をるより歲月をちとせとも、神君師の高徳を感じ給ひ、傳通院第一の祖と勸請し給へり。元和七年辛酉六月十二日松平忠輝卿の御母堂阿茶の局逝去ありし、遺言より、當寺より御葬棺ありと、朝覺院殿貞譽宗慶大禪定尼と號し、おきより宗慶を以て寺號としく、吉水山朝覺院宗慶寺と號せり。御位牌御畫像御廟塔御安置。其後ち寛文二亥年二月廿八日此地御用地となり、播州侯邸是也。寺境をうけさる。當時の境地是なり。其砌替地壹萬坪餘本所よりひく被下ひ之處、手遠に付差上り由申傳、年代不分明。寛永年中傳通院第四主叡譽聞悅上人中興し給ひしより、傳通院御門末り附と云。

文政寺社書上

原町〇〇小石川中略。

一、應永年中淨土宗西蓮社了譽上人武州行脚之砌、招戴仕、居屋鋪内に草庵補市街充實時代



理逗留有之加持被遊ひる庭ニ有之石ハ清水涌出ひ。右水ヲ加持水々被成、是ヲ極樂水々相唱申ひ。右草庵ヲ一寺ニ取建、居屋鋪之内表五拾三間、裏ハ六十一間、寺地ニ寄附致し、願濟之上、年貢負許ニ除地ニ相成、宗慶寺々相唱申ひ。○中 宗慶寺地所之儀々、寛文二壬寅年四月廿九日御用地ニ被召上、松平播磨守様に御拜領地ニ被下置、宗慶寺々、同所吹上下之方ニ引移、當時極樂水々相唱ひ所ニ罷在ひ。○中

文政九戌十一月

中興秋本三太夫十代目。茂吉郎

府内備考

常德寺

常德寺 湯島ニ起立ス。

京都知恩院末寺

浄土宗 駒込 善龍山清源院常德寺 ○中

一、當寺起立寛文二寅年冬也。○中

一、當寺之地湯島切通大岡金三郎殿組屋敷ニ借地罷在ひ。

文政寺社書上

長元寺

長元寺 千駄木ヨリ駒込ニ移ル。

日蓮宗 高耀山長元寺 ○中

右建立年限々、寛永四卯年千駄木太田備中守殿下屋敷南ニ在之、此處、寛文二寅年太田侯下屋敷ニ相成ひニ付、此所ハ替地被仰付ひ旨、過去帳ニ記し有之。開基儀者相知レ不申。

一、境内坪數 間口拾六間半、裏行貳拾四間三百九十六坪、内三百拾九坪年貢地、七拾七坪除地。

甲斐國身延山久遠寺末 高耀山長元寺

駒込 不唱小名。

境内除地千八拾坪。

當寺起立寛永四卯年千駄木太田備中守殿下屋鋪南之方ニ有之、此處、寛文二寅年太田侯下屋敷ニ相成ひニ付、此所ニ替地被仰付ひ。續府内備考

法林寺

法林寺 長元寺ト共ニ轉移ス。

長元寺兼職 日蓮宗 城照山法林寺

一、本寺甲州身延山久遠寺末。○中

替地之儀者、長元寺之通ニ御座ひ。文政寺社書上

十方寺

十方寺 千駄木ヨリ駒込ニ轉ズ。

下谷源空寺末 武州豐嶋郡駒込香町 浄土宗 浄七山正覺院十方寺 ○中

市街充實時代



一、當寺之儀、元和元年根津ニ起立御座ハ所、當所ニ引越ハ儀、寛文二寅年此所ニ太田備中守殿屋鋪内ニ御座ハ所、相對替地ニ引越申ハ。尤太田殿御屋敷内ニ十方寺跡御座ハ由。

一、當寺境内千三百七拾坪餘。  
但し、御除地八百五拾五坪餘。年貢地五百拾五坪餘。年貢地ニ湯島天澤寺領。寄附之施主ニ當所ニ鳥屋市郎兵衛ニ申者先祖ニ申傳ヘニ御座ハ。

——文政寺社書上

龍谷寺 谷中ニ借地起立ス。

武州足立郡新曾長誓山妙顯寺末頭  
武州豐嶋郡谷中三崎  
法花宗

榮照山龍谷寺

已前寂照山申ハ、中興榮照山改申ハ、意趣相知不申ハ。  
地面表間口十一間、裏行三十間、坪數三百三十坪。  
一、起立、寛文二壬寅年當所禪宗玉林寺領之内右之通借地仕ハ。此時之歴代等相知不申。右之趣者、天明元辛丑年六月廿三日寺社御奉行牧野豊前守殿ニ書付以指上申ハ。

但シ、往古ハ上野清水町於、地面八百坪ニテ有之ハ由。然ル所御用地ニ相成  
ハ趣御座ハ。年月歴代相知不申。  
——文政寺社書上

龍谷寺 三崎町ニアリ、榮照山下號ス。足立郡新曾村妙顯寺ノ末ナリ。寛文二  
年當所玉林寺ノ境内ヲ借地シテ創立セシト云フ。又舊ハ上野清水町清水門所在ノ  
地ナリ。今此町  
本所ニ移サル。ノ地ニ起立セシカ、御用地トナリ、夫ヨリ今ノ地ニ移リシトモ  
傳フ。○中略。境内三百三十坪借地ナリ。  
——府内誌殘編

福相寺 開祖入寂寛文二年也。

房州長狹郡小湊誕生寺末  
谷中三崎

日蓮宗 松榮山福相寺

一、當寺開祖 自應院日信、寛文二壬寅年三月廿一日入寂。右當寺開ハ年月不  
知。  
——文政寺社書上

福相寺 三崎町ニアリ。松榮山下號ス。安房國小湊誕生寺ノ末ナリ。起立ノ年  
代詳ナラス。開山ヲ日信ト云フ。寛文二年三月廿一日寂ス。○中略。境内二百四  
坪、東叡山領年貢地ナリ。  
——府内誌殘編

自性院 中之郷ヨリ本所五之橋ニ移ル。

市街充實時代



中之郷成就寺末  
本所五之橋  
天台宗 顯松山安住寺自性院

一、境内御年貢地表間口田舎間拾四間五尺、奥行貳十間五尺。此坪三百坪三合四勺。

外ニ河岸附地面百六坪貳合八勺持添地。

一、當寺起立之隨圓法印開基ニ有、自性院之號。其頃之中之郷成就寺寺中ニ有之ハ所、年代不相知、中之郷鎮守稻荷社地ハ本寺成就寺十世祐圓時代當寺を引移し、別當寺ニ相立置、同寺門徒ニ御座ハ處、寛文二丑年横川堀敷々して御用地ニ相成、稻荷社地并寺院共五之橋ニ有替地被下置、社并寺共致造立ハ。然ル所延寶八申年大風雨ニ有寺致破損ハニ付、其後又々成就寺境内ニ寺引移し、社之其儘有之、其後元祿五申年四月成就寺添願を以、元地五之橋ニ寺造立之義相願ハ所、願之通被仰付ハ。

文政寺社書上

妙壽寺

妙壽寺 谷中清水町ヨリ猿江ニ移ル。

本山京都妙蓮寺末  
本所猿江村  
日蓮宗 本覺山妙壽寺

一、境内千百九拾貳坪餘。

内、古跡除地稻荷社地三百三拾七坪餘。

内、古跡御年貢地八百五拾貳坪。

内、三百拾六坪元寺地、五百三拾六坪求地。

一、開闢之義者、元來古跡ニ有谷中清水町ニ罷在ハ妙清寺々申寺之由ニ有、其比之開山開基者、舊記等燒失仕ハ有、相知レ不申ハ。然處寛文貳寅年上野爲御火除御用地相成、代地無御座ハニ付、其節住持本光院日受々申僧罷居ハ有、本所猿江茶屋長以抱屋敷ハ引寺之義御願申上ハ有、唯今之處ハ引移罷在ハ。其砌寺號妙壽寺々相改ハ、古來ハ當所之鎮守稻荷社之義者、當寺引移リ不申ハ以前ハ有之、別當住善寺々申寺有之ハ處、右寺潰レハニ付、跡稻荷別當ニ相成申ハ。○下

文政寺社書上

妙壽寺 猿江ニアリ。本覺山ト號ス。京妙蓮寺末ナリ。當寺ハモト谷中清水町ニ在リ、妙清寺ト號セシカ、年月詳ナラス回祿ニ罹リ記録ヲ失ヒタレハ、開創ノ事實ヲ傳ヘス。斯テ其地ハ住職日受ノ時寛文二年、東叡山火除御用地トナリ、今ノ地ニ移轉シ、寺號ヲ改メ、本寺二十世日崇ヲ請待シテ開山トス。日崇ハ市街充實時代



大慈庵

元祿二年二月四日寂セリ。斯テ又當寺轉地以前ヨリ接地ニ稻荷社アリテ別當ヲ住善寺ト云ヒシカ、廢寺トナリ、當寺ニテ社事ヲ管セシカ、元祿四年ニ至リ社地ヲ當寺ノ域内ニ併入シ、其社今存セリ。○中境内千百九十二坪餘、内八百五十二坪ハ年貢地、三百三十七坪餘ハ除地ナリ。府内誌殘編  
大慈庵 深川高橋ニ結庵ス。

上野國甘樂郡南牧村黒瀧山不動寺末本所猿江

禪宗黃檗派 萬徳山廣濟寺

一、猿江村之内境内御年貢地惣坪數千六百廿六坪九合六勺、内三百八拾八坪九合六勺古跡地、千貳百三拾八坪持添地。

一、當寺開闢之義者、寛文二寅年○葛西志 六年開山潮音初る深川高橋池田市之丞殿下屋敷内ニ草庵を結ヒ、大慈庵を號シ罷在ハ所、同九酉年上州館林宰相右馬頭様潮音を御歸依ニ召寄、御城内ハ新ニ一字御建立被爲遊、潮音義を右寺開山祖を被令成、萬徳山廣濟寺と號シ、御祈願申上罷在、大慈庵之儀者、則廣濟寺江戸宿坊ニ仕罷在ハ處、天和三亥年徳松君様被爲遊、薨去ハニ付、則館林廢城ニ罷成申ハニ付、寺後同時ニ廢亡仕、同年六月潮音義衆僧を引連

退院仕ハ節、金田遠江守殿を以、常憲院様御念誦佛觀音菩薩厨子入之尊像御戸帳葵御紋付并ニ御水引御添被下置ハニ付、奉守深川大慈庵ハ鎮座仕、住居罷在ハ處、元祿二巳年正月十八日右本尊并庵共弟子高源ハ相讓リ處、同五申年高源義、同人弟子龍岩ハ又相讓リ、住庵仕罷在ハ處、正徳二辰年嚴有院様三拾三回御忌御相當ハニ付、爲御追福、依公命改大慈庵、萬徳山廣濟寺と號、則一寺ニ取建、同三巳年古跡地ニ被成下、此砌本所猿江當時之場所ハ引移申ハ。

文政寺社書上

廣濟寺 猿江ニアリ。萬徳山ト號ス。上野國甘樂郡不動寺ノ末ナリ。寺傳ニ、寛文二年開山潮音高橋ノ地ニ草庵ヲ結ヒ、大慈庵ト號シ居住セシカ、其頃常憲院殿御歸依アリテ、同九年御封内上野國館林ノ城内ニ一字ヲ御創建アリ、潮音ヲ住職ニ命セラレシカハ、萬徳山廣濟寺ト號シ、大慈庵ハ江府ノ宿坊トセリ。府内誌殘編

〔附記一〕 屋鋪替

十六日○寛文三年正月○中略。

附記一  
屋鋪替

依田貞清

市街充實時代

依田小隼人○貞清



御材木石奉行被仰付ニ付、元屋敷上り、本所ニ多替地被下之。

——柳營日記

附記二  
上野近邊  
へ猪來ル

〔附記二〕 上野近邊へ猪來ル。

○寛文三年二月  
十一日 ○晴時々曇。  
○中略。

田村四郎兵衛○直平

上野近邊之在郷に、猪數多來に間、鐵炮を以可狩拂旨。

——柳營日記

南傳馬町三  
町目道路

靈元天皇寛文三年癸卯三〇紀元二三年三月十二日庚辰正〇庚辰、三是頃南傳

馬町三町目京橋區新道ヲ開ク。五月元〇寛文三年紀元二三年二更ニ同町河岸内京

橋區南傳馬町三町目ノ道幅ヲ擴ム。○撰要永久錄

南傳馬町三町目道路 新道開通及道幅擴張ノコト撰要永久錄ニ見ユ。

三町目新道新規出來ニ付證文

仕進し手形之事

一、今度我等共町内、西輪ニ三間之突抜御明ケ被成に付、道筋三間之分、大溝

埋申ニ付、南角之家主、御公儀様は手形指上被申に付、貴殿は加判被成に、右三間之通、大溝埋はるも、我等共大下水掃除仕は構ニ少も減不申に。爲後日連判仕進に以上。

寛文三年卯ノ三月十二日

南傳馬町三町目

喜左衛門

治郎左衛門

又右衛門

八左衛門

左兵衛

喜右衛門

七左衛門

高野新右衛門殿參

三町目河岸道幅改

差上申手形之事

一、我等共町之川岸、先年ニ三間半之道ニ多御座に處、此度京間四間之道幅ニ被仰付、則御定之杭御打被成に段、奉得其意に。當月廿五日切ニ道筋明ケ、并前壹尺之下水を付ふに仕可申に。若日限少成共遅々仕はハ、如何様ニも可被市街充實時代



仰付<sub>レ</sub>。爲<sub>レ</sub>後日手形仕差上申<sub>レ</sub>。仍如件。

寛文三年卯五月十五日

南傳馬町  
東角

源五郎

名主 新右衛門

月行事 重右衛門

御奉行所

是月<sub>二</sub>寛文三年<sub>三</sub>紀元三月<sub>三</sub>。辻番所制規ヲ示達ス。○玉露叢。殿有院殿御實紀。

辻番所制規  
事蹟

辻番所制規 辻番所制規ノ示達有リ。

同年<sub>三</sub>寛文三年<sub>三</sub>。ニ江戸辻番ノ儀ヲ被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>。

江戸辻番之覺

一、辻番所之儀、相定人數之通、晝夜無懈怠勤之、油斷をへからず。夜中ねその番をいたし、番所の戸を明置、切々見廻り、晝夜よかきらひ、狼藉者其外不審ふるもの於有之と、早速出合、留置、不届之子細有之ハ、主人に相渡をへし。主人知れをいハ、其辻番之月番へ申斷、指圖を得、町奉行所へ相渡をへし。但、公儀之辻番ハ、其支配の方へ相尋、町奉行所へ召連、可渡之事。  
一、奉行人御目付衆夜廻之面々、申渡を御法度之趣違背をへからざる事。

一、手負とる者來ハ、留置、主人有之ハ相渡をへし。主人不知いハ、月番よ申斷、町奉行所へ相渡をへし。公儀の辻番を其支配の方へ指圖を請、町奉行所に可渡之事。

一、辻番所よ男女共ニ當座の宿もかすへからず。惣る番所の前に人集め置へからざる事。附預り物仕間敷事。

一、辻番所にて食物其外目ニ掛りい物、商賣不可仕事。

右此旨を相守るへし。於令違背を、科之輕重よまとのひ、可被<sub>レ</sub>所罪科者也。

寛文三年三月日

奉行

——玉露叢

此月<sub>三</sub>寛文三年<sub>三</sub>三月<sub>三</sub>。令せらるゝは、辻番所定制のごとく人數を備へ、晝夜をこたりにく守らしむべし。夜中は不寢番をたて、戸をひらき置、時々見めぐりて、晝夜をかぎらず、狼藉又は不審のものよめ置て、その主へわたすべし。もし主よれざる時は、組合月番につげ指揮をうけ、町奉行へわたすべし。但、おほやけの辻番所は、その所管へ達し、町奉行へ引つれ參るべし。奉行目付并に巡夜のものもがらより示す法令違背すべからず、かつ雜説流言すべからず、手負のもの來らばよめ置、主あるものは其主にわたすべし。主知れざるは、月番につげ







右御目見、御留守中彌堅可被相守之旨被仰付、御黒印請取之。

詰 衆 諸番頭 諸役人

遠國役等

右御留守ニ罷在ハ故、各御目見有、御次之間ニ、御法度書御黒印一覽。  
十日○寛文三年四月 十日○曇 十日○中略

黒書院、已刻出御、火之番被仰付。

上十日 戸澤能登守○誠

中十日 淺野因幡守○治

下十日 眞田伊賀守○信

加 仙石越前守○俊  
加 木下兵部○貞  
加 土方備中守○雄  
加 松平備後守○恒  
加 相馬長門守○忠

右之内越前守兵部備中守之、今年差出之、各御目見有、御留守中無油斷情入可申付也。

定火消 遠山半九郎○伊

近藤彦九郎○用

花房外記○幸

安藤内藏介○重

堀田五郎左衛門○輝

蒔田權之助○定

右之面々御目見、御留守中情入可申旨也。

二九火之番 永井右近大夫○尙

右御目見有、唯今迄水野監物○善、兩人ニ、雖相勤、監物今度御供仕ハ間、右

近大夫壹人ニ、情入可申旨也。

夜廻り晝廻り之衆被爲召之、御留守中當番日番共相廻り、不審成者在之ハ、改

可申旨也。○中略

御船手 坂井八郎兵衛○成

御留守中三浦走水御番可相勤旨、被仰付之。是ハ佐野與八郎○宣、相果申ニ付

當座之御役、則御暇金貳枚、時服二羽織坂井八郎兵衛被下之。

○寛文三年四月 十一日晴。

午刻黒書院出御

紅葉山御佛殿火番

永井日向守○清

御宮火之番

松平出雲守○治

同所御宮火之番

土屋民部少輔○直

御佛殿火之番

保科越前守○經



増上寺火之番

上野御番所火之番

中之丸御方屋敷火之番

淺草御藏火之番

知恩院居所火之番

天樹院御方屋敷火之番

金立軒（賴直）  
高力左近大夫（隆長）  
加藤内藏介（明友）

湫新五郎（清芳）  
杉浦市右衛門（正綱）

牧太兵衛（勝秋）  
倉橋内匠（久盛）

津輕越中守（信政）

片桐石見守（貞昌）

堀田權右衛門（一純）  
土屋長三郎（政重）

右之面々御目見、御留守中情入可申旨、被仰渡之。

御作事奉行、御普請奉行、御納戸頭、御腰物奉行、組頭、右被召出、萬事入念可申付之旨、被仰出。

○寛文三年四月十三日曇時々晴。

日光依御登山、江戸御本城御羽織袴出御被遊、巳刻神田橋より本郷通被爲成、平

柳御殿御晝休足、御膳被召上、畢る出御。○中略。

江戸御本城御留守、晝稻葉美濃守、夜松平式部大輔、當番之諸物頭諸番頭各被

勤之。○中略。

○寛文三年四月廿四日晴。

卯下刻、岩付立御、爲御見送、阿部伊豫守○正春、平柳迄參上、平柳御休所休所とる

御膳被召上、即刻出御、江戸御本城に未上刻御入城。入御之時、御玄關前稻葉美

濃守出向御目見、其外諸番頭諸役人於所々ニ拜尊顔。諸大名在番之面々、不殘

伺御機嫌登城也。——柳營日記

五日○寛文三年四月、雁間詰諸番頭諸物頭大目付目付、そのほか布衣以上の諸有

司、こたび供奉にさゝれし輩をめして、御黒印の條約并に下知狀諸法度をよ

み聞しむ。右筆久保吉左衛門正元、これをよむ。御黒印の文にいふ、こたび日光

供奉の時、協道すべからず、行殿のうちにて萬一喧嘩口論あらむ時、兼令のご

とく當直かぎりにはからふべし、并に市井にてさあらん時は、その地在あふ

ものこれを沙汰し、猥にかけ集るべからず、旅館にてもし火災あらん時は、有

司の外、出あふべからず、こたび供奉のほど、人かへしの事、停止せしめ、畢ぬ若

申むねあらば、府にかへりて沙汰に及ぶべし、但重科の者は、この限りにあら

ず、奉行人につけて裁斷をうくべし、着坐の刻馬より下りて後、その次第を亂

すべからず、并に書立の外、旅館へ供奉すべからず、目付の輩并に番頭諸奉行



の事は沙汰に及ばず、たとへいづれのものもがらつぐる事ありとも、令旨にそむくべからず、狼藉のものはそのさまにより申付べし、小荷駄は右のかたへ通すべし、たゞし山道にては小荷駄山のかたへつけて返すべし、諸器械入交りて通すべからず、をし買をし賣、停禁せしむ、みだりに竹木剪伐すべからず、かつ作毛の場へ馬をはなち置べからず、違犯のやからあらば、つみの輕重にまたがひ命ぜらるべし、目付のともがらならびに番頭、諸奉行、人見のがしきゝのがさば曲事たるべし、その他は下知狀にのするものなりとぞ、また老臣連署の下知狀には、行殿ならび近地にて喧嘩、火災などおこらんとときは、酒井雅樂頭、忠清、阿部豊後守、忠秋、久世大和守、廣之土屋、但馬守、數直、をよび別紙書立のほか、まかるべからず、をのゝゝ寓舎にありて御下知をまもるべし、御宿城にて喧嘩、口論、火變などあるとき、そのところに伺候のともがらは、表裏の門のゝゝ便にまたがひひろき地にいで、指揮にまかすべし、御宿城のほか、御前後にまたがふともがらは、そのところにありて、指揮をまつべし、御宿城にて火消役、水野半左衛門守政、秋山十右衛門正房、永井十左衛門直益、山口平兵衛重直、撲滅し、ならびに城主の家士に令すべし、非番の目付指揮をつた

ふべし、各所の御宿城にて、非番の目付巡夜すべし、日光山にてもし火災あらんには、家に在ともがら力をつくして撲滅し、其他の輩は各やどりに在て延焼なからしむべし、されど火消役の輩はまかりてもはら消防すべし、市井の火災は、その地かぎりにはからふべし、但火消役の輩はまかりむかふべし、この旨を守るべし、もし違背するものあらば、罪の輕重を査覈して、嚴刑に處せらるべき旨、かたく仰出さるゝ所なり、よて執達件のごとしとぞ

七日○寛文三年此日、松平式部大輔忠次を御座所にめして、御黒印の條約を授らる。その文にいふ、こたび留守の事、保科肥後守正之、稻葉美濃守正則奉はれば、相議して、御爲よきやうにはからふべし、本城にてたとへ何等の事おこるとも、留守居の輩并番頭相議してはからふべし、何事によらず會議の刻、私意をはらず、多分に隨ふべし、城外にて何等の事あらんとも、一切出べからずとなり。

九日○寛文三年この日、留守命ぜられし諸門番、火番の輩、雁間詰、留守居、留守居番、三番頭、町奉行、勘定頭、新番、先手、歩行、小十人、納戸、舟手の頭、中川番、遠國奉行等、をめて、御黒印、法度等を授らる。其令にいふ、こたび留守の事、保科肥後



守正之松平式部大輔忠次、稻葉美濃守正則奉はれば、本城は式部大輔忠次相議して令すべし、何等の事起るとも、會議の刻私意を張らず、多分につきて、御爲よきようにはからふべし、城外にて何等の事おこるとも、城中番直の輩一切出べからず、城中にては各處番直の輩、その處かざりに相議してはからふべし、殿中番直の輩は、かねて定めをく法制のむねいよ／＼かたく守るべし、火災あらん時、殿中伺候の輩は、美濃守正則并に番頭指揮に任すべしとなり。また令せらるゝは、こたび日光山に詣たまふ道の事、神田橋門より本郷を御通過あれば、とほらせ給ふ市井わけて心を入洒掃すべし、道路あしき地は、一兩日をかざり、淺草砂もて中たかく修築すべし、御留守のほど、市井の木戸、夜亥の刻よりとざし、ゆきゝのものは町ごととに遞送すべし、但そのゆくさをたづねをくりとほすべし、中番貳人ある町は、夜ばかり一人をまし、三四人の町は、増番に及ばず、前後の木戸損壞せば、すみやかに修理すべし、ならせ給ふ日は、をの／＼街の名主月行事、その地にありて、専ら警火の事こゝろいるべしとなり。

十日○寛文三年 戸澤能登守正誠、仙石越前守改俊、淺野因幡守長治、木下兵部

利貞、真田伊賀守信利、土方備前守雄豊、松平備後守恒元、相馬長門守忠胤、御參の間、府内火番にさゝれ、面命あり。火消役も同じ。永井右近大夫尙征は、これまで水野監物忠善と共に、二丸火番奉りしが、監物忠善供奉すれば、右近大夫尙征一人にて心いるべしと、面命あり。晝夜巡番の輩も同じく、面命のむねあり。船手頭坂井八郎兵衛成令かりに三浦走水の番命ぜられ、暇給ひ、酒井修理大夫忠直病臥にて、今市御旅館の番を松平甲斐守輝綱に仰付らる。

十一日○寛文三年 紅葉山御宮靈廟、芝の火番、上野番所の火番、淺草米廩、知恩院門跡の住所本理院殿、天樹院御方の火番拜謁し、作事普請奉行、納戸頭、腰物奉行頭もあなじ、共に心いるべき旨、面命あり。

十二日○寛文三年 東叡山火番奉りし輩も拜謁し、心いるべきむね、面命あり。○中略 保科肥後守正之、松平式部大輔忠次仰により、後閣に參り、御留守の令をつたふ

十三日○寛文三年 日光山御發程あり。御羽織袴に出立給ふ、黒木書院にて保科肥後守正之、松平式部大輔忠次拜謁し、山吹間にて留守居、菊間にて番頭、小姓組、番所の北縁にて右筆、柳間にて鑿員、同所勝手にて小十人組、玄關前にて兩



番組頭其門外にて職免されし輩、同じ番所前にて先手頭、中門外にて雁間詰  
 父子、二丸門前にて大番頭、百人組番所にて松平周防守康映、松平美作守定房、  
 下乗所にて普第の輩、大手門前にて酒井左衛門尉忠義、松平越中守定重拜送  
 す。微賤の御家人も御道筋に在宅せるは、ことごとく門前に出て拜し奉る。鹵  
 簿の次第は、まづ玉藥箱、後にその頭、矢箱、後にその頭、次に鐵砲、百人組二組、次  
 に弓、先手組二隊、次に左目付、右使番、各持鎗一本、次に左小十人目付、右徒目付、  
 次に御側三人、次に持弓持筒、左右各一隊、次に虎皮拋鞆の鎗、その奉行是を監  
 す。次に御乗替の馬、同轎、挾箱、弓立、鞆臺、笠、立傘、床机、次に徒士三隊、次に長刀、左  
 右に列し、腰物筒もおなじ。こゝに乗輿を奉ず。左に徒頭、右に小十人頭、御後に  
 左藥込のもの、右に腰物持、次に小道具、左右に小十人組、次に御手筒、左右につ  
 らなり、つぎに徒目付中央に立、左右に中間目付、小人目付、挾で行。次に徒士十  
 人、こゝに御乗馬をひく。次に左持筒頭、次持弓頭、次に旗、長持、馬印、次に旗竿、左  
 右にわかれて持旗奉行これを監す。次に御側、次に小姓組番頭、次に小姓並に  
 中奥の輩、次に小納戸、次に目付使番各二人、次に小姓組與頭、組の番士、次に左  
 小十人頭、右徒頭、次に徒目付、左右に中間目付、小人目付、つらなる。次に少老二

人、次に徒押、左右に中間小人、後に供奉の人々の從者等、次に諸道具奉行、次に  
 人々の鐵炮、鎗、弓、挾箱、次に牽馬なり。かくて神田橋より本郷をへて、平柳の御  
 旗亭に御やすらひあり。○下略。  
 廿四日○寛文三年四月○中略。此日未刻、本城へ還御なる。稻葉美濃守正則、玄關に拜迎し  
 諸番頭、諸有司各所にて拜し、諸大名はまうのぼり御けしき伺ふ。保科肥後守  
 正之、松平式部大輔、忠次に、御手づから熨斗勝栗を賜ふ。

嚴有院殿御實紀

覺

- 一、今度日光へ神田橋より本郷道を被爲成、成の間、御道筋之町々を、取分念を入  
 掃除可仕。海道惡敷所を淺草砂ころ中高一兩日中急度築立可申事。
- 一、御留守中を、町中之木戸夜四ツ打、ハハ木戸を打、往來之もの町送り可  
 仕。但し其通、人を何方へ通り被申、哉と相尋、先々へ送り通し可申事。
- 一、中番之儀、貳人有之町を、夜計壹人増番差置可申。只今迄中番三人、四人差  
 置、町ハ増番無用之事。
- 一、前後木戸を、おまゝハハ、早々修覆可仕事。



一、御成之日、町々名主月行事何方へも不罷出火之用心之儀、裏店迄念入切々相觸可申事。卯○寛文三年四月  
右ハ四月十日○寛文三年御觸

覺

一、日光御留守中、町中木戸打往來之者送儀、今晚より無用ニ可被致儀。并ニ名主月行事付居儀、是又無用可被致儀。

一、日光御留守中ニ増人差置儀處、今晚より増人差引可被申儀。中番之儀、公家衆御下着儀事、御逗留中、如前々中番差置可被申儀。彌火之用心無油斷、名主月行事可被申付儀以上。

四月廿四日○寛文三年町年寄三人

——正寶事錄

五月廿三日庚寅○寛文三年(紀元二三三)○庚寅(正統)○寛文三年(紀元二三三)○庚寅(正統)○寛文三年(紀元二三三)○庚寅(正統)將軍家綱川○德諸侯ヲ召シテ、武

家法度ヲ申命シ、殉死ヲ禁ズ。○柳營日記。嚴有院殿御實紀。天享吾妻。鑿。國朝舊章錄。土津神公言行錄。土津遺事。

武家法度申命及禁殉死 武家法度ハ、前代ノ割ニ多少ノ潤色有リ。

廿三日○寛文三年五月○中略

大廣間出御。壹萬石已上國持并御普代惣大名登城、御次間○一、同御目見於

武家法度申命及禁殉死

武家法度申命及禁殉死

御前被仰舍事有終入御也。其後林春齋法印○春武家之諸法度御條目書讀之、各聽之也。御條目廿一ヶ條を先代并被仰出所也。當御代ニる今造之在之外、御一ヶ條別紙出ル。

覺

一、殉死ハ古より不義無益之事ナリトイマシメ置トイヘトモ、被仰出無之故、近年追腹之者餘多有之。向後左様之存念有之者ニ、其主人常々殉死不仕様ニ堅可申含。若以來於有之ハ、亡主之不覺悟越度タルヘシ。跡目之息モ不令押留、不届ニ可被思召者也。

寛文三卯五月廿三日

御座○之間にて武家諸法度春齋讀之、終る兩典御三家方御對顔、夫々黒木書院出御、讚岐守○松平玄蕃頭○井伊直澄御目見、何も武家諸法度被仰出之旨被仰聞。

從先御代○仰出武家諸法度之儀、今般聊添剝之、向後存此趣、可相守之旨上意。

肥後守○保科正之式部大輔○松平忠次御挨拶申上、入御。——柳營日記

廿三日○寛文三年五月○御座所にて儒臣林春齋武家諸法度を讀て御聞に備ふ。

市街充實時代



次に甲館兩卿三家の方々拜謁せらる。つぎに黒木書院にて松平讃岐守頼重。井伊玄蕃頭直澄拜謁す。今日御法令仰出さる。旨面命あり。次に大廣間にて國持普第の輩始め諸大名悉く拜し奉る。先代の法令聊か潤色す。今より後嚴に遵奉すべき旨面命あり。保科肥後守正之。松平式部大輔忠次御取合して、奥に入り給ふ。其後春齋春勝之をよむ。其文に曰。文武弓馬の道。專可相嗜事。大名小名在江戸交代の義。每歲守所定時節。可被參觀。從者の員數。彌不可及繁多。以其相應。可減少之。但公役者任教令。可隨分限事。新儀之城郭構營。禁止之。居城隍壘石壁以下敗壞之時。達奉行所。可受其旨也。櫓堀門等は。如先規。可修補事。於江戸并何國。縱何等之事。雖有之。在國之輩は守其所。可相待下知事。雖於何處而行。刑罰役者之外。不可出向。但可任檢使左右事。企新儀。結徒黨。成誓約之義。制禁事。諸國主并領主等。不可被私之諍論。平日須加謹慎。若有可及遲滯之義者。達奉行所。可受其旨事。國主城主一萬石以上。近習并物頭者。私之不可結婚事。附與公家於結縁邊者。向後達奉行所。可受差圖事。音信贈答。嫁娶儀式。或饗應或家宅營作等。彌可爲簡略。其外萬事。可用儉約事。衣裳之品。不可混亂。白綾公卿以上。白小袖諸大夫以上聽之。紫袷。紫裏練。無紋小袖。猥不可着之事。乘輿者一門之歷々。國

主城主一萬石以上。并國持大名之息。城主暨侍從以上之嫡子。或年五十以上。或醫陰兩道。病人免之。其外禁濫吹。但免許之輩は各別也。至于諸家中。於其國撰其人。可載之事。本主之障有之者。不可相抱。若有叛逆殺害人之告者。可返之。向背之族者。或返之。或可追出之事。陪臣質人所献之者。可及追放死刑時者。達奉行所。可受其旨。若於當座有難遁儀。而斬戮之者。其子細可言上事。知行所務清廉沙汰之。不致非法。國郡不可令衰弊事。道路驛馬舟梁等無斷絕。不可令往還之停事。私之關所新法之津留制禁之事。五百石以上之船停止之。但荷舟者制外之事。諸國散在寺社領。自古至于今所附來者。向後不可取放事。耶蘇宗門之義。於國々所以。彌可禁止之事。不孝之輩於有之者。可處罪科事。萬事應江戸之法度。於國々所々。可遵行事。右之條々。准當家先制之旨。今度潤色而定之。訖。堅可相守之者也。又一條を別書してしめさる。は。殉死は古より不義無益の事なりといましめ置ると雖も。仰出されし事なければ。近年殉死の者多し。今よりさる心がまへする者あらんには。其主より常によく曉諭すべし。若此後殉死あらば。亡主の不覺悟なるべし。當主も又之ををしとせめざるは。いかにも不良のわざとおぼし給ふべしと也。

——嚴有院殿御實紀



一 同月寛文三年五月廿日、今年始テ殉死御制禁ノ趣被仰出之。略。下

——天享吾妻鑑日萬天

——國朝舊章錄

一 同文。寛三年癸卯殉死制禁。

同文。寛三年公方様々被仰渡、天下一同殉死御停止被成、神君正之。保科被仰上之。保科と云ふよ、如此天下一同此御停止を成たるなるべし。

——土津神公言行錄

同文。寛三年五月廿三日、大君嚴有武家の法度廿一條を出して、列候およひ士大夫大君まゝ勉す。此日營々朝して、御前大君列候を公應對流るゝる如し。酒井雅樂

頭忠清後來殉死を禁止さるゝ此旨をのふ、公嘆美していとく、これ垂仁孝徳

以來乃仁政よしと、本朝の憲令なまじ。元。土津事實。○土津言行錄。○保科正之。諸秦風黃鳥篇并

小朱子殉葬の論を聞よおよんで、不仁不知の事、或狄の弊俗なる事を悟ふ。又某々其篇中、臨穴憫々の文義を發明し、甚嘆慨してやまむ。其後寛文元年閏八月公封内よ令殉死を禁す。

——土津遺事

〔附記〕 旗下士養子制

廿三日寛文三年五月。麾下の輩、財貨をもて人の養子となる事は、堅く禁ぜらるゝ旨仰出さる。

——嚴有院殿御實紀

是月寛文三年五月。評定所會議ノ式日ヲ告示ス。嚴有院殿御實紀。

評定所式日告示。嚴有院殿御實紀ニ、此月寛文三年五月。令せらるゝは、評定所會議

の事、月ごとに四日十二日廿二日を式日とさだめ、その日は老臣一人出座し、

諸奉行會集すべし、六日十四日廿五日を立合とさだめ、諸奉行會集すべし、九

日十八日廿七日を自宅の會集とさだめ、諸有司互に會集すべしとなり。

〔附記〕 番士當直制

此月寛文三年五月。諸番士當直の制は、直日を曠ふせる者は、士籍を削るべし、

番頭卯の後まうのぼらざるは、其としの采地租税を收公あるべし、夜直に

酉の刻過てのぼるは、贖銀二十枚を出すべし、他隊と交替のとき、おのゝ

相對してかはるべし、同隊もこれにおなじ、上直の時刻遅緩せるは、銀二枚

を出すべし、當直のときゆへなくして他席にまかるもおなじ、當直の日急

事あるとき、頭番横目につけずしてまかんでば、士籍を削るべし、そのさま

によりては、銀二枚を出さしむべし、紙燭を點ずること、夜詰過てのち定め

る燈の外に燈を點ぜば、是も銀二枚を出すべし、戸壁に漫書せば、年長の者

は刑に處し、幼齡は流罪たるべし、犯人まれば、其席にありあふ當直の

評定所式日告示

附記 番士當直制



者銀二枚を出すべし、但番士の多寡によるべし、何事によらず、法制を違犯せしもの、并に動止みだりなる者は、あるは死刑流刑、あるは贖刑、その輕重によるべし、番頭組頭曉諭とゞかずして、違犯せる輩あらば、官長より贖銀出すべし、事のさまによりては嚴科たるべし、城中にて若黨并に奴僕何事によらず法制をそむきみだりのふるまひなさば、本人は成敗すべし、見のがしたらばその地の番士過失とし、銀五枚をいだすべし、條件のうち聞えずしてかなはざるは、時をえらばず聞え上べし、毎月晦日に法制の可否かならず聞え上べし、時によりては老臣のもとに申出べし、この旨かたく守るべしとなり。武家嚴制 錄補遺。

寶樹院靈牌所修理

六月三日己亥○寛文三年(紀元二三三三)己亥、三正綜覽。關宿○下國總。城主板倉重常○隱岐守。命ヲ受ケテ、上野寶樹院○將軍家網母青木氏。靈牌所○市内下谷區。修理ヲ助役ス。廿四日庚申○寛文三年(紀元二三三三)庚申、三正綜覽。寄合島正長○角左衛門。小姓組甲斐庄正親○喜右衛門。奉行ヲ命ゼラル。四年甲辰○寛文四年(紀元二三三四年)甲辰、三正綜覽。十月六日甲子○甲子、三正綜覽。上棟。十一月朔日己丑○寛文四年(紀元二三三四年)己丑、三正綜覽。工就リテ、重常○板倉。及正親○甲斐庄。正長○島。

寶樹院靈牌所修理

受賞ス。○柳營日次記。嚴有院殿御實紀。  
寶樹院靈牌所修理 顛末左ノ如シ。  
三日○寛文三年六月。

板倉隱岐守○重常。

寶樹院殿御靈屋手傳被仰付之。

廿四日○寛文三年六月。

寶樹院殿御堂修復奉行、

嶋角左衛門○正長。

甲斐庄喜右衛門○正親。

右被仰付之。

柳營日次記

三日○寛文三年六月。此日板倉隱岐守重常、寶樹院殿靈牌所修理の助役仰付らる。

廿四日○寛文三年六月。寄合島角左衛門正長、小姓組甲斐庄喜右衛門正親、寶樹院

殿靈牌所修理奉行仰付らる。

廿日○寛文四年四月。東叡山大猷院殿靈廟に詣給ふ。○中略。寶樹院殿靈牌所修理にあ

づかる輩、筋違橋門外にて拜謁す。

嚴有院殿御實紀

柱立。

市街充實時代



廿五日○寛文四年五月

上野寶樹院殿御靈屋御柱立ニ付、豊後守○阿部忠秋被遣之、毘沙門堂へ二種一荷被遣之。右之奉行等惣中ニ二種三荷被下之。  
——柳營日記

廿五日○寛文四年五月東叡山寶樹院靈牌所柱立により、阿部豊後守忠秋御使し、毘門へ二種一荷つかはされ、奉行其他諸有司へ二種三荷たまふ。  
——嚴有院殿御實紀

上棟

○寛文四年十月六日甲子晴。

寶樹院殿御靈屋御造營ニ付、卯上刻上棟有之。木原内匠役之。御太刀女成代。金貳枚。御馬黒毛。鞍大綱懸之。被下之。依之御作事惣奉行美濃守○稻葉正則手傳板倉隱岐守○重井常上河内守○正加々爪甲斐守○直澄御目付猪飼半左衛門○久正御徒頭石谷五右衛門○武清組共并被遣之。  
——柳營日記

六日○寛文四年十月寶樹院殿靈牌所上棟あり、惣奉行稻葉美濃守正則始め、諸有司まかりむかふ。大工棟梁木原内匠重弘に友成の御太刀黒毛の馬を給ふ。  
——嚴有院殿御實紀

供養料加増

○寛文四年十月九日丁卯晴。

毘沙門堂御門主○僧公海

御目見。是ハ今度寶樹院殿御靈屋出來、上棟相濟ニ付、御靈領三百五拾石御加増都合四百石被爲、附之旨、御直ニ被仰出之ハ付る。  
——柳營日記  
九日○寛文四年十月寶樹院殿靈牌所上棟ありしにより、供養料三百五十石加へ、四百名よせ給ふ旨仰出さる。  
——嚴有院殿御實紀

靈像

○寛文四年十月廿五日癸未晴。地震。○中略。

一、寶樹院殿御靈像今度出來ニ付、大佛師左京に銀百枚被下之。  
——柳營日記

授賞

○寛文四年十一月朔日己丑晴。○中略。

一、時服五。羽織。

市街充實時代

御手傳

板倉岐隱守



金五枚。  
同三ツ、  
羽折。

右寶樹院殿御靈屋出來ニ付、被下之。  
○寛文四年十一月二日陰。

一、寶樹院殿御靈屋出來ニ付、

銀三十枚。  
羽折。

同廿枚。  
羽折。

上ニ同斷。

同十枚。  
羽折一ツ、。

二〇四  
御造營奉行

甲斐庄喜右衛門

嶋角左衛門

板倉隱岐守從者

家老

都筑治左衛門

物頭

梅戸左兵衛

同

新見彌五兵衛

下奉行

松原七郎左衛門

杉浦與兵衛

右ニ、下奉行相勤ニ付被下之。

銀三十枚。

同廿枚。

御被官大工

鈴木修理

鈴木與次郎

右之通被下之。

——柳營日記

十一月朔日○寛文四年○中略。板倉隱岐守重常寶樹院殿靈牌所の助役しければ時服

五羽織賜はり、奉行せし寄合嶋角左衛門正長・小姓組甲斐庄喜右衛門正親、金

五枚・時服三羽織一づゝ給ふ。

二日○寛文四年十一月。板倉隱岐守重常が家士等助役の褒として、銀・時服・羽織給ふこと

差あり。——嚴有院殿御實紀

重常○新十郎。隱岐守。從五位下。致仕號悠山。

四年○寛文。十一月朔日、寶樹院御方の廟所をたすけつくりしにより、時服五

領羽織一領をたまひ、そのことにあづかりし家臣等にも、時服・白銀等をた

まふ。——寛政重修諸家譜

〔附記〕 淺野氏一木屋鋪

光晟公○淺野。

寛文三年癸卯

一、六月九日、麻布一木村ニある雲嚴寺屋敷御所望被遊、表三十間裏入貳拾間

御買上有之。（御直撰ニ無之）——侯爵淺野家回答

市街充實時代



東福門院使人宅地

東福門院使人宅地事蹟

東京市史稿

七月三日戊辰○寛文三年紀元二二三東福門院德川氏○和子ノ使人ニ宅

地ヲ鐵炮町○市内日橋區ニ給ス。○柳營日次記。嚴有院殿御實紀。

東福門院使人宅地 傳フラク、

三日○寛文三年七月○中略

女院御所御使參府之砌、當地逗留中、旅宿無之ニ付、於鐵炮町之會所表十七間餘裏十七間餘宅地被下之。

柳營日次記

三日○寛文三年七月女院より七夕の賀儀として、卷數匂袋進らせ給ふ。またこの御使旅宿の地を鐵炮町にて給ふ。

嚴有院殿御實紀

〔附記一〕 喧嘩

十八日○寛文三年七月○中略

去十二日○寛文三年七月坂井八郎兵衛御預之水主一人、靈巖島相通刻、其所之町人と令口論、被打擲付る。逐電、依相殘水主合一味、翌早天相越、打返之訖、依之御穿鑿之處、理不盡之儀有之付る。水主三十人之内十貳人追放。

柳營日次記

附記二 鐵炮洲勸進能

廿五日○寛文三年七月

於鐵炮洲保生太夫勸進能仕付る、見物可仕之旨、老中壹人つゝ、可有見物之旨、被仰出之。

廿六日○寛文三年七月○中略

雅樂頭○酒井忠清上意ニカ、勸進能見物罷越。

朔日○寛文三年八月○中略

一、於鐵炮洲保生太夫勸進能仕付、爲御禮扇子捧、今日御禮。

柳營日次記

是月○寛文三年紀元二二三神田橋門○市内區其他ノ門衛規則ヲ定ム。○教令類纂

神田橋門其他門衛規則 教令類纂ニ據ル。

寛文三癸卯年七月神田橋御門勤仕之覺此類之御門同前

一夜中ニも、冠木御門者明置、本御門者、從子刻卯刻迄闔之、往還之者來以者、斷次第御門明以る可相通。

但、不審之子細於有之者可改之事。

市街充實時代

二〇七

神田橋門其他門衛規則其

他門衛規則其

事蹟



一、女之儀、夜中從酉刻以後者、手形を取可相通之、但不審之義有之者各別之事。  
一、御門廻者不及沙汰階級橋廻入念掃除可申付之、番代節と猶以掃除可相渡事。

附、御門脇土橋等之塵芥、御堀に捨るゝ事。

右可相守此旨書面之外者、諸屋具等向後不及手形可相通、但不審之儀有之者可爲各別者也。

卯七月 右十三本御制法。慶延令條。

寛文三癸卯年七月

外曲輪御門勤仕覺此類之御門同斷。

一、晝夜共み冠木御門本御門明置之、往還之男女無滯可通之、但不審之儀於有之者各別之事。

一、御門廻と不及沙汰階級橋廻入念掃除可申付之、番代之節と猶以致掃除可相渡事。

一、御門脇大橋等之塵芥、御堀に捨へらさる事。以上。

卯七月 右十三本御制法。

寛文三癸卯年七月

三丸之内に不入覺

一、辻に商買物

一、諸勸進

一、伊勢愛宕之山伏

一、代待

一、髮結

一、古着買

一、古のち買

一、巡禮

一、乞食

右之分不可入之、但振賣者可通之者也。

卯三年○寛文 七月日 右十三本御制法。

八月五日庚子三年○寛文三年(紀元二三二) 將軍家綱川○徳 諸有司ヲ大廣間ニ

召シ、諸士法度ヲ申命ス。殿御實紀。

市街充實時代



諸士法度申命事蹟

諸士法度申命 嚴有院殿御實紀ニ據ル。

五日○寛文三年八月大廣間に渡御あり、雁間詰奏者番初め諸有司をめして、先代定られし御法令を損益ありて仰出さるゝむね命あり。儒役林春齋春勝に讀まめらる。其令にいふ、忠孝をはげまし、禮法をたゞし、常に文道武藝を心がけ、義理を專にし、風俗を亂べからざる事。年役如定、旗弓、鐵炮、鎗、甲冑、馬、皆具諸色兵具、并に人積無相違、可嗜之事。兵具之外不入道具を好、私之奢致べからず、萬儉約を用べし。知行損毛或船破損、或火事、此外人も存じたる大なる失墜は各別、件之子細なくして進退不成、奉公難勤輩は、可爲曲事事。屋作之營、不可及美麗、向後彌分限に應じ、簡略たるべき事。嫁娶の儀式、不可及華麗、自今以後彌分限に應じ、可省略、縱大身たりといふとも、長柄つり輿三十丁、長持五十掉に過べからず。惣ゝ以此數量分量に應じ、可沙汰事。振廻之膳七五三等之饗應之外は、本具并盃之臺、金銀彩色、絲の作り花停止之。但し晴之會合嫁娶之時、木具盃之臺は用捨すべし。惣而振廻之義、かるく致し、酒亂醉に及べからざる事。音信之禮儀、太刀、馬代、黃金一枚、或銀十枚、分限にまたがひ、以此内可減少之。或銀一枚、青銅三百疋、禮物百疋に至る迄、不用之、并小袖十、如右可減少之。雖爲大身、

不可過之。惣而諸色以此積用遣ふべし。國持大名と禮儀取かはし、のときも、此上之華麗致すべからず。勿論酒肴等も可爲輕少事、行死罪者有之時者、役人之外一切其場不可駈集事。喧嘩口論、堅制禁之。若有之時、令荷擔者、其咎可重於本人。惣而喧嘩口論之刻、一切不可馳集事。於城中萬一喧嘩口論有之節者、其相番中可計之、猥他番より不可寄集。番無之席は、其所へ近輩可取扱之。令油斷者、可爲越度事。火事若令出來者、役人并免許之輩之外、不可駈集。但役人差圖之者は、可罷出事。本主之障有之者、不可相拘。叛逆殺害盜賊人之届あらば、急度可返之。其外輕咎之者に至ては、侍者届次第可追拂之。小者中間は、可返之。於難澁は、番頭組頭令相談、可濟之。頭なきものは、其并之輩、可致談合。若有滯所者、達役者可受差圖事。於諸家中、大犯人あらば、縱雖爲親類縁者、直參之輩、取持相かこふべからざる事。何事にをいても、不可致私之諍論。若申旨あらば、番頭組頭可令相談之。頭なきものは、其并之輩に及談合、可濟之。滯儀あらば、達役者可受其旨事。百姓訴論之事、双方之番頭組頭、遂穿鑿、其組之荷擔不致之、相互令談合、可捌之。頭なきものは、其並之輩、寄合、可濟之。滯儀あらば、達役者可受其捌。然上者、地頭代官は、勿論番頭組頭并其列之輩、不及出於評定所事。知行所務諸色、相定年貢



所當之外、非法をなし、領地亡所にいたすべからざる事。新地之寺社建立、彌可令停止之。若無據子細有之者、達奉行所可受差圖事。跡目之義、養子者存生之内可致言上、及末期雖申之、不可用之。雖然其父五十以下之輩は、雖爲末期依其品可立之、十七歳以下之者於致養子は、吟味之上許容すべし。向後は同姓之弟同甥、同從弟、同又甥、再徒弟、此内を以て相應のもの撰べし。若同姓於無之は、入聲娘方之孫、姉妹之子、種替之弟、此等は其父之人がらにより可定之。自然右之内にて可致養子者於無之は、達奉行所可受差圖なり。縱雖爲實子筋目違たる遺言立べからざる事。嫁娶并養子之儀付而貪たる作法不可仕事。結徒黨致荷擔或妨をふし、或落書、張文、博奕、不行義之好色、其外侍に不似合事業、不可仕事。徒若黨衣類紗綾縮緬平島羽二重絹紬布木綿之外、停止之事。弓、鐵炮之者、絹紬布木綿之外、不可着之。小者中間衣類、并に布木綿可用之事。物頭諸役人、萬事付而不可致依怙。并諸役者其役之品々、常致吟味、不可油斷事。家業無油斷可相勤事。右之條々、依先制之旨損益之、今度定之畢、堅可相守之。若於有違犯之族者、糺科之輕重、急度可處罪科者也。

十九日甲寅○寛文三年八月眞言宗根生院御祈所。近年年貢地居住、則其以爲寺地被下之。關西ノ寺領ニ代ヘ

根生院賜地

テ湯島○市郷區。ニ寺地ヲ賜フ。○公儀日記。柳營日

根生院賜地 左ノ如シ。

十九日甲寅眞言宗根生院御祈所。近年年貢地居住、則其以爲寺地被下之。

——公儀日記

十九日○寛文三年八月

一、根生院事、從大猷院様御代到于今、御祈禱被仰付付る、彼寺領百石上方ニ有之、如願於關東替被下之、剩只今迄借地直被下之旨也。——柳營日次記

山城國宇治郡報恩院末  
金剛寶山延壽寺根生院

湯島不唱小名。○中略。

開山榮譽、土州幡多縣の人あり。春日局此親族にて、字文秀房、父は齋藤氏某あり。同縣石見寺榮雅法印を師とし出家して和州初瀬山にて勤學を。然ルも春日局日頃榮譽茂密に尋給ふといへとも、其所在茂知るものあり。或日知恩院今大塚護持院。第三世榮増法印に尋給ふに榮譽は今大和國初瀬山に勤學し、予も法類なりを答ふ。時より局密に榮増に託して榮譽茂初瀬山より呼迎ひて、猶子を弔し、局より大猷院様に願ひ奉り、一寺造立付、御祈願所ニ被仰付、年月日不知和州郡山近所より大階道申所ニある寺領百石拜領仕、其後寛文三年八月十九日市街充實時代

二二三

根生院賜地

テ湯島○市郷區。ニ寺地ヲ賜フ。○公儀日記。柳營日

次記。續府内備考。日

十九日甲寅眞言宗根生院御祈所。近年年貢地居住、則其以爲寺地被下之。

——公儀日記

十九日○寛文三年八月

一、根生院事、從大猷院様御代到于今、御祈禱被仰付付る、彼寺領百石上方ニ有之、如願於關東替被下之、剩只今迄借地直被下之旨也。——柳營日次記

山城國宇治郡報恩院末  
金剛寶山延壽寺根生院

湯島不唱小名。○中略。

開山榮譽、土州幡多縣の人あり。春日局此親族にて、字文秀房、父は齋藤氏某あり。同縣石見寺榮雅法印を師とし出家して和州初瀬山にて勤學を。然ルも春日局日頃榮譽茂密に尋給ふといへとも、其所在茂知るものあり。或日知恩院今大塚護持院。第三世榮増法印に尋給ふに榮譽は今大和國初瀬山に勤學し、予も法類なりを答ふ。時より局密に榮増に託して榮譽茂初瀬山より呼迎ひて、猶子を弔し、局より大猷院様に願ひ奉り、一寺造立付、御祈願所ニ被仰付、年月日不知和州郡山近所より大階道申所ニある寺領百石拜領仕、其後寛文三年八月十九日市街充實時代



關東よおゐて替地被仰付、同年十月十七日知行御書出頂戴仕、武州豊島郡澁谷村ニおゐて、寺領百石御引替被成下、同五年七月十一日從嚴有院様、始る御朱印頂戴仕、延寶六年二月十日遷化、葬西新井惣持寺境内、行年七十六。御朱印寺領

嚴有院様御代寛文五巳年七月十一日高百石武州豊島郡澁谷村ニある、高百石内高五石一斗餘、寛文十一年月日不知御用地ニ被召上、替地同州六郷領於久ヶ原村拜領、同高一石六斗餘、延寶元年月日不知御用地ニ被召上、替地天和元年月日不知同州六郷領於羽根田村拜領、同高貳石九斗餘、堀田備中守殿屋敷ニ相成、替地延寶八申年月日不知同州同郡於久ヶ原村拜領、同高四拾四石餘、元祿十二年月日不知新堀御用地ニ付る被召上、替地右於久ヶ原村拜領、右之通澁谷村高百石之内追々御替地被仰付、殘高三拾九石貳斗六升餘澁谷村ニ當時有之也。

略。上御朱印御文言左之通、

武藏國豊島郡澁谷村内百石、雖舊領和州、今改替于此事。根生院全收納、永不可有相違者也、仍如件。

土井利房賜邸事蹟

寛文五年七月十一日 御朱印

廿八日癸亥年○寛文三年(紀元二二三二)三月廿八日岩槻藏國城主阿部正春○伊豫守、ガ神田

橋内中屋鋪○市内ヲ收メテ、若年寄土井利房○能登守ニ與フ。○公儀日記、柳營、日次記、寛政呈請。

土井利房賜邸 神田橋内水野氏邸東隣ヲ三浦因幡守○即チ阿部正春、賜ヒタルコト、

既ニ之ヲ記ス。是ニ至リテ之ヲ土井利房ニ與フ。○寛文三年八月

廿八日亥阿部伊豫守○正春、中屋敷水野出羽守、依御用指上之則土井能登守利房被下之、云々。

公儀日記

廿九日○寛文三年八月

土井能登守房○利

柳營日記

右阿部伊豫守上ヶ屋敷、神田橋之内被下之。

源利房○土井能登守從四位下侍、從七之助。

一、同年同月○寛文三年八月廿八日、家綱公○德川於御前、神田橋内屋敷被下置。

土井能登守源利房幼名七之助。

一、同年同月○寛文三年八月廿八日、家綱公○德川西丸に被爲成於御前、神田橋内土手

付屋敷被下之。但此節是迄之鼠穴屋敷差上以哉不詳也。當時所持不仕也、

土井利房賜邸事蹟



白金臺町本

村分離

是月○寛文三年(紀元二二二三年)八月白金臺町○市内白金村○市内ヨリ分離シテ、増上

寺○市内直支配ニ屬シ、翌四年甲辰○寛文四年(紀元二二二四年)代官支配ト爲ス。文○

政町方書上。

白金臺町本

村分離事蹟

白金臺町本村分離 文政町方書上ニ見ユ。

白金臺町壹町目略○中

一、當町之儀也、往古白金村之内相模海道ニ多、増上寺領ニ有之、其頃夕七ツ時過以得之、辻切追剝等有之、往來止リ以ニ付、慶安四卯年中商人町屋ニ仕度旨、地頭増上寺に相願以得之、其段同寺に御公儀に被仰立以處、願之通リ商人町家ニ可仕旨、松平伊豆守様被仰付以。尤此砌と白金村石高之内ニ籠リ、白金臺町分御年貢等之儀、増上寺に直納ニ不仕、白金村に差出、村方取次を以相納以處、毎度六ヶ敷儀出來仕以ニ付、寛文三卯年八月中白金村高ヲ御引分ケ、白金臺町之儀也、直百性ニ被仰付、其節、町方名主四人之者引請、御年貢諸役等直納ニ仕以。右ニ付地頭増上寺輪番役者に證文双方に被相渡以、然ル處當町之儀也、翌辰年御領替被仰付、御代官所御支配ニ相成申以。尤増上寺御領替場

所書留等と無御座以得共、武州荏原郡馬込村に御振替ニ相成以段申傳以。其後同十一亥年中御檢地之節、白金村に當町石高前之通取戻可申趣御訴訟申上以ニ付、御吟味之上、翌子年四月九日徳山五兵衛様に双方被召出、白金村申分難相立、高分ケ被仰付、御年貢諸役格別ニ可相勤旨、徳山五兵衛様杉浦内藏丞様、松浦猪右衛門様ニ御裁許有之、御下文壹通并前方増上寺輪番に被相渡以、證文壹通共、左之通御座以。

證文之事

一、増上寺領白金村之内臺町也、百姓之支配ニ付多、毎度六ヶ敷儀就仕出ス、右之町取上ケ以多、直百姓ニ申付以。町之石高三拾三石九斗四升三勺、此年貢壹反ニ付金三分ト銀五匁宛百姓手前に取以ニ付、本村之高を引米百貳拾俵ニ町四人之名主各請負以間、永代申付以、爲念仍如件。

寛文三癸卯八月 日

輪番

德水院

花岳院

源壽院

瑞花院



役者 月 窓 院  
 常 行 院  
 月 光 院  
 白金臺町名主 作 兵 衛  
 清 左 衛 門  
 市 郎 兵 衛  
 白金雉子宮町名主 長 兵 衛

覺

伊奈半十郎御代官所武洲白金本村名主百姓々同所臺町名主百姓出入之儀、半十郎穿鑿之覺書を以、双方召寄度々遂僉儀以所ニ跡々増上寺領之時分、町之石高三拾三石九斗四升壹合之所、米百貳拾俵ニ町四人之名主共ニ爲請合申付以由、寛文三卯年八月増上寺輪番同役者之僧并白金本村臺町名主連判之證文双方に出シ置以、然御藏入方ニ難用事以間、今度新檢之高ヲ以、本村臺町銘々ニ高々け、年貢諸役等各別ニ可相勤之、如此申付以上之、自今以後臺町之儀、本村々指引可爲無用以、爲後日令印形、双方々下置者也。

五兵

寛文十二子四月九日

内藏

猪右

白金臺町

池田氏角筈  
野屋鋪

九月朔日乙丑

寛文三年(紀元二三三二年)乙丑(三正綜覽)

岡山

前國

城主池田光政

松平新太郎

角筈

池田氏角筈  
野屋鋪事蹟

野屋鋪

武藏國豊島郡ヲ買得ス。備藩

池田氏角筈野屋鋪 備藩邸考左ノ如ク記ス。

角筈邸

江都城西一里餘、豊島郡角筈村ニアリ。此地鳴子村ニ接スル故、一名鳴子邸トモ云ヘリ。烈公池田光政ノ御時、寛文三年九月朔角筈村一萬六千五百五十七坪ノ野ヤシキ御買上アリ。同十六日公始テ爰ニワタラセ御覽アリ。其後追々土木アリ。同五年八月六日小林孫七南部小兵衛等、此邸庭普請ノ奉行ヲ命セラレ、池ヲ穿、新町ヨリ樋ヲフセテ水ヲ引セラレシ事ナトモ舊記ニ見エ。此月十二日此邸ニテ牧野吉峯老ヲ饗セラル。同年十二月ニ至テ土木悉ク成就セシカハ、普請奉行等ニ小袖一領ツ、賜ハリ、又日記ニ見ユ。同十一年此邸ノ南隣

市街充實時代



長谷川準人ノ屋敷三千五百五十八坪、加藤次郎左衛門ノ屋敷千六百三十三坪餘、添地ニ御買入アリ。添地ノ事、履歷略記載スル處、土肥氏所藏ノ圖ニヨル。但履リシ年、添地アリシ如ク記セシハ、共ニ誤レリ。又按スルニ、上ニ記セル寛文三年御買上ケル一萬六千五百五十七坪ニ此度兩家ノ地面ヲ合スレハ、二萬七千七百四十八坪餘トナル。然ルニ下ニ載セタル作事方ノ古圖ニハ、二萬四千四百六坪餘ト書シタルハ、三百四十一坪餘ノ差アリ。又土肥家ノ圖ニハ、御添地ヲ除キテ一萬六千九百廿六坪トアレハ、又三百六十九坪多シ。是等ハ或ハ六尺坪又六尺二寸坪ナトノタ、烈公老シ玉カヒ有ニヨレルニヤ。本邸已下皆此類イクラモアリ、今強テ校正セス。ヒシ後ハ、シハ、此邸ニワタラセ御逗留ナトアリシ事モ其比ノ記録ニ載セタリ。サル故ニヤ、延寶ノ比ノ江都圖ニ此邸ヲ松平新太郎隱居ト記セシアリ。サレト實ニ爰ニ住セ玉ヒシニハアラス。其後天和三年ニ故備後守殿盛徳院ノ御女於久殿後號盛板倉家ニ伯者守嫁シ居玉ヒシカ、彼邸火災アリシカハ暫ラク此邸ニ移リオハセシ事モ見エタリ。寶永五年ニ至リ、松平攝津守義行尾州ノ支封、濃ノ高須三萬石。所望アルニ依テ、此邸ヲ進ラセラルヘキ由代金三百兩ト云約諾アリ。是八月七日ノ事ニテ、同十二日彼御家ヘ引渡サレシ。即チ今角筭ニアル所高須ノ別邸是ナリ。寛文三年此邸ヲ置レシヨリ今年迄四十六年ナリ。此邸我邸タリシ時小人ノ類ナト多ク置レシ由云傳フ。サル事モ有シニヤ。其後正徳三年九月十八日角筭村西法寺ニハ、年々鳴子邸ニテ病死ノ下々多ク葬レルニ

饗宴奢侈禁  
制事蹟

四日戊辰

○寛文三年(紀元二三二三年)九月○戊辰、三正綜覽。

饗宴ノ奢侈ヲ禁ズ。○正寶事録。

饗宴奢侈禁制

正寶事録ニ、

振舞膳部之覺

一、御鷹之鳥拜領披之時、老中於招請之、檜之木、具盃臺三迄之、不苦、三汁十菜、向詰香物共ニ、吸物並ニ肴五種、押物共ニ、組内ニ於披時、又老中招請ありといふとも、常々振舞之、可爲塗膳。但し向詰無用之事。

一、雖爲國持大名、不時之振廻之、可爲二汁七菜。小身之面々之、たとへ兼るより雖約諾、此數量を用へし、惣る後段吸物肴等も、輕可被仕事。

附、振舞之刻、又老常よも杉重之菓子之無用あるべし。折櫃物之不苦事。

一、組中振舞又ハ相役人等寄合之節之、二汁五菜ニ不可過之事。

以上 九月○寛文三年。

右之通り今度諸大名衆諸旗本衆より被仰出ハニ付、町中家持之不及申、借家店借等まで、此旨相應ニ相守可申旨、被仰付ハ、少しも違背仕間敷ハ、爲後日町中連判之手形差上可申ハ、仍如件。

市街充實時代



寛文三年卯九月四日

御奉行所

覺

一、杉折。 一、杉重。 一、杉木具。 一、杉臺。 一、樽重。

右五種之分諸大小名衆より誂被申し共仕間敷事。

一、杉箱。 一、檜櫃。 同折。

是を不苦し事。

寛文三年九月四日

右卯寛文三年九月四日御觸、町中連判。

〔附記〕 屋鋪替

六日寛文三年九月中略。

一、北條右近大夫組之小普請渡邊新助親伯母鍋町之屋敷御用ニ付る被

召上之爲其代本所之内ニ被下之、彼地坪敷不足ニ付る、是地神田紺屋町

ニ被下之、引料金貳百兩被下之。

柳營日次記

八日壬申寛文三年(紀元二二三二)三將軍家綱德川町奉行勘定頭ヲ殿中ニ

町奉行等戒

附記  
屋鋪替  
渡邊親  
綱伯母

町奉行等戒

召シテ、戒飭スル所有リ。○柳營日次記。嚴

町奉行等戒飭

八日寛文三年九月三

町奉行村越長門守勝渡邊大隅守貞御勘定頭岡田豊前守次善妻木彦右

衛門直御座間へ被召出之、評定所其外支配方之儀万事出精之由被仰出、且

又可申上儀於有之ハ、可致言上之由上意也。

柳營日次記

八日寛文三年九月三町奉行勘定頭を御座所にめして、評定所その外職務、精密には

からふべしと面命あり。 嚴有院殿御實紀

〔附記一〕 懸賣制

一、町中之諸問屋賣懸仕し、其時之帳面ニ買主之名を書付、書判を取置可

申し、問屋方より通帳遣いハ、通ニ合印印判いとし遣可申し、惣る賣懸之

儀、跡々度々相觸い通り、少しも違背仕間敷い、以上。

寛文三年九月十日

正實事錄

〔附記二〕 奥女中本所賜地

廿二日寛文三年九月中略。

市街充實時代

附記、二  
奥女中本  
所賜地

附記、二  
懸賣制



本所奥こる屋敷被下奥女中九人へ、作事料銀廿五貫目被下之。

女院以下衣服價格限制

十月廿五日己未三〇寛文三年(紀元二三二三年)〇己未、三正綜覽。女院以下衣服ノ價格ヲ限制ス。

正大成令。正寶事錄。

女院以下衣服價格事蹟

女院以下衣服價格限制 盖 上流社會率先シテ華奢ヲ防グノ意ニ出テタル者

ナル可シ。奢侈ノ俗愈甚シキヲ推スルニ足ル。  
左ニ大成令正寶事錄同。ヲ抄ス。

- 一、女院御所姫宮方上之吳服、一表ニ付白銀五百目より高直ニ仕間敷夫。夫より下之吳服之品ニより猶以下直ニ可仕上之事。
- 一、御臺様上々吳服、一表ニ付四百目より高直ニ不仕、夫より下々吳服之品ニより尙以下直ニ可仕上之事。

一、御本丸女中上之小袖、一表ニ付白銀三百目より高直ニ仕間敷夫。夫より下之衣類之品々ニより彌下直ニ可仕事。

右之通り京都吳服師之者共ニ、堅く可申付旨、牧野佐渡守方被仰遣ハ間、江戸中吳服師之もの共爲、觸聞可申旨、御老中へ仰付ハ以上。卯三〇寛文十月

番士屋鋪給

廿八日壬戌年〇寛文三年(紀元二三二三年)〇壬戌、三正綜覽。小姓組・書院番・小十人組新番・大番ノ士ニ屋鋪ヲ賜フ。日〇柳營

番士屋鋪給賜事蹟

番士屋鋪給賜 柳營日次記ニ、

廿八日〇寛文三年十月〇中略。

五十軒	御小姓組
同	御書院番
五十七軒	小十人組
十五軒	但屋敷無之者不 <small>レ</small> 殘
四十軒	新御番
	大御番

屋敷無之者不レ殘、但無足之者ハ無レ拜領。  
右之面々屋敷可被下旨也。

十一月四日戊辰三〇寛文三年(紀元二三二三年)〇戊辰、三正綜覽。評定所池上本門寺〇武藏國荏原郡。名代

日蓮宗取締

大坊其他ニ達シテ、日蓮宗ノ自讚毀他ヲ禁ズ。日〇柳營

日蓮宗取締 柳營日次記ニ、

日蓮宗取締事蹟

市街充實時代



於評定所申渡。

身延山 久遠寺 池上名代 大坊  
中山 法花經寺

御當家被下淨土宗御條目之内、自讚毀他最是爲法衰之因、誣論之緣、堅可制止、事と御書出之通、今度日蓮宗へ同前被仰出之間、向後可相守其趣、若於違背之輩ハ、可被行罪科之旨ハ、條令承知之、末流等急度可申渡者也。

阿部氏其他屋鋪事蹟

七日辛未○寛文三年(紀元二三三)三月十一日岩槻○武藏國城主阿部正春○伊豫國下屋鋪ヲ

本所○市内ニ賜フ。○柳營是頃郡山○大和國城主本多政勝○内務大輔嗣子政長

亦屋鋪ヲ小石川白山下○市内小石川區ニ賜フ。○子爵本多家回答

阿部氏其他屋鋪事蹟

阿部氏其他屋鋪 左ノ如ク傳フ。

七日○寛文三年十一月

阿部伊豫守○正春

右於本庄五千坪下屋敷被下之。

小石川白山下屋鋪

嘉永新鑄江戸切繪圖本郷湯島ノ部ニアル小石川指ヶ谷町一丁目ノ内、及ヒ小屋鋪八ヶ所、心福院等ノ邊一圓、本多中務大輔政長五世末タ部屋住タリシ時寛文三年十一月拜領シ、其后寶永ノ頃迄本多家世々之レヲ所有セリ。但、坪數及還納ノ年月詳ナラス。

子爵本多家回答○岡崎藩

附記 老臣慰勞

〔附記〕 老臣慰勞

九日○寛文三年三月十一日老臣府に近き地にて、この春給ひし采地へ、かはるくまかるべしと命せらる。

嚴有院殿御實紀

正則從四位下侍從美濃守隱居名泰應幼名鶴千代

寛文三癸卯年二月八日御懇之蒙上意、壹万石御加増被下置。

一、同年○寛文三年三月御加増之所割御書付、御手自頂戴仕事、壹万石、豆州

東浦筋、相州中郡筋、武州江戸近所野方筋、相州三浦領ニル拜領仕○下略

一、同年○寛文三年月日不知、當年御加増拜領之新知行爲見分、一兩日之逗留

ニル、酒井雅樂頭○忠清阿部豊後守○忠秋代々可相越旨蒙上意。

一、同年○寛文三年十二月五日、兼る被仰出、通、新領武州野方へ之御暇被下

市街充實時代



置、近在御鷹場ニ鷹狩御免被成旨、蒙上意、即日發足仕、翌六日鷹狩之雁二献<sub>上</sub>之仕、高嚴院<sub>人</sub>伏見宮顯子<sub>將軍家綱子</sub>。様へも眞鴨二献上仕<sub>し</sub>。翌八日御暇被下置<sub>し</sub>爲御禮、鯛二高嚴院様へも同種献上之仕<sub>し</sub>。

——寛政呈譜

新道警火其他

十九日癸未<sub>○寛文三年(紀元二三三三)年十一月</sub>。布令シテ、新設街路ニ警火設備ヲ爲サシメ、廿三日丁亥<sub>○寛文三年(紀元二三三三)年十一月</sub>。更ニ町費ノ納入其他ヲ示達ス。<sub>○町觸。正實事錄。</sub>

新道警火其他

府内各所ノ新街路成リタルヨリ、舊街路ニ同ジク警火其他ノ設備ヲ要シタルガ爲メ歟。内警火令ハ、

- 一、町中新道、壹町ニ中番晝夜共ニ貳人宛差置、火之用心、無油斷可申付事。
- 一、新道水溜桶壹町ニ貳ツ宛、并階子壹町ニ三挺宛、差置可申事。
- 一、新道木戸際ニ手桶拾五宛、壹町三拾宛、差置可申事。

右之通り品々支度仕<sub>り</sub>、差置可申<sub>し</sub>。壹町より短き町ハ、右之積<sub>り</sub>應<sub>じ</sub>、差置可申<sub>し</sub>。町廻<sub>り</sub>の衆御通り御改可有之<sub>し</sub>間、無油斷可被申付<sub>し</sub>。

町中相觸<sub>し</sub>ハ、月行事印判を持、喜多村所へ早々可被參<sub>し</sub>。少しも遅々有間敷<sub>し</sub>以上。

卯<sub>○寛文三年</sub>十一月十九日

町年寄三人

——正實事錄

町費徴收其他ノ町觸ハ左ノ如シ。

寛文三卯年十一月

- 一、新道角屋敷横手二十間口之方ニ三分一之間數、役等之入目出シ可申<sub>し</sub>。是<sub>レ</sub>之、木戸番錢、中番錢、手桶水溜梯子之入目、并<sub>み</sub>捨賃も、三分一之間數、壹間口ニ壹分ツ、出シ可申<sub>し</sub>。附、惣町中角屋敷横手貳拾間口之所、三分一之間數、壹間口ニ付塵捨賃壹分ツ、毎月出シ可申事。
- 一、新道兩角屋敷横手貳拾間、地尻木戸有之所、木戸之入目番錢共ニ、兩角之者出シ可申<sub>し</sub>。附、横手貳拾間之所、三分一之間數、壹間口ニ付<sub>み</sub>捨賃壹分宛、毎月出シ可申<sub>し</sub>。

- 一、町屋裏口新道ニ成<sub>し</sub>町、并惣町中表裏兩町之所、裏町之方ニ<sub>も</sub>、壹間口ニ付<sub>み</sub>捨賃五厘宛、毎月出シ可申<sub>し</sub>。附、會所屋敷所持之者ハ、表壹間口ニ付壹分、宛<sub>み</sub>捨賃出シ可申<sub>し</sub>。其外諸役等之入目間掛<sub>り</sub>ニ可仕<sub>し</sub>。

市街充實時代



一、町屋裏口新道ニ成ル町ヲ、新道諸役之入目間掛リニ可仕吏。  
 一、新道町中ニ下水有之ハ、蓋仕ル所ハ、先規カ其下水支配仕ル町カ以來迄下水ニ蓋可仕事。  
 一、新道町中ニ有之下水關板會所之方ニ付ル片側之分入目、此度斗新角屋敷會所取ル屋敷之方カ出可申ル。以來關板之入目出シ申間敷ル事。  
 一、新道作りル義カ、其所之道幅半分ツ、向側々出合道造可申事。  
 一、新道月行事役之義カ、町年寄方カ様子可承ル事。  
 右之通被仰付承申ル以上。

卯<sup>〇寛文三年</sup>十一月廿三日  
前文略。

町觸<sup>〇東照宮本。</sup>

右之通り被仰付承申ル以上。  
 卯<sup>〇寛文三年</sup>十一月廿三日

正實事錄

附記一、  
 南傳馬町  
 廣小路賣場

〔附記一〕 南傳馬町廣小路賣場

廣小路瓜くゝ物賣場證文

仕進ル手形之事

一、南傳馬町貳丁目廣小路貳拾間之内、中四間之所、從御公儀様杭御打被成、

中四間之内カ物賣御赦免ニ被仰付ル。右御定之杭之外、殘ル八間宛四角ニ三拾貳間之所ニハ、物賣壹人も堅ク置不申ル様ニ被仰付、慥ニ承届申ル。右之趣慥ニ被仰渡ル上カ、御定之杭之外ニ物賣壹人も置申間敷ル。爲後日四角之家主連判之手形、仍如件。

寛文三年卯霜月廿日

忠兵衛

七兵衛

長兵衛

五郎右衛門

高野新右衛門殿

右四間杭之外ニ物おろし場溝き且壹間、願之内御赦免被成ルニ付、右之外へ何ニあるも一切出申間敷旨、家主并問屋五人、中買八人カ證文取置。

撰要永久錄

附記二、  
 賜地

〔附記二〕 賜地

是ノ前後小石川村ニ地ヲ賜ヒタル者、小石川原町名主安右衛門舊記ニ見ユ。

一、高三石貳斗九升六合九勺

右是ハ、寛文三年卯癸十一月晦日中坊美作守<sup>〇時殿渡。</sup>

市街充實時代

中坊時  
 祐







朽木則春 伊東長春 小笠原久勝 松平久勝 柳原近郷 松平氏信 松平氏綱 片桐真房 野々山兼 野々山兼 宗々山兼 萬年貞頼 安藤重頼 安部信直 安部信直 朝比奈利 昌比奈利 渡邊重直 賀村重直 房重直 松野重直 加藤重直 山本重直 橋本重直 花井重直 細井重直 林田重直 片山重直 岡上重直 津上重直 金元重直 大久保忠 辰保忠

東京市史稿

朽木隼人綱則伊東主殿春祐小笠原丹後守定長松平半十郎勝柳原左京近久松平大學信氏松平頼母綱堅片桐三郎兵衛房貞稻垣市左衛門野々山瀬兵衛宗兼野々山彦右衛門孝兼萬年佐左衛門貞安藤九郎左衛門重安部主膳秀信同彌平次直信朝比奈左兵衛昌利渡邊傳四郎貞水野伊兵衛中村平右衛門仍重賀茂宮庄右衛門房直松野文右衛門資齋田久太郎中島伊兵衛小濱左門安藤四郎左衛門次重加藤久太夫次景山本次右衛門俊政橋本太郎左衛門言正花井次左衛門義定近山五郎左衛門門安高敷細田小兵衛德時儒者林春信人見友元醫師片山興庵岡本壽仙井上玄徹忠外科津輕以春齒醫師金元休庵産醫大膳太夫了益此外杉浦大隅守大久保忠荒之助各右典既家老各被下之十五日配太田壹岐守左典既屋敷被下之十五日寬文三年十月中略

柳營日次記

公儀日記

同年寬文三年十二月十四日於小石川築地屋敷四百六坪餘被下之

寬政呈譜

〔附記〕尾張徳川氏市買屋鋪

寛文三年法性寺谷五千十七坪ヲ買添フ。

市買御屋敷略中

寛文三寅年御買地 一、法性寺谷五千拾七坪。無年貢地

尾張藩邸記

江戸屋鋪便覽ニ左ノ通り記載アリ。

市買御屋敷略中

寛文三寅年御買地 一、法性寺谷五千拾七坪但、田舎間。無年貢地。

侯爵徳川家回答名古屋藩。

小笠原氏市谷屋鋪

寛文三年百姓地三百廿七坪ヲ買添フト云フ。

市ヶ谷御屋鋪

一、寛文三癸卯年忠真公笠原小當御屋鋪ノ南ノ方ニアリシ百姓地ヲ御買添ナサル。其間數東西五拾四間半、南北六間也。坪數三百貳拾七坪有。百姓元來兩人市街充實時代

附記 尾張徳川氏市買屋鋪

小笠原氏市谷屋鋪



ニテ抱持タル田地也シテ、永代不易ニ御買切テサレ。茲ニ因テ毎年御年貢トシテ白銀一枚程宛左内坂ノ名主島田左内方へ納サセラル。而ニ寶永元年甲申年ヨリ増上納金ニナリ、金一兩一分九釐也。茲ニ因テ當御屋鋪ノ惣間數坪數、左ノ如シ。

東表口八拾壹間半。西裏方九拾三間半。南方入百貳拾九間。北方入百三拾六間。坪數一萬三百九拾坪餘也。

武江藩邸記

貴志忠治屋鋪

忠治 三郎五郎。彌兵衛。

同年 三〇寛文 月不知、小日向築地ニ屋鋪拜領仕。

寛政呈譜

源森川鑿開

是ノ年 〇寛文三年(紀元二二三二三年) 源森川 〇市内 本所區。ヲ鑿開シテ、大横川 〇市内 本所區。ヲ大川ニ通ズ。 〇文政町方書上。新編武藏風土記稿。東京府志料。東京通志。

源森川鑿開事蹟

源森川鑿開 傳フル所左ノ如シ。

中之郷瓦町 〇中略。

一、源森川 幅拾四間。長凡百七間。

右者町内北之方ニ有之、字源森川と相唱。萬治年中堀割之由申傳、一名源兵衛堀共唱申。右者中之郷横川町ニ申上。通萬治二亥年中大横川御堀割ニ相成、其後右に續。中之郷業平橋邊寛文三卯年中同堀敷ニ相成、右代地堅

川通五之橋町之場所被下置儀ニ付、追々御堀足シニ相成。大川に流通仕儀ニ罷成、御檜藏材木入宜敷様ニ相成。儀ニ可有之哉。尤御檜藏御引拂之儀、年月相知レ不申。得共、右跡地者中之郷村ニ立歸、新田ニ相成、享保十七子年御高入ニ相成。尤源兵衛堀を唱。里俗有之。ニ付、別段御堀割ニ相成。儀ニ可有之哉。相知不申。得共、往古方諸向書上之扣等、都源森を相認メ有之。表立源兵衛堀を相唱。儀無御座。間、右兩様之名目何之儀ニ寄唱始。哉。由緒を相分り不申。古老之者ニ及申傳等無之由ニ付、前々方認來り。源森之名目を以申上。儀ニ有、源兵衛堀を相唱。儀者、全里俗之申傳ニ御座

一、源森橋 長七間。幅貳間壹尺。但橋臺出貳間、幅六間。

右者町内北之方字源森川ニ懸渡有之。寛文二寅年中伊奈半十郎様御掛りニ始。御懸ケ被遊。後地方御掛りニ有度々御懸直御修復共御座。尤字源森橋を相唱、一名源兵衛橋共里俗相唱申。 文政町方書上 源森川、大川ノ入堀ニテ、寛文三年ノ頃堀割ナリ。



源森川 淺草川大川橋ノ北第六大區八小區中ノ郷瓦町ト第十一大區新小梅町トノ間ヲ東へ入レル堀ナリ。寛文三年檜藏積入ノ材木運送ノタメ、横川業平橋ノ北ヨリ淺草川マテ堀續ケテ、源森川ト名ツケ、俗ニ源兵衛堀ト呼ヘリ。其後淺草川満水ノ時、源森橋押流サレタレハ、寛文十二年此堀ノ中程ニ堤ヲ築キ、淺草川ヨリ横川へノ水脈ヲ斷テリ。之ヲ築留堤ト云ヒ、俗ニシメ切ト唱フ。此堤ノ東ヲ今ハ横川ノ入江トヨヘリ。

〔橋梁〕 源森橋 新小梅町ヨリ中ノ郷瓦町へ達ス。寛文二年架ス。長六間、幅二間一尺。

——東京府志料

源森川 本所區中之郷瓦町ト新小梅町ノ間ニ於テ大川ヲ分派シ、東流枕橋中之郷瓦町ヨリ新小梅町ニ通ス。寛文三年癸卯始テ之ヲ架ス。文政書上二年トナス。源森川開鑿三年ニアレハ、蓋三年ノ誤ナリ。源森橋ト稱ス。寛文十一年圖、源兵衛橋又源平橋（江戸名勝志）寛延二年圖、源藏橋、寛政三年圖、深堀橋、文政十一年圖、深森橋ニ作ル。安政二年乙卯復源森橋ト稱シ、里俗枕橋ト云。明治八年乙亥定メテ、枕橋トナス。長七間。幅二ヲ過キ、八軒町ト小梅瓦町ノ間ニ至リ大横川ニ接ス。長凡五町、濶凡拾八間。又源兵衛堀ト稱ス。寛文三年癸卯之ヲ開鑿シ、大横川ヨリ大川ニ通シ、以テ檜庫材木運漕ノ便ニ供ス。後洪水ノ時大川ノ水此ニ汎溢シ、源森橋流失シ、近傍其害ヲ被ル。是ニ於テ、同十二年壬子新小梅町ト中之郷瓦町中間ニ堤塘ヲ

築キ之ヲ阻遏ス。是ヲ築止堤ト稱ス。里俗締切ト云。明治十八年乙酉再ヒ堤間ヲ截リ水流ヲ通シ、上ニ一橋ヲ架シ、橋下ニ閘門ヲ設ケ、閉闔シテ以テ漲溢ヲ防ク。是ヨリ後、大川ヨリ直ニ大横川ニ通船シ、其便ヲ得タリ。——東京通志

市谷八幡町

○市内牛込區。町奉行支配ニ入ル。○文政町方書上。

市谷八幡町支配

文政町方書上ニ、

市谷八幡町

一、町内地所之義ニ、八幡社地ニ多シ、年代不知表通町家作有之ハ處、寛文三辰年十一月於御評定所、町御奉行神尾備前守様村越次左衛門様御立合之上、町御支配ニ被仰下、其後寛文八申年二月朔日牛込榎町邊ハ出火ニ類焼仕ハ所、翌酉年月日不知町内大下水際迄町家作ニ付、御城御近邊出火之節ニ、大久保青山根來御組其外四ツ谷市谷諸御組御寄場ニ御座ハ場所ニ付、道幅狭ク御座ハ間、右大下水際ハ町家四間通リ引去さりハ様被仰付ハ、其節之御奉行様御姓名不相知。右地所ハ町前大下水際迄之邊ニ御座ハ、尤前書寛文年中并享保十七巳年二月十四日類焼ニ多シ、諸書物焼失仕、寢々相分り不申ハ、町名之儀ニ、八幡社地門前町家ニ御座ハニ付、八幡町ヲ唱來り申ハ、

市街充實時代

市谷八幡町  
町支配  
市谷八幡町  
町支配  
市谷八幡町  
町支配



但、片側ニ御座也。

一、市定日之儀を、往還ニ有る毎年七月十三日草市相立申也。尤貳拾ヶ年以前より相立儀ニ有る御願申上相立也。市ニ有る無御座也。此外市日無御座也。

市街ノ轉移起立シタル者若干有リ。

○文政町方書上。府内誌殘編。府内備考。

市街轉移起立

寛文三年中轉移起立シタル市街ヲ舉グ。

長崎町 明暦火災後靈巖島ニ移リシモ、半町分不足ナリシヨリ、是年ニ至リ本所ニ不足地三倍ノ代地ヲ給セラルト云フ。

本所長崎町

一、當町之儀を、古來元地中橋廣小路ニ罷在、其砌を廣小路之處川有之、町内之儀を右川端南側ニ有之也。處、明暦三酉年大火事以後、寛文三卯年靈巖島ニ代地被下置、同所地面半町程不足故、右不足之分本所横川通西側當時之場所ニ有元坪三倍増代地被下置爲引料、小間壹間ニ付銀拾枚宛頂戴仕、本所長崎町々名目相唱罷在也。天和三亥年本所御奉行庄田小左衛門様長谷川五左衛門様御懸り有、本所一圓武家方町屋共御用地ニ被召上、大久保平兵衛様御代官所百姓地ニ相成也。付、貞享元子年御用地ニ被召上、代地無御座屋敷代

市街轉移起立  
市街轉移起立  
長崎町

御金小間ニ割合金千六百九拾五兩壹分銀四匁九分八厘頂戴仕、立退申也。然ル處、元祿元辰年御普請御奉行中坊長兵衛様奥田八郎右衛門様御懸り有、又本所御取建ニ付、元祿六酉年元地歸り之儀御訴訟申上、則當町被下置引續罷在申也。尤右屋敷代御金を、其以後年々上納仕也。由申傳ニ御座也。右上納仕也。内、町御役御赦免被下、其後享保七寅年御公役銀小間拾間口壹人役此賃銀入足壹人銀貳匁、壹ヶ年拾五遍勤之積を以、年々上納仕也。前書之通古町ニ付、延寶八庚申年九月十八日御能拜見被仰付、其以後御代々御能拜見ニ罷出申也。

但、長崎町本地之分、只今以靈巖島長崎町を唱、同所ニ罷在也。○中略。

一、長崎橋

長拾間。幅貳間。但板橋東西往來、西ニ本所長崎町、東ニ南側御使番大島雲

四郎様御屋敷、北側御側衆土岐豐前守様御下屋敷。

右ニ横川ニ懸渡有之、元祿十丑年中本所御奉行鈴木兵九郎様、鳥居久五郎様御懸り有、出來、長崎橋を相唱也。儀を、西之方ニ長崎町御座也。間、長崎橋と相唱申也。右御橋臺道造り等々、西之方ニ町内ニ有仕來り申也。尤文政元寅年十

市街充實時代







之由。御座ハ所寛文三卯年中大横川堀敷御用地ニ被召上、元坪を減し、半地ニ  
 有當場所元龜戸村田畑有之ハを代地ニ被下置、元來町並地面ニ御座候間、町  
 家作仕候所、元祿八亥年酒井河内守様御檢地入同十五年十二月御水帳載相  
 濟、同年永代賣家作御免之町並屋敷ニ御座候處、其後正徳三巳年閏五月十六  
 日御代官伊奈半左衛門様町御奉行坪内能登守様丹羽遠江守様松野壹岐守  
 様御引渡ニ相成ハ處、右町並家作願、復候地主共有之ハ間、其後享保十六亥  
 年十二月屋敷御改杉田源左衛門様池田市之丞様日根野左京様ニ奉願上ハ  
 處、同十七子年二月願之通家作御免被仰付、不殘町並家作ニ相成、町方御代官  
 兩御支配ニ有、當時町御奉行并御代官山田茂左衛門様御支配ニ御座候。尤町  
 名之義也、豎川通本所一ツ目方當町を五ツ目ニ御座ハ間、以前を橋有之ハ  
 處、貞享年中御取拂ニ相成ハ得共、一ツ目ヲ一之橋を相唱ハ故、五之橋町を  
 申來候由ニ御座候。○中

一、町内河岸水除土手

右者寛文三卯年代地ニ被下置ハ節者、龜戸村田畑野地ニ御座ハ間、地主共申  
 合、埋立或者取崩等仕、町並家作ニ相成ハ處、度々之出水有之、地低之場所故

潮上リハ間、自分築立ハ土手敷ニ御座ハ所、其後御府内繁榮ニ相成ハ付、自  
 然々竹木薪渡世之者共多ク住居ニ相成ハ間、勝手ヲ以材木置場等ニ致シ、水  
 除土手敷ナク、當時河岸ナタレニ相成居申ハ。

一、當町反別壹町九反四畝拾五步。但、中之鄉村惣反別貳拾七町三反八畝貳  
 拾九步之内ニ御座候。

文政町方書上

傳通院御掃除町 掃除方役屋鋪ト爲リテ、町並家作ス。

一、當町之儀者、小石川村之内ニ有、傳通院知行高五百石之内ニ御座ハ處、前々  
 方傳通院并外御方々様御廟所御掃除步役相勤ハ付、寛文三卯年十二月中  
 傳通院方公儀被相願、右御掃除ニ罷出ハ拾六人ハ、永代役屋敷ニ被相渡、町  
 並家作仕、右之者住居ハ付、御掃除町々相唱、其頃方古町同様永代賣渡證文  
 ニ有取引仕ハ。○中

但、當町反別等相知不申、右御掃除步役之外、同寺ハ年貢等差出不申ハ。○中

一、字小石川 幅二間半程。



右當町之水戸様御屋敷に流入、神田川に落申し。

一、板橋 長三間半餘。幅二間。

右字下水橋を相唱、小石川に掛り有之、文政二卯年中懸直に相成。尤松平賜様、松平織部正様頭取に、近邊武家方組合普請に有之、町方に移り不申し。且橋掛初年月等相分り不申し。

——府内備考

橋戸町

橋戸町 百姓町起立。

橋戸町

一、當町之儀、往古者武州豊島郡小石川村御料地ニシテ、其後元和九亥年中傳通院領ニ相成。○中略

一、町方起立之儀、寛文三年百姓町屋御免被仰付、其後延享二丑年十二月中町御奉行御支配ニ相成申し。

但、百姓町屋御免之節、寺社御奉行御姓名并町方御支配ニ相成ハ節之町御奉行御姓名共、相知不申し。

一、町名橋戸町を相唱ハ儀、町内中程ニ古來ハ橋有之ニ付、橋戸町を相唱ハ儀を奉存し。

牛込揚場町

一、町内里俗極樂水を唱來申し儀、松平播磨守様御上屋敷内ニ、了譽上人古跡極樂之井有之ニ付、唱來ハ儀を奉存し。○中略

一、下水 幅八尺。

右當町ニ有之ハ、水元之儀、武州豊島郡長崎村小堀ハ出、池袋村瀧野川村巢鴨村小石川村ハ當町に流レ、水末ハ水道橋に落入申し。且下水之名當時ハ唱無之ハ得共、古名小石川之由申傳し。

一、石橋 長九尺餘。幅八尺餘。

當町中程ニ、右下水ニ掛有之ハ、尤地頭傳通院ニ、掛替仕、手傳人足之儀、小石川村并當町ハ差出申し。

——府内備考

牛込揚場町 寛文三年頃ヨリ拜領町屋ト爲ル。

牛込揚場町

一、町方起立之年代草分人之名、書留等無御座、相分り不申し得共、往古武州豊島郡野方領牛込村之内ニ有之ハ、所、年月不知、武家方御屋鋪ニ相成、其後追々拜領、町屋ニ相渡、神田川附ニ、山之手諸色運送之揚場ニ相成候ニ付、町名揚場町を相唱申候。

市街充實時代



一、自身番之義、町内東之方木戸際河岸ニ有之、間口五間、奥行同斷、此建坪貳拾五坪。右起立之儀、寛文中御願濟ニ相建由ニ御座得共、何モ之御役所ニ奉願ハ哉、享保十七子年中類焼之節書留等焼失仕、相分り不申。

但、自身番屋軒ニ打繼半鐘掛有之、得共、銘無御座。

右自身番屋之儀、神田川ニ船鴨御用并江戸川鯉御取溜之節、其外御鷹御捉飼之節、御鷹匠方御鳥見方等御控所ニ相成、御用御取調所ニ相成ハ付、以來御町方御加役方々召捕之御預ケ等無之様、文化十二亥年正月申御小納戸頭取長谷川主膳正様、中野播磨守様方町御奉行永田備後守様ニ相成旨、御鳥見組頭水谷又助様、後藤與左衛門様御鳥見飯田巳太郎様、橋村彌惣八様方被仰渡ハ間、其段町内方後町御奉行所ニ御訴申上。

一、町内拜領地主姓名左之通。○中略。

一、表間口京間五間五尺二寸五分、裏行、南拾間四尺四寸、北拾間四尺五寸。此坪數六拾貳坪五勺三才。

小普請組淺野軍人支配

宮川半五郎

右先祖宮川治右衛門儀、崇源院様ニ相勤ハ節、雉子橋外御臺所町ニ町並

之屋敷拜領仕、其後御用地ニ被召上、本所川通町並之所ニ代地被下置、町屋敷ニ有之ハ處、治右衛門倅源助儀、天樹院様ニ相勤ハ節、牛込揚場町中村六右衛門屋敷ト屋敷替仕度段、天樹院様御老中長田重太夫殿を以奉願ハ所、御留守居伊澤隼人殿ニ被仰遣、御老中方ニ被仰上、願之通被仰付、寛文三卯年中、所持仕罷在候。○中略。

一、舊家

薪炭商賣、大和屋  
家名相唱申。

家主

牛込揚場町  
三

十郎

右三十郎先祖、和州平群郡生駒菜畑村ニ、年月不知、當三十郎方七代以前御當地ニ罷出、其節方右町ニ住宅致シ、其後住居致シ、其譯、不相知。寛文三卯年中以前方中村六左衛門様拜領町屋敷之内ニ住居致罷在、氏、朴木ト申、和州菜畑村ニ朴木市左衛門、朴木三十郎、朴木丈右衛門ト申、同家之郷士三軒有之ハ處、三十郎先祖、右三軒之内ニ御座。朴木氏先祖、武内宿禰之子孫、武内宿禰を生駒明神ト崇祠、同村正明寺ニ社有之、當二月中和泉朴木丈右衛門治光方年始書狀參り、追書左之通。

追申上。去年來、元祖大明神社内之砂并御神體ニ可相成品差送り、様、友治ニ向被仰聞、得共、去年方方位惡敷ハ付、當年ニ延引、右二品今便



ニ差送ハ間御落手可被下シ。右御神體ニ可相成品也。元祖大明神三漢御征伐之時、御着用鎧胴カ、日之丸之内少々計上申シ。其御心得ニ御勘定可被成シ。且又明神御命日之儀、御尋被成シ得共、暁ノ月日ニ相分リ兼申シ。乍去生駒大明神五志也。となへ朔日十一日十六日廿一日廿八日、右氏子之もの皆々參詣いとし、十一日ハ御本社生駒大明神御命日、慥ニ十六日元祖大明神御命日ニ相心得罷在シ。右五日夫々五社明神之御命日ニ御座ハ事ニ御座シ。右様御承知可被成シ。猶亦追々得々相改、相分リ次第可申上シ。

但、鎧胴革日之丸之切、和州方封印致來シ儘、津久戸八幡別當無量寺に預置申シ。  
——文政町方書上

牛込萬昌院門前

牛込萬昌院門前 火消屋鋪用地ト爲リテ轉移ス。

牛込萬昌院門前

一、牛込萬昌院門前起立之義也、慶長九辰年寺地市ヶ谷ニ開闢仕シ處、寛文貳寅年御火消屋敷御用地ニ被召上ケ、其節牛込御殿山地に替地被下置シ。右寺地面、表口三拾九間、裏行六拾間、凡貳千四百六拾三坪餘之内、八拾貳坪之場

所、寛文三卯年古門前屋ニ起立仕シ。御懸リ寺社御奉行之儀ニ相知多不申シ。先年寺社御奉行所御支配之由申傳シ處、延享二丑年方町御奉行所御支配ニ相成申シ。其節名主長次郎支配仕、萬昌院之院號を以則町名ニ相唱來リ申シ。  
——文政町方書上

萬昌院門前

一、右門前起立之儀也、慶長九辰年寺地市ヶ谷ニ開闢仕シ處、寛文二寅年御火消屋鋪御用地ニ被召上、其節牛込御殿山地に替地被下置シ。右寺地面、表口三十九間、裏行六十間、凡貳千四百六十三坪餘之内、八十貳坪之場所、寛文三卯年古門前町屋ニ起立仕シ。御掛リ寺社御奉行之儀ニ相知不申シ。○中略。

一、町内 南北に貳拾間半、東西に四間。

一、四隣 東之方牛込無量寺門前、津久戸八幡宮、西之方同寺。

境内 南之方同斷、北之方筒井内藏様御屋敷。

一、町内里俗牛込津久戸を唱、御殿山共相唱申シ。

一、自身番之儀也、小門前坂町ニ無御座、無量寺門前に組合相勤申シ。

一、坂 登リ凡三十間程。



右町内北堺ニ有之里俗おみ坂を唱申し。

社寺ノ起立轉移シタル者若干有リ。

○地子古跡寺社帳。文政寺社帳。府内備考。府内誌殘編。

社寺起立轉移

寛文三年中起立轉移シタル社寺ヲ舉グ。

三田稻荷社

松平綱重麻布永坂邸内ニ起立ス。

麻布永坂三田稻荷

根津權現神主  
伊吹左門支配

社地五百五拾七坪。

右稻荷社修覆之儀、左門願出以得共、寺社方屋鋪帳ニ社地之儀無之ニ付、被遂吟味以處、右社地先年甲府様御屋鋪内ニ有、寛文三卯年新規ニ御造營有之、其節左門へ御預ケ、文昭院様西丸へ被爲入以、以後、寶永四亥年小普請方へ被仰付、御再造有之、今以て左門支配仕來以、段申ニ付、小普請奉行方被相尋以處、左門申以通書留有之、相違無之ニ付、此度寺社方帳面張紙仕以由、寺社奉行連印之斷手紙を以て申越以、依之寛延二己巳年七月四日申上、御帳面張紙仕以。

地子古跡寺社帳

稻荷社

永坂町

○麻布

ニ在リ。三田稻荷ト唱フ。伊弉諾尊、伊弉册尊、倉稻魂命、級長津彦命、級長戸邊命、五神ヲ合祀ス。社傳ニ、此地ハモト甲府宰相綱重卿ノ下

龜戸天満宮旅所

龜戸天満宮旅所 本所北松代町四丁目ニ借地起立ス。

一、御除地 五百三十九坪。

市街充實時代

邸ニシテ、當時三田屋敷ト唱ヘリ。寛文二年文昭院殿降誕シ給ヒ、明ル三年此邸ニ御移徙アリシヨリ、此年九月綱重卿神職伊吹右京ヲシテ當社ヲ此邸内ニ勸請セシメ、文院殿御成長ノ禱祀ヲ命セラル。文昭院殿御元服ヲ加ヘラレシ時ハ、殊ニ禱祀ヲ務メ祓ヲ奉レリ。文昭院殿甲府ノ御家督ヲ襲カセ給ヒシ後、元祿八年社頭火災ニ罹リ御造營アリ。斯テ後寶永元年文昭院殿御養君ニ成ラセ給ヒ、西丸へ移ラセラレシ後、此地ノ御殿ヲ廢セラレ、蹟地ハ諸家ノ賜地ニ分タレシカ、當社ノ地ハ除カル。同四年文昭院殿間部越前守ヲシテ小普請奉行間宮播磨守ニ命セラレ、御再建アリ。接地當町ノ内ヲ收公アリテ社地ニ加ヘラル。今ノ門内石坂下ノ地是ナリ。此時神鏡一面ヲ納メラル。後享保年中ニ至ルマテハ屢修理ヲ命セラルト云フ。歳首ノ松飾ハ官ヨリ命セラル、ヲ例トス。毎年二月初午日ニ祭祀ヲ行フ。社務ハ根津權現神職伊吹左門、先祖右京ヨリ世々管セリ。社地五百五十一坪除地ナリ。

府内誌殘編



但、川岸地共。

當旅所之儀、寛文三卯年七月廿五日拜借仕、天和四子年十一月朔日御除地ニ被成下<sub>レ</sub>。尤右地所最初拜借仕<sub>レ</sub>節之舊記ニ、清水町續ト有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。得共、右場所當時北松代町四町目之中ニ有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。

右舊記左之通、

嚴有院様○徳川家綱御代、寛文三卯年奉願、七月廿五日清水町續ニおゐて表口

十八間、南北川岸迄廿四間、但中ニ有<sub>レ</sub>十間之通、開基別當菅原信祐拜借仕、本

所奉行徳山五兵衛山崎四郎左衛門申渡<sub>レ</sub>。其後常憲院様○徳川綱吉御代、天和

四子年十一月朔日於御城御老中御列座、地方奉行大岡備前守<sub>レ</sub>右旅所御

除地被成下置<sub>レ</sub>段、被仰渡<sub>レ</sub>旨、誰殿歎相知不申<sub>レ</sub>。同月八日本所奉行大久

保平兵衛先祖信祐<sub>レ</sub>申聞<sub>レ</sub>。——文政寺社書上

道往寺

道往寺 起立年代ヲ知ラズ。開山念無是年寂スレバ、假ニ此ニ掲グ。

來迎山京都知恩院末一聲院道往寺

上 高輪・村

境内千二百五十九坪、内千九十九坪拜領地、百六十九坪門前町屋。

起立年代相分不申<sub>レ</sub>。

開山念無知尙、生國勢州<sub>レ</sub>申傳、俗姓不知、寛文三癸卯年八月十五日卒。

——續府内備考

妙行寺

妙行寺 芝金杉ヨリ麻布本村町ニ移ル。

築地本願寺末  
麻布本村町  
浄土眞宗 萬徳山妙行寺

一、境内坪數 古跡御年貢地貳百九拾七坪。

一、開闢起立 當寺之儀<sub>レ</sub>、往古長元寺<sub>レ</sub>申、元和三巳年芝田町ニ起立仕、寛

永廿一申年迄貳拾八年之間罷在<sub>レ</sub>處、右地所御用地ニ被召上、久留島丹波守

殿屋鋪ニ相渡<sub>レ</sub>ニ付、同年々芝金杉ニ町屋敷相求、寛文三卯年迄貳拾年罷在、

同年當所<sub>レ</sub>引移申<sub>レ</sub>。起立以來當文政十一戊子年迄貳百拾貳年ニ罷成申<sub>レ</sub>。

且又寺號改號之儀<sub>レ</sub>、貞享元甲子年妙行寺と改號仕度段、本多淡路守殿<sub>レ</sub>奉

願<sub>レ</sub>處、願之通被仰付、同年十一月阿部豊後守殿<sub>レ</sub>右之趣申上<sub>レ</sub>。夫々以來妙

行寺<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>。——文政寺社書上

明稱寺

明稱寺 宇田川町ヨリ麻布日ヶ窪ニ移ル。

京都東六條本願寺末  
麻布本村町  
浄土眞宗 宇田山明稱寺

市街充實時代

二五五



一、境内御年貢地三百六拾五坪。

内、古跡百貳坪貳合。○中略。

一、當寺草創之儀、慶長十四酉年芝字田川町横町ニ基立仕<sub>レ</sub>處、寛文中宇田川町之地御公儀御用地ニ被<sub>レ</sub>召上<sub>レ</sub>。寛文三卯年麻布日ヶ窪町ニ引移<sub>リ</sub>罷在<sub>レ</sub>處、新地御改ニ付立去<sub>リ</sub>。段被<sub>レ</sub>仰渡<sub>レ</sub>所、拙寺儀を先々御末寺組頭役相勤居<sub>レ</sub>故、何卒御府内何方之場所ニ成共被<sub>レ</sub>差置被<sub>レ</sub>下度段、本山ノ後御公邊ニ被<sub>レ</sub>奉願上<sub>レ</sub>。付御開濟之上、天和三年只今之地所古跡御除地百貳坪貳合之内墓地三拾坪御免被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>。其後寶永五子年寺地續ニ御年貢地二百六拾貳坪八合持添仕度段奉願上<sub>レ</sub>。處願之通<sub>リ</sub>御免被<sub>レ</sub>成下、其内墓地百坪御差許ニ<sub>ル</sub>。當時ニ境内都合三百六拾五坪内ニ<sub>ル</sub>。墓地百三拾坪ニ相違無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>。

——文政寺社書上

西善寺

西善寺 本郷金助町ヨリ駒込三ツ家町ニ移ル。

書上ケ條覺

一、湯島麟祥院領之内古跡年貢地。御朱印無<sub>レ</sub>御座<sub>レ</sub>。  
一、淨土眞宗武藏國豊島郡駒込三ツ家町。本寺を東本願寺御門跡直末。

一、境内三百八拾坪。

一、山號之興隆山。寺號西善寺。坊號院號無<sub>レ</sub>之。

一、起立最初元和二丙辰年本郷金助町ニ起立ス。其後寛文二年之頃類焼仕、翌年唯今之處ニ引移申<sub>レ</sub>。  
——文政寺社書上

東本願寺末  
興隆山西善寺

駒込三ツ家町

境内古跡地三百八十坪。湯島麟祥院領之内年貢地。

元和二丙辰年本郷金助町ニ起立、其後寛文二年之頃類焼仕、翌年唯今之地所ニ引移申<sub>レ</sub>。  
——續府内備考

潮泉寺 開山寂譽寛文三年ヲ以テ示寂ス。

駒込 淨土宗 潮泉寺

潮泉寺

覺

一、宗旨 淨土宗。

一、本山ハ芝増上寺末。

一、増上山三行院潮泉寺。

一、境内總坪數三百壹坪。内拜領地百三十四坪。持添御年貢地百六拾七坪。  
市街充實時代



一、開山 寂譽上人

右ノ明和二年明和九年兩度之類焼ニ諸記録等悉焼失任、開山遷化セ寛文三卯年六月六日ヲ記シ御座ハヘト、母實名サヘ相知モ不申ハ。

——文政寺社書上

荒波馬頭觀世音堂

荒波馬頭觀世音堂 小堂ヲ日本堤ニ建ツ。

淺草山谷日本堤 荒波馬頭觀世音菩薩堂 一字

一、御除地 六十坪餘。

間口京間三間。奥行同二十間。并土手足九尺八寸餘。

右之分御除地。

一、本尊

荒波馬頭觀世音菩薩

御秘佛ニ付、御長等不奉記之。

一、當寺觀世音菩薩御勸請之由來者、寛文三癸卯年乍恐嚴有院様日光御社參之砌被爲召ハ荒波ト御銘有之ハ名馬ニ御秘藏被爲在ハ處、御道中御安泰ニ被爲在、御歸城ハ之後、淺草御厩石井孫左衛門方ニ於テ致落命ハを、當地ハ

御送り有之、荒波馬頭觀世音ト可致勸請之由、依上意則御名馬を奉葬ハ場所ハ小堂を御建立有之ハ、同寛文四年甲辰二月十三日拙者先代之内良寶院第八世京學坊ハ別當之義被仰付ハ事、良寶院卅代之事後ニ記申ハ。

——文政寺社書上

樹芳庵

樹芳庵 橋場總泉寺寺中也。寛文六年ノ起立ト傳フ。

總泉寺 ○○橋場中略

樹芳庵 寛文三年ノ起立ナリ。開基樹芳院花屋理春ハ佐竹右京大夫娘ニテ、

松平大和守カ室ト傳フ。寛文三年正月廿九日卒ス。本尊正觀音ヲ安ス。

——府内誌殘編

淺草橋場 ○○中略

下總國府臺總寧寺末 妙龜山總泉寺塔司

樹芳庵 寛文三癸亥年起立。

開基法名樹芳院殿花屋理春大姉、寛文三年正月廿九日卒ス。松平出羽守殿娘也。

口碑、松平出羽守殿娘佐竹殿に嫁シ、卒去也。後當寺に葬ル。其妹松平大和守殿に嫁シ、當寺に參詣之節休息所ニ此樹芳庵を取建、樹芳院殿卒ル當寺ニ葬ル、依ハ是市街充實時代



を開基と云。

評定所條例

四年甲辰〇寛文〇紀元正月十二日乙亥〇乙亥、三正綜覽評定所條例ヲ下付ス。

〇嚴有院殿御實紀。

評定所條例

評定所條例 嚴有院殿御實紀ヲ抄ス。

十二日〇寛文四年正月〇中略けふ評定所に條約を下さる。會議の式日は月ごとに四日十二日廿二日とさだめ、もし外に官事あらば、明日會すべし、會集の期は、卯半に出て、申の刻になかんづべし、會集の席へ有司の外一切まいる事なく、尤音信禁ずべし、訟獄のもの老穉並に病者の外は他人差添て出る事をとむべし、訴訟のもの、たとへ御家人たりとも刀帶べからず、訟獄の戚屬知己のよし、みありとも、有司その席にをいてこれを周旋あるべからず、遠國のうたへは、府下にとまるとる日の多少にしたがひこれを聽べし、府のうたへは、簿冊の先後もてこれをきくべし、但さりがたきゆへあるか、または急遽の事はこの限にあらざ、鞫問の事は、うけばりあづかる吏、これをつとむべし、その他も思ふ旨あらば、はかりなく示すべし、斷獄の後事にあづかる吏、公案を註記すべし、

し、老臣もその公案を寫させ收むべし、その日に決しがたきは、其有司明日會集してこれを沙汰し、猶はてざるは、老臣に議して聞え上べし、すべてのうたへ、其事うけたまはる吏のもとにてまづこれをきき、會議の席へ出すべきは、證人證跡をそろへて出し、とゞこほらしむべからず、過怠として繫獄するものは相議して日數をさだめ、その期を過なばはなつべし、あづけおくものは、ながくおくべからず、すみやかに考覈して事をわくべし、裏判ならびに召狀を得ながら遅參するものは、その居地の遠近をかうがへ、日數をはかり、輕重にまたがひ、あるは獄に下し、あるは罰錢出さしむべし、この條件守るべしとなり。

松平賴重屋鋪替

二月晦日癸亥〇寛文四年(紀元二三三二)〇癸亥、三正綜覽高松〇讚岐國城主松平賴重〇讚岐守上屋鋪

〇市内ヲ返上シテ、目黒六軒茶屋附近〇市内芝區ニ代地ヲ賜フ。〇柳營日次記、天享吾妻

鑑。玉露叢。承應江戸圖。新添。江戸之圖。伯爵松平家回答。

松平賴重屋鋪替事蹟

松平賴重屋鋪替 松平賴重上屋鋪ハ、高松松平家舊記、寛永二十年癸未八月三日徙居櫻田賜邸下見ユル者、承應江戸圖新添江戸之圖等櫻田ニ松平右京下有

市街充實時代



ル是也。目黒下屋鋪ハ、御府内場末往還其外沿革圖書之ヲ記ス今ノ白金臺町二町目ニ在リ。

○寛文四年二月晦日晴

松平讃岐守重。頼

右願之通上屋敷被召上、目黒ニ有替地貳萬坪被下之旨、讃岐守家來大久保主計招殿中、老中列座演達之。

柳營日記記

一、同月○寛文四年二月晦日ニ、松平讃岐守頼重上屋敷ヲ差上ケ、目黒六軒茶や邊ニ

テ、右ノ替地願ヒ奉ラル。依テ願ノ通り替地トシテ、二萬坪下サル旨、彼家臣大久保主計ヲ營中ニ召、御老中被仰付之。

——天享吾妻鑑○玉露叢同。

一、寛文四年甲辰二月晦日大將軍命賜目黒村別邸。

——伯爵松平家回答○高松藩。

是月○寛文四年(紀元二二二四年)二月本所○市内本所區ニ屋鋪ヲ賜ヒタル者ニ、地形金ヲ給ス。

本所地形金賜給

○竹橋餘筆別集。

本所地形金賜給

竹橋餘筆別集ニ據ル。

本所地形金賜給事蹟

寛文四年辰二月日於本所屋敷被下以地形金渡留。

表書之金何程可被相渡以。斷者本文有之。以上。

彦右衛門○妻木頼照勘定頭。

豐前○岡田善政勘定頭。

但馬○土屋數直若年寄。

青山丹後守○幸通一人分

戸田相模守○氏照三人分

仙石因幡守○久信三人分

水野周防守○忠増三人分

三枝隱岐守○全守一人分

内藤若狹守○重頼一人分

一、金貳拾八兩

但、五百七拾坪之屋敷地形金

一、金八拾四兩

但、一人ニ付貳拾八兩宛

一、金八拾四兩

右同斷

一、金八拾四兩

右同斷

一、金貳拾八兩

一、金貳拾八兩

市街充實時代



一、金五拾六兩

但、壹人ニ付貳拾八兩宛

三枝攝津守

俊○守組  
二人分

一、金三百八兩

但、壹人ニ付貳拾八兩宛

町野壹岐守

宣○幸組  
拾一人分

一、金百九拾六兩

但、壹人ニ付貳拾八兩宛

板倉市正

大○重組  
七人分

一、金五拾六兩

但、壹人ニ付二十八兩宛

大久保山城守

高○忠組  
二人分

一、金五拾六兩

但、壹人ニ付二十八兩宛

松平因幡守

義○勝組  
二人分

一、金五拾六兩

右同斷

松平監物

氏○忠組  
二人分

此五拾六兩之手形半分二十八兩ニ直リ裏書遣引立次第此留直セリ。

一、金八拾四兩

右同斷

松平縫殿頭

次○乘組  
三人分

一、金百拾貳兩

右同斷

土屋兵部少輔

直○之組  
四人分

一、金四拾兩

右同斷

大久保出羽守

朝○忠組  
五人分

一、金貳百貳拾四兩

右同斷

本多土佐守

隆○忠組  
八人分

一、金八拾四兩

但、一人ニ付二十八兩宛

大草主膳正

盛○高組  
三人分

一、金貳拾貳兩

但、四百五十坪之屋敷地形金

遠山十右衛門

重○景組  
一人分

一、金八拾八兩

遠山藤右衛門

門組  
四人分

一、金四拾四兩

右同斷

能勢市十郎

永○賴組  
二人分

一、金六十六兩

市街充實時代

横田甚右衛門

松○胤組  
三人分



右同斷

一、金貳拾二兩

一、金四拾四兩

但、壹人ニ付二十二兩宛

一、金貳拾八兩

一、金二十二兩

三百六十坪之屋敷地形金

一、金百八兩

三口合百五十八兩

一、金二十二兩

一、金五拾四兩

但、壹人ニ付拾八兩宛

駒井右京昌親組 一人分

大岡忠四郎種忠組 二人分

新庄與五右衛門興直組 組頭一人分

貳百石 一人分

百俵拾八人扶持 六人分

筒井内藏(○忠助)組

貳百俵 壹人分

百俵拾八人扶持 三人分

二口合七拾六兩

一、金二十八兩

一、金三拾六兩

但、壹人ニ付拾八兩宛

二口合六拾四兩

一、金五拾六兩

但、壹人ニ付二十八兩宛

一、金拾八兩

二口金七拾四兩

一、金三拾六兩

但、壹人ニ付拾八兩宛

一、金貳拾八兩

市街充實時代

阿倍忠右衛門(○正義)組

三百俵 組頭一人分

百俵十人扶持 二人分

三宅傳左衛門(○重正)組

三百俵 組頭二人分

百俵十人扶持 一人分

大久保甚兵衛(○忠昌)組

百俵十人扶持 二人分

宅間伊織(○憲之)組

組頭一人分



一、金七拾貳兩

但、壹人ニ付拾八兩宛

二口合百兩

一、金百八兩

但、壹人ニ付拾八兩宛

一、金五拾四兩

右同斷

一、金貳拾八兩

一、金九拾兩

但、壹人ニ付拾八兩宛

二口合百拾八兩

一、金拾八兩

一、金百六拾八兩

但、壹人ニ付二十八兩宛

百俵十人扶持  
四人分

川村善治郎(○重正)組  
百俵十人扶持  
六人分

高井作左衛門(○友清)組  
百俵十人扶持  
三人分

鳥居三郎右衛門(○重次)組  
組頭一人分

百俵十人扶持  
五人分

御納戸衆  
山本次右衛門(○政)  
板倉市正(○重)  
六人分

石川美作守(○乘)組  
貳人分

奥津兵左衛門(○宗)組  
壹人

同斷 貳人

一、金三拾六兩

一、金貳拾貳兩

同斷

湯島天神門前

是年二月町奉行支配ニ屬スト云フ。

湯島天神門前

一、町銘起立之義年來相立睨と相知レ不申以得共天神社地之内ニる、慶長十

九年町家ニ相成以由ニ御座以。其後寺社御奉行所様御支配之所、寛文四辰年

二月中町御奉行所様御支配ニ相成申以。尤天滿宮門前之義故、湯島天神門前

町々相唱申以。

神田明神町 亦是頃町奉行支配ト爲ル。

神田明神西町

市街充實時代

町奉行所管  
地擴張  
町奉行所管  
地擴張事蹟  
湯島天神  
門前

是頃

町奉行所管地擴張

左ノ如ク傳フ。

湯島天神門前

一、町銘起立之義年來相立睨と相知レ不申以得共天神社地之内ニる、慶長十

九年町家ニ相成以由ニ御座以。其後寺社御奉行所様御支配之所、寛文四辰年

二月中町御奉行所様御支配ニ相成申以。尤天滿宮門前之義故、湯島天神門前

町々相唱申以。

神田明神町 亦是頃町奉行支配ト爲ル。

神田明神西町

市街充實時代

町奉行所管  
地擴張  
町奉行所管  
地擴張事蹟  
湯島天神  
門前



一、當町之儀を、神田明神社地之内に有之、西に當り、故神田明神西町を相唱申し。往古を武州豊島郡峽田領之由申傳し。明神社之儀を、往古神田橋御門邊に有之、其後駿河臺鈴木町邊に鎮座御座し處、元和二辰年四月中當所に引地被仰付、凡一萬坪之地所拜領仕、右之内に町家取建申度段、其節之神主芝崎越後守寺社御奉行所に御願申上し處、願之通被仰付、則御支配に相成罷在し。尤其節之書物等、天明六年出火之節燒失仕、年月等相分り不申し。寛文四辰年町御奉行所御支配に相成申し。

町神田明神門前

神田明神門前町

一、當所往古を、武州豊島郡峽田領に御座し處、神田明神社之儀、略。○中、元和二辰年四月當所に引地被仰付、凡一萬坪程之地所被下置し。依之右社地之内に町家取建申度段、其節之神主芝崎越後守年月不知、寺社御奉行所に奉願し處、願之通被仰渡、家作仕し。當町之儀を、社地内にある表通り門前に有之、間、神田明神門前町を相唱申し。尤古來を明神表門通り中程に石之鳥居有之、右鳥居内町家と表門前と唱、同所外之方往還迄、明神門前町を唱申し。尤古來寺社御奉行所御支配所に有之、處、寛文四辰年中町御奉行御支配に相成申し。且前

前神田明神表門

書石鳥居天明六年燒失仕、得共、唯今以跡有之、地境之印に仕し。

神田明神表門前

一、當所往古を、武州豊島郡峽田領に御座し處、神田明神社之儀、略。○中、元和二辰年四月當所に引地被仰付、凡一萬坪程之地所被下置し。依之右社地之内に町家取建申度段、其節之神主芝崎越後守年月不知、寺社御奉行所に奉願し處、願之通被仰渡、家作仕、當町之儀を、社地内にある表門通りに有之、間、神田明神表門前と相唱申し。尤古來を明神表門通り中程に石之鳥居有之、右鳥居外往還迄、町家と門前町と唱、同所内を明神表門前と唱申し。尤古來寺社御奉行御支配に御座し處、寛文四辰年中町御奉行御支配に相成申し。

神田明神裏門前

一、當所往古を、武州豊島郡峽田領に御座し處、神田明神社之儀、略。○中、元和二辰年四月當所に引地被仰付、凡壹萬坪程之地所被下置し。依之右社地之内に町家取建申度段、其節之神主芝崎越後守年月不知、寺社御奉行所に奉願し處、願之通被仰渡、家作仕、則當町之儀を、社地内にある裏門通りに有之、間、神田明神裏門前と相唱申し。尤古來を寺社御奉行御支配に有之、處、寛文四辰年中町御

前神田明神裏門



奉行御支配ニ相成申上。

文政町方書上

市谷上寺町

市谷上寺町 内、長延寺門前宗泰院門前是年町支配ニ入ルト傳フ。

市谷上寺町

一、市谷上寺町之儀者、長延寺・宗泰院・長龍寺、右三ヶ寺門前ニ在、北側長延寺門前町家○中。寛文四辰年月日不知町御奉行御支配ニ被仰付上。西之方宗泰院門前町家之儀者、○中。寛文四辰年同寺ニある傳文ニ。町御奉行御支配被仰付上。同門前續長龍寺之儀者、○中。町家作之儀、寛永三寅年御願濟之由、其後寛文八申年中類焼仕、右町家中絶仕上處、寶永七寅年七月廿七日寺社御奉行本多彈正少弼様於御内寄合町御免被仰付、寶永八卯年町御奉行御支配被仰付、古來之何れも寺社御奉行御支配之所、前書年月ニ町御奉行御支配ニ被仰付、何れも永代門前町家ニ在、三門前一同左内坂上寺町々相唱上處、寛政三亥年之頃、左内坂之唱を略し、上寺町と計相唱來り上儀ニ御座上、尤唱初年代相知不申上。

但、前書長龍寺門前續長泰寺ニも承應元辰年々門前家作有之、寛文四辰年町御奉行御支配ニ相成、一同續門前ニ御座上處、何年之頃ニ被不相分。

文政町方書上

南本所元町

南本所元町 堅川通各町ト共ニ町支配ニ入ル。

文政町方書上

子細有之御取拂被仰付上。

元町○南。略。○上。万治二年ヨリ本所ノ地ヲ漸々町並ニ改メラレ、寛文四年ニハ堅川通ノ町々ヲ江戸市中ニ准セラル。當町是ニ接スルヲモテ始テ町奉行ノ指揮ヲ受ク。

本所元町 古へ柳島村ニ屬シ大西ト云。後南本所村ニ屬シ早ク市店アリ。因テ元町ト稱ス。寛文四年甲辰市街ニ列ス。○中。里俗町西大川河岸ヲ尾上河岸、

回向院前ヲ土手側ト云。昔時此處ヨリ今ノ御船藏前町ニ到リ堤防アリシヲ以テナリ。

東京通志

〔附記〕 朱印査檢

七日○寛文四年三月○中。略。こたび万石の列に領地の御朱印賜はるをもて、けふ觸らるゝは、歴世の御朱印藏するともがらは、御朱印ならびに寫しを添て呈すべし、尤國郡鄉村并に歳入を簿冊にしるして出すべし、御朱印藏せざるともがらは、國郡鄉村并に祿額をつばらに註記すべし、御朱印の外に加恩たまはり、あるは御朱印藏すれども轉封ありしは、其事つぶさに表して、小

市街充實時代

附記  
朱印査檢



笠原山城守長矩永井伊賀守尙庸がもとに出し、其他わさがたきことあらば、これも兩人にこひはかるべしとなり。——嚴有院殿御實記

天守番其他賜宅

三月十日癸酉○寛文四年(紀元二三二)四年(紀元二三三)正綜覽。天守番其他宅地ヲ賜フ。十三日丙

子○寛文四年(紀元二三二)四年(紀元二三三)正綜覽。ニハ、鐵炮方田付圖方○四郎兵衛。組與力同心ニ宅

本所鐵炮所

地ヲ本所○市内。ニ給シ、閏五月十六日丁未○寛文四年(紀元二三二)四年(紀元二三三)正綜覽。本所

鐵炮所○市内。ヲ付托ス。○柳營日記。寛政呈譜。

天守番其他賜宅事蹟

天守番其他賜宅 傳フル所左ノ如シ。

○寛文四年三月十日晴。

一、御天守番御廣敷番御寶藏御土藏番、鮫ヶ橋末ニある屋敷被下之。

御被官大工勘定方御手大工御臺所衆御納戸同心田付四郎兵衛○景利。呈譜圖方。同心

水野小左衛門○重好。増同心表御臺所伊賀組、右之分於本所屋敷被下之。

井關與五郎○親昌。同心四人、於本郷屋敷被下之。小普請同心湯嶋天神近所ニある

被下之。——柳營日記

田付四郎兵衛圖方始武藏。

同文。○寛文四年甲辰年三月十三日、組與力三騎同心廿八人屋敷、本所にて拜領仕仕。四月廿七日右屋敷爲地形金與力共拾金、同同心に七金つゝ賜旨、土屋但州○直數傳。

——寛政呈譜

本所鐵炮場事蹟

本所鐵砲場 寛政呈譜ニ、

田付四郎兵衛圖方始武藏。

同年。○寛文四年。同五月十六日、本所鐵砲場御預被下之。

寛文江戸圖柳原二丁目三丁目ノ北ニ、田付四郎兵衛與力同心、同、田付四郎兵衛同心下見ユ。鐵砲場モ此邊歟。

淺野氏其他賜地

十四日丁丑○寛文四年(紀元二三二)四年(紀元二三三)正綜覽。廣島○安藝國。城主淺野光晟○松平安藝守。小姓

組番頭青山幸通○丹後守。青山宿屋鋪○赤坂區。二萬二千六百六十二坪、小姓

組青山幸高○藤藏。同所屋鋪○赤坂區。一萬二千二百五十五坪ヲ賜ヒ、廿二

日乙酉○寛文四年(紀元二三二)四年(紀元二三三)正綜覽。淺川○磐城國。邑主本多忠以○越中守。上屋鋪ヲ元

竹藏○市内。本橋區。ニ、下屋鋪ヲ本所○市内。本所區。ニ賜フ。○侯爵淺野家回答。公儀日記。柳營日記。

淺野氏其他賜地 淺野氏賜地ハ、

市街充實時代

淺野氏其他賜地事蹟



光晟公○淺野

寛文四年甲辰

一、三月十四日、於青山宿丹後守幸通殿○青山屋敷貳万貳千百六拾貳坪、青山藤藏殿○幸高屋敷壹万貳千貳百拾五坪、大島平八殿○義當を以御所望有之、公邊御伺濟、右兩御屋敷御請取有之。(御直撰ニ無之)

下屋敷 青山北町五丁目今ノ廿七番地。

坪數三万四千三百七十七坪。

寛文四年甲辰三月十四日光晟○淺野ノトキ給フ。

明治二年己巳正月晦日諸藩居屋敷取調ノ際、從前ノ通長勳○淺野へ下賜。

——侯爵淺野家回答○廣島藩

本多忠以賜邸ハ、

○寛文四年三月廿二日乙酉 本多越中守○忠以知行所御暇、則上屋敷下屋敷被下之。

——公儀日記

○寛文四年三月廿二日曇、細雨。中略。

一、 本多越中守○忠以

元竹藏ニル上屋敷、并於本庄下屋敷被下之。——柳營日記

所謂上屋鋪ハ、寛文江戸圖濱町入堀ノ東ニ、内藤志摩邸ヲ南ニシ、松平備前邸ヲ北ニシテ、本田ダン正○忠以養子ト有リ是也。

〔附記一〕 淺野氏下屋鋪

給賜年月ヲ知ラズ。此ヲ附録ス。

下屋敷 築地 今海軍省內濱邊ニ當ル。

坪數六千四百十六坪。

萬治寛文ノ頃、光晟○淺野ノトキ海手葎原ヲ給フ。追々築立邸地トス。

文久三年癸亥三月日不詳長訓○淺野ノトキ請上。

——侯爵淺野家回答○廣島藩

〔附記二〕 水野成之切腹

廿七日○寛文四年三月 小普請水野十郎左衛門成之、無頼の聞えあるにより、昨日

評定所に召て、松平阿波守光隆○蜂須賀に預られんとせしに、被髮して袴も着

せず、其様尤不敬なればとて、切腹せしめらる。其母弟は光隆に預けらる。

廿九日○寛文四年三月 此日水野十郎左衛門成之が二歳の男子を誅せらる。女

市街充實時代



子は松平阿波守光隆にあづけらる。

——嚴有院殿御實紀

老中連署事項變更

廿九日壬辰○寛文四年(紀元二二三四)三月○壬辰、三正綜覽。幕府、老中連署事項ヲ更メ、四月朔

老中連署事項變更事蹟

日癸巳○寛文四年(紀元二二三二)四月○癸巳、三正綜覽。連署要否ノ事項ヲ規定ス。○嚴有院殿御實紀。

老中連署事項變更

嚴有院殿御實紀云フ、

廿九日○寛文四年三月。毎時老臣瑣碎の事にも連署するをもて、政務のさまたげ少からず、今より後大事にのみ連署を用ひ、小事には直月の一人署して行ふべき旨仰下さる。

四月朔日○寛文四年○中略。この日老臣に、出家門跡一門并に參觀の請期城郭修築就封の謝恩、其外諸券、傳驛の奉書等は、連署にて行ひ、御起居を候するか、輕微の物献るか、其他さしあたし小事は、直月の一判もて行ふべき旨定らる。

〔附記〕 賜宅

櫻井宗助正次初六郎左衛門。惣助ト改。後宗ト改。號鐵山常心居士。

寛文四甲辰年四月二日於本所北横堀間口八間三尺五寸ニ貳拾八間之屋敷地、并地形代金拾貳兩、被下置し、旨、稻葉美濃守殿則○正被仰渡。但、右屋敷悻宗助正豊勤之節、天和三亥年御用地ニ付差上、爲代地、小石川白山御殿近所

賜宅  
櫻井正次

土井利益賜邸

眞田伊賀守上ヶ地之内貳百坪餘被下置し、處其後天明二壬寅年於駿河臺大御番河村彌兵衛屋敷ト願之通相對替被仰付し。  
——寛政呈譜

土井利益賜邸事蹟

四月五日丁酉○寛文四年(紀元二二三二)四月○丁酉、三正綜覽。古河○下城主土井利益○周本所○市内區。ニ邸地ヲ賜フ。○柳營日記。

土井利益賜邸

柳營日記二、

土井周防守○利

右願之通、於本庄屋敷被下之。

寛文江戸圖本所堅川北岸ニツ目橋ヨリ東ノ方第二第三横街間ニ「土井スワウ」ト記ス者はナル可シ。

飯田町下舟入堀

是日○寛文四年(紀元二二三二)四月五日。書院番大岡忠高○彌右衛門小姓組土屋重吉○權十郎ヲ奉行トシテ、飯田町下溝渠○市内麴町區、神田區。ヲ擴疏セシム。○殿中日記。公儀日記。柳營日記。嚴有院殿御實紀。寛政呈譜。

飯田町下舟入堀事蹟

飯田町下舟入堀 從來ノ溝渠ヲ疏擴シテ、舟入堀ト爲セル者ノ如シ。

四月五日○寛文四年。

市街充實時代



水野周防守組  
大岡彌右衛門高〇忠  
松平監物組  
土屋權十郎吉〇重

兩人事招營中、御臺所町より飯田町下まで船入ニ被仰付、御堀普請奉行被仰付し旨、被仰渡之。

十二月十四日〇寛文四年

金貳枚、時服宛。 貳ツ羽織、時服。

御堀普請奉行

土屋權十郎

大岡彌右衛門

— 殿中日記

右兩人、飯田町下御普請出來ニ付被下之。

〇寛文四年四月五日 雨。〇中略。

今度鷹師町筋飯田町下御堀、舟入ニ被仰付ニ付、

大岡彌右衛門

土屋權十郎

右鷹師町筋飯田町下御船入ニ成以御堀御普請奉行被仰付之。

十四日〇寛文四年十月

一、金貳枚、時服二、ツ、。

土屋權十郎

大岡彌右衛門

右去頃飯田町下舟入御堀普請奉行相勤、出來ニ付被下之。

〇寛文四年十二月

十四日辛未雉子橋新堀奉行土屋權十郎、大岡彌右衛門、各黄金貳枚、吳服貳道服壹被下之。堀依成就之。

— 柳營日記

— 公儀日記

五日〇寛文四年四月鷹師町飯田町下通溝を堀べしと仰出され、書院番大岡彌右衛門忠高、小姓組土屋權十郎重吉、其奉行となる。

十四日〇寛文四年二月飯田町邊溝渠の經營奉行せし小姓組土屋權十郎重吉、書院番大岡彌右衛門忠孝、成功により金時服羽織を給ふ。

— 嚴有院殿御實紀

重吉〇半三郎。權十郎。土屋。

寛文四年十二月十四日鷹師町飯田町邊御堀通船の水路をひらくのとき、其奉行を勤めしにより、時服二領、羽織一領、黄金二枚を賜ふ。

— 寛政呈譜〇寛政重修諸家譜同。

忠高〇彌右衛門。大岡。

萬治二年七月十一日御書院番より列し、寛文四年十二月十四日御臺所町御

市街充實時代







のまゝに官長へいひをくるべし、尤何方へも出ざるやう親戚に達すべし、今既に小普請に入てあるともがらも、おなじく心得て、その親戚に達すべしとなり。

附記  
下士處

〔附記〕 旗下士處罰

○寛文四年五月  
十六日 晴○  
中略。

一、

御幕奉行  
松風十左衛門

右養子五郎右衛門、石野孫太夫子。去ル十四日之夜、繼父居所裏口より忍入、戸を蹴散し、切込込處、十左衛門長刀を取切合、互ニ手負畢。十歳之娘當座ニ切殺し、九歳之男子深手負、五郎右衛門扈從之輩一兩人、十左衛門長刀ニ疵うらむる。あの由以書付言上之。依之不審成ル者、江戸町奉行迄早速可訴達之旨、武州相州在々所々に御觸有之。

○寛文四年五月  
十七日 微雨○  
中略。

覺

一、當月十四日之夜、松風十左衛門宅に五六人連ニ忍入、戸をやぶり、あい松を持押込込。十左衛門起合切むをひ、互ニ手負。十左衛門子供切殺立退申。然と手負其外不審成との、侍屋敷寺社方町中并江戸近邊之在々所々

ニ於有之者、早速町奉行所迄注進をへし。若隱置他所より伺ふるに於そへ、後日ニ聞へ共罪科ニ行な事。

一、跡々被仰出通向後手負者、町奉行所に罷出帳ニつき可申事。右之通、今日被仰出者也。

○寛文四年五月  
廿二日 晴○  
中略。

一、

松風十左衛門

右御穿鑿之上、日頃不屈之段被聞召、追放被仰付。十左衛門養子ハ、頃日堀美作守昌親に御預之處、今日死罪。子共同罪被仰付之。爲檢使嶋田藤十郎頼重并御徒目付兩人被遣之。

廿六日 ○寛文四年  
五月 ○中略。

一、御幕奉行松風十左衛門同養子五郎右衛門追放死罪之事。去十四日之夜切候由。十左衛門宅へ、五郎右衛門忍入、十左衛門被疵、同實子娘即時切殺、男子ハ翌

日相果、五郎右衛門逐電。此趣十左衛門以書付訴之。依之關東中御穿鑿之處、廿一日岡田豊前守次善所ニ五郎右衛門來。依堀美作守へ御預之。其後御穿鑿落着之上、今日於美作守所斬罪。爲檢使御目付嶋田藤十郎、御徒目付貳人



相越。

十左衛門儀ハ、評定所へ召寄、伊澤隼人信。政北條安房守房。正兩町奉行御目付小出甚左衛門明。幸徒目付貳人相越、上意之趣安房守達之。則追放。五郎右衛門男子壹人、十左衛門宅ニ多死罪。爲檢使徒目付相越。

右旨趣ハ、五郎右衛門事、實父石野孫太夫於駿州相煩、爲見廻去頃相越ハ、處十左衛門方ハ孫太夫處遣書狀其狀云、五郎右衛門事、十左衛門妻女へ贈艷書無所存至極無言計、向後斷父子之儀、私宅歸參不可叶云々。五郎右衛門聞之、十二日駿府發足、品川ハ十左衛門方へ以使曰、孫太夫方へ一封之紙面、曾以無其謂、就中被絶父子之恩儀、旁迷惑至極云々。使雖及再三、不及一言之返答。於爰重る曰、祇今迄ハ難逃父子之道、令存付る、雖盡禮無其全、然之非所及微力、此上ハ我又絶父子之儀存之間、可有其覺悟ニ付、急度申斷之。右之仕合云々。雖然一度父子之契約、殊更夜中忍入條、甚不屈付る、被刎首之。又十左衛門儀ハ、不分明之儀申懸段曲事ニ付、追放云々。——柳營日次記

覺

一、當月十四日之夜、松風十左衛門宅へ、五六人連ニ忍入、戸を破り松明を

持押込、十左衛門起合切むを、互ニ手を負ハ。十左衛門子供切殺し立退ハ。然之手負其外不審なるもの侍屋敷寺社方町中並ニ江戸近邊之在々所々ニ於有之、早速兩町奉行所へ可注進、若隱置他所より顯るハ、ニ於てハ、後日知れハ共可行罪科ニ。

一、跡々より被仰出ハ、通り、向後手負ハ者、町奉行所へ罷出、帳ニ付可申事。五月日

右之通り被仰出ハ、間、町中家持之不及、申借家店借裏々下々ニ至る迄、成程念を入致穿鑿、手負其外不審成者於有之、早々兩御番所へ注進可申上ハ。若隱置、脇より顯るハ、ニ於てハ、急度罪科可被仰付ハ、間、無油斷吟味可仕ハ。勿論跡々より被仰出ハ、通り、向後手負ハ者、兩御番所之帳ニ付可申ハ、以上。

辰四年○寛文五月十七日 町年寄三人 正寶事錄

廿七日己丑年○寛文四年紀元二二三四府下ニ令シテ、市街表店ニ茶肆ヲ

設ケテ婦女ヲ置キ、及吳塵敷女ヲ畜フルヲ禁ズ。○正寶事錄

表店茶肆等禁制 正寶事錄ニ左ノ禁令ヲ見ル。

市街充實時代

表店茶肆等禁制

表店茶肆等禁制事蹟



一、町中ニ表棚ニ茶屋構ニ以多し、女を差置、商賣仕由、自今以後ハ、堅無用可  
仕事。

一、町中よござ敷女を抱置、こさやと名付ケ女有之由、自今以後、左様之商賣  
仕由も此壹人も差置申間敷事。

右二ヶ條之趣、名主五人組切々立會、互ニ吟味仕、町中よて壹人も差置申間敷  
以。若於有之者、可爲曲事。五月日

右乙辰○寛文四年五月廿七日御觸、町中連判。

閏五月朔日壬辰○寛文四年(紀元二三四)壬辰、三正綜覽府中○甲斐國城主松平綱重○參議不忍

池屋鋪○市内本郷區ニ代ヘテ、鐵炮州下屋鋪○市内橋區海上ニ添地ヲ賜フ。○公儀日記

替若干有リ。○柳營日記是日○寛文四年(紀元二三四)五月朔日及廿四日乙卯○寛文四年(紀元二三四)五月乙卯、三正綜覽屋鋪

松平綱重其他屋鋪替 傳フラク、

朔日○寛文四年(紀元二三四)五月朔日甲府參議○松平綱重鐵炮洲下屋敷近邊之海上被増補、不忍池屋敷返上。

○寛文四年(紀元二三四)五月朔日中略。

——公儀日記

松平綱重

一、左馬頭殿○松平綱重鐵炮洲之屋敷狭ニ付、鐵炮洲海手ニ有、不忍池端屋敷引替  
被遣之。○中略

渡邊綱貞

渡邊大隅守○綱貞愛宕下之屋敷狭ニ付、於鐵炮洲引替被下之旨。  
○寛文四年(紀元二三四)五月廿四日乙卯○陰、晴、中略

一、屋敷替被仰付以輩、

小林五左衛門組  
三橋九郎左衛門屋敷

三枝隱岐守組  
久松喜三郎屋敷

與兵衛屋敷

平田道有屋敷

久松喜三郎○定延

建部與兵衛○直恒

平田道有○貞庵

三橋九郎左衛門

右之通改替仕度旨、願之通被仰出之。  
——柳營日記

謂フ所不忍池屋鋪或ハ其根津邸ナラム乎、根津邸ハ、相傳ヘテ、

甲府御下屋鋪○根津

延寶貞享頃の江戸繪圖、今の根津權現社地及元屋鋪元組屋鋪など唱ふる邊、

ふべて甲府御下屋鋪と載せ、又元祿八年武鑑より、甲府中納言綱豊卿下屋鋪

下谷池の端と記し、こゝ池之端七軒町等の續なれど、卷の名を襲ひしなら

市街充實時代

久松定延

建部直恒

平田道有

三橋九郎  
左衛門



ん。

承應記、元年八月十四日長松君左馬頭綱重卿の御幼名なり。へ御下屋鋪海手と山の手よ  
て兩所進せらると云々。海手と云ハ、今濱御殿の地なり。山之手と云ハ、何きふ  
るや。當所の外、青山及麻布よも甲府御屋鋪在て、共よ延寶頃の江戸圖よを出  
たり。又柳營譜畧よ、慶安四年九月廿四日綱重卿下屋鋪拜領ともよい  
つも三屋鋪とも此頃賜ひしなるへし。其後寶永元年中納言綱豐卿御養君と  
成を給ひて、西丸へ入御ありし頃、當所よて御誕生の地よて、根津權現御産神  
ふれと、同年御屋鋪地を割て權現の社地よ御寄附あり、殘地ハ御家人等へ分  
ち賜ひしといへり。

府内備考

略。上延寶中。中一圓甲府殿下谷屋鋪。註よハ處、寶永元申年文昭院様川家  
宣。西丸に御入後、同二百年中前書甲府殿下谷屋鋪跡地當時小屋鋪有之邊、地名根津元御屋鋪。之  
内、當所ハ西南之方根津權現社地ニ被仰出、駒込千駄木ニ有之ハ權現社同所  
に御引移有之由。略。下

御府内場末往還沿革圖書

ト爲シ、寛文江戸圖以下元祿十五年圖ニ至ルマデ皆甲府邸トシ、寶永三年圖ニ  
至リテ西丸御用屋鋪ト書ス。寛文四年返上スト記ス者疑フ可キニ似タリ。或ハ

附記  
八町堀鐵  
炮安土

當時鐵炮洲下屋鋪添地下引換ノ議有リシモ、竟ニ沙汰止ト爲リタル者歟。

〔附記〕 八町堀鐵炮安土

一、八町堀御同心町ニ鐵炮安土出來申ニ付、入札被仰付ハ間、望之者ハ、今日  
中ニ喜多村所へ參り、注文入札可仕旨、町中可被相觸ハ以上。

閏五月九日寛文四年町年寄三人

六月十九日己卯寛文四年(紀元二三二四年)己卯(三正綜覽)屋鋪替ヲ命ゼラレタル者若干。

日○柳營  
次記。

屋鋪替 柳營日次記ニ據ル。

○寛文四年六月  
十九日晴。

屋鋪替被仰付面々、

水野忠貞  
大久保忠  
榮久左  
小角文左  
小島正朝  
依田明朝  
依田直朝  
仍田重輝  
織田信備  
宮崎重信  
大岡忠信  
野々山元綱

水野石見守○忠  
中根日向守組  
小角文左衛門  
青山藤右衛門組  
依田彦左衛門○信  
北條右近組  
織田源助○信  
伊澤隼人正組  
大岡宗兵衛○忠

松平外記組  
大久保甚五左衛門○忠  
高木主水正組  
小島助左衛門○正  
小笠原金兵衛○直  
駒井右京組  
宮崎彌五兵衛○重  
松平縫殿頭組  
野々山彌兵衛○元

市街充實時代



土屋政重  
江原宣全  
打越光春  
安藤次春

本多美濃守組  
土屋長三郎政重  
瀧川長門守組  
打越治右衛門光種

江原與右衛門宣全  
町野壹岐守組  
安藤忠右衛門次春

附記  
葺工賃  
錢  
限制

右之面々、屋敷替之義奉願ニ付、可任其意旨、被仰出出。  
〔附記〕 葺工賃錢限制

覺

一、町中屋根屋共、大風吹き吹砌、又ハ俄か成儀有之、屋根葺大勢入用之節、屋根屋共申合、手間賃高直ニ取取由、被聞召召由、自今已後、一身之申合、手間賃高直ニ取取由、可爲曲事、附、屋根葺儀請取ニ仕、其屋根葺かけ置餘人之屋根屋共葺不申様申合由、已來左様之儀出來申由ハ、葺掛掛屋根屋共、籠舍可申付付事。 辰四年六月廿二日

右之通於御評定所被仰出出間、御觸町中連判

正寶事錄

七月十二日辛丑

寛文四年(紀元二二〇四年)〇辛丑、三正綜覽。

布帛定尺ヲ申令ス。

撰要永久錄。正寶事錄。御當

家令條。武江年表。公儀日記。柳營日記。萬天日錄。國朝舊章錄。本朝度攷。

布帛定尺

是ヨリ先寛永三年十二月七日布帛ノ定尺ニ關スル布令有リテ、

布帛定尺

蹟  
布帛定尺事

一、絹紬之事、壹端端付、長大工かねかねよて三丈貳尺、幅壹尺四寸。  
一、布木綿之事、壹端端付、長大工かねかねよて三丈四尺、幅壹尺三寸。  
右織物之寸尺如斯御定之上上、長幅不足之絹布賣賣由由ハ、來年四月朔日日見合見合セセ由由ハ、可取取之者也。  
寛永三也。

十二月七日

御當家令條

ト云ヒシガ、是ニ至リテ左ノ申令有リ。

定

一、絹紬之事、大工かねかねよてたけ三丈四尺、幅壹尺四寸。  
一、布木綿之事、大工かねかねよてたけ三丈四尺、幅壹尺四寸。  
右之通跡々々御定之處ニ、近年猥ニ有之有由由ハ、向後此寸尺ハ不足ニ於織出出、可爲曲事。來年年已〇寛文秋秋改改之、不足之分、見出次第、可取上之旨、可相觸觸由由ハ、可存其趣者也。

右之趣被仰出出由由ハ、町中家持ハ不及申、借屋店借旅人針付等迄申渡、御定之寸尺ハ外、相背商賣仕間敷敷由、急度申聞、此旨相守可申由ハ、若相背背由由ハ、如何様之曲事ニ及可被仰付候。爲後日、町中連判、手形差上申由ハ、仍如件。

市街充實實代



寛文四年辰七月十二日

町中連判

撰要永久録○正寶事録同。

公儀日記ハ、之ガ諸國ヘノ布令ヲ七月十三日附、八月三日公布トシ、御當家令條ハ、七月十三日附、柳營日次記ハ、八月三日附トス。

而シテ謂フ所ノ已秋○寛文五年。改ノ結果トモ見ル可キ所傳ハ、左ノ如シ。

一、八月○寛文五年。ニ、絹木綿布の丈ヲ二丈六尺ニ御定メナリ。

——萬天日録

一、同年○寛文五年。絹木綿布長貳丈六尺ニ定めらる

——國朝舊章録

秋○寛文五年。絹布の長サ二丈六尺に定めらる。

——武江年表

寛永三年ニ布帛ノ長サ廣サヲ定メラレシニ、曲尺ヲ用ヒラレ、東武實録ニ、寛永三年丙寅十月

二月七日仰出サル趣、一ツ絹紬之事、壹反ニ付、長サ大工カネニテ三丈四尺、幅一尺三寸、右織物ノ寸尺如レ此御定ノ上ハ、長幅不足之絹紬布木綿賣候ニ、寛文四年再命セラレシモ於ルハ、來年四月朔日ヨリ見合候者、可取之者也トアリ。曲尺ニテ定メラレタレバ、寛文四年八月三日ニモ、絹紬一端ニ付キ、大工カネ壹端ニ付、大工カネニテ、長三丈四尺、ハ、關東ニモ官ニハ、吳服尺ハ用ヒラレザリシナリ。然レトモ民間ニテ吳服尺ヲ便トセシカバ、寛永四年八月ニ作、キヌモ

メタンノ付、ナガサハ二丈、大工カネニ一丈二寸ヲ御フクハ、長ハ二丈八尺有リ、モメン一尺、吳服尺ノ二丈五尺ハ、曲尺ノ三丈、吳服尺ノ二丈八尺ハ、曲尺ノ三丈三寸ヲ用ヒシ事知ルベシ。寛文五年ヨリ吳服尺ニテ端匹ヲ度ル事ニ改定メラレシナラン。玉露叢書ニ、寛文五年秋、絹布帛一丈二寸ナリ。版本和漢合運ニモ、此事ヲ載セタリ。然ラバ曲尺ニテ布帛ヲ度ルコトハ、此時ヨリ廢セシナルベシ。然レドモ、奥羽越後ナドノ邊

テ、吳服尺ヲモ製スルニモ、曲尺ヲ用フト云ヘリ。高野、其後吳服尺ノ五分、譌長シタルヲ山ニテ衣服ヲ製スルニモ、曲尺ヲ用フト云ヘリ。鯨尺ト云ヒシナラン。土ニテ、一尺二寸五分ナリ。裁衣尺ハ官制ニアラザル故ニ、西

造リ、是ニテ布帛ヲ賣リシカバ、其家布帛ヲ買入多カリシトゾ。是ニヨリテ、他ノ布帛ヲ賣ル者モ、此尺ヲ學ビ用ヒシガ、後ハ裁縫ニモ是ヲ用フルコトハ、鯨魚、鯨、又ハ桑木ニト云ヘリ。按ズルニ、乳母冊子ニ、クヂラ、クワノモノヲ用フルコトハ、鯨魚、鯨、又ハ桑木ニ一尺二寸五分ノ鯨尺ニハアラズ。裁衣尺ハ西土ニテモ明ヨリ始マリテ、ソレヨリ前ニハ別チ用フル事ナシ、況皇國ノ古此等ノ尺無カリシコト明ラケシ。

好古小録ニ、鯨尺ハ唐ノ御府尺ナリト云ヒシハ、何ニ據リタルニカ、御府尺ノ名物ニ見エタルコト無ケレバ、信難シ。按ズルニ、吳服尺ハ、モシ四令集解ニ載セタル高麗尺ナルカ、高麗尺ハ、東魏尺ナルベキコト、上ニ云ヘリ。又ハ演繁露ニ載セタル京尺ニテ、附録ニ詳ニ、鯨尺ハソレヲ譌長セシモノニヤトモ思ヘドモ、吳服尺京尺尺共ニ近世ニ出タル上ニ、布帛裁縫ニノミ用ヒテ、其他ノ事ニハサレバ、吳服尺鯨尺用ヒザレバ、必サニハアラズ、裁衣尺ノ傳ハリシモノナルベシ。等ハ皆後世民間ノ私尺ニシテ、官家ノ用ニ充ツベキ尺ニ非ズ。



松平綱吉濱屋鋪

廿九日戊午

○寛文四年紀元二二三年七月○戊午三正綜覽

館林野國上

城主松平綱吉馬頭右濱屋鋪

ヲ深川

○市內深川區

ニ給スルノ命有リ。○柳營日次記

松平綱吉濱屋鋪

柳營日次記ニ左ノ如ク見ユ。

○寛文四年七月廿九日戊午雨

右馬頭綱吉卿○松平家臣

黒田信濃守

○用綱呈譜直相

右招殿中於深川綱吉卿

○松平濱屋鋪被遣之旨老中傳達之

〔附記〕

毘沙門堂門跡領

○寛文四年八月五日甲子曇

毘沙門堂御門跡○公海

右去頃被下領知五百石之所付御書出被下。則東叡山圓覺院住心院被爲召

老中渡之。

柳營日次記

藤堂高通柳原邸

九月四日壬辰

○寛文四年紀元二二三年四月○壬辰三正綜覽

阿濃津

○伊勢國

城主藤堂高次○大學頭柳原邸

○市內下谷區ヲ二子高通

○佐渡守ニ讓渡ス。

○子爵藤堂家回答

藤堂高通柳原邸事蹟

藤堂高通柳原邸

子爵藤堂家回答○久居藩ニ據レバ、左ノ如シ。

御邸地取調書

柳原邸地

元御本家様ノ御中屋敷ニシテ、御初代高通公○藤堂へ御讓受、寛文四年九月四日ヨリ染井ヨリ御引移、爾來御本邸トナル。

本邸沿革略

始祖高通公御分知前ニ於テ、宗家ノ中屋敷ナリシ向柳原邸讓受相成リ、寛文四年九月四日宗家染井邸ヨリ御移徙、爾來上屋敷即チ本邸トナル。當時及其後ニ於テ、本所石原小石川七軒町下谷七軒町同御徒町本所緑町駒込富士前等ニ、下屋敷若クハ抱敷屋アリシガ、御相對替等ノ變遷ニヨリテ、慶應年間ニハ、此上屋敷七千六百拾四坪、下谷二長町下屋敷貳千四拾八坪餘、駒込三ツ家町下屋敷貳百五拾坪、四谷千駄谷下屋敷百坪アリシガ、慶應四年八月東都ニ於ケル諸侯ノ邸地一般ニ上地被仰出、明治二年正月廿五日更ニ向柳原上屋敷及二長町下屋敷ノ二ヶ所下賜相成リ、明治二年六月藩制發布ニ依リ、翌三年八月此上屋敷ハ久居藩官邸トナリ、二長町下屋敷ヲ以テ私邸ト御治定。當市街充實時代



時二長町下屋敷ノ地坪及建家左ノ如シ。

地坪貳千四拾八坪餘。

建家百九拾七坪貳合五勺。

四拾九坪、西長屋南方。五拾九坪半、西長屋北ノ方。  
内三拾三坪貳合五勺、北長屋西ノ方。五拾貳坪半、北屋敷東方。  
三坪物置。但、稻荷社殿。

但、當分御住居ハ、久居藩邸ニテ從前ノ通。

明治四年六月二長町賜邸西表長屋建坪四拾九坪取毀チ、板塀冠木門建設。御住居向久居藩官邸ノ内買受、新規御取建相成リ、四年九月御移住、爾來本邸トナル。明治五年四月地券交附ノ際ニ於ケル坪數左ノ如シ。

表間口六拾六間半。裏行南五拾九間半。北五拾八間半。裏間口六拾七間半。總坪數二千百八拾三坪七合五勺。但、表通り下水溝ハ此間數外トス。

明治十七年七月本所番場町五拾五番地有栖川宮家令藤井國吉所有ノ屋敷御買入、多少修繕ヲ加ヘ、同年十二月八日御隱居高邦公御別居トナル。之ヲ番場邸ト云フ。明治廿六年三月廿八日神田和泉町一番地ヨリ出火、二長町ノ本邸全焼トナリ、一時番場邸ヘ御移轉相成リ、後本邸地内御假家ニ御移住。同年十二月小石川區關口水道町三拾番地廣橋賢光所有同町二拾九番地ヨリ三

拾三番地迄五筆、山吹町百八拾四番及百八拾五番二筆ノ宅地合計壹千六百拾壹坪二合、建家木造瓦葺二階建及平家計六棟百六拾四坪、并ニ土藏一棟拾貳坪五合、雜作疊建具庭木石一切有形ノ儘御買入相成、多少修繕ヲ加ヘ、同廿七年一月十八日御移轉本邸トナル。明治三十一年ニ至リ、兩邸合併ノ議アリ、同年十二月本郷區駒込千駄木林町百五拾六番地青木重彦所有同番地宅地千三百四坪、同百五拾四番地畑三反九畝貳拾貳步、建家七棟、百三拾壹坪八合四勺、土藏貳棟拾壹坪、雜作疊建具庭木石一式、有形ノ儘御買入相成、同三十二年六月此地來ノ建物悉皆取毀、同年七月畑地ヲ宅地ニ變換シ、同三十二年九月廿三日本邸新築ノ繩張成ル。同三十三年三月御邸地表門前道路狹隘ニ付、今井勘右衛門所有地ノ内壹間通長サ三拾八間ノ地ヲ御買入、四年五月廿一日上棟式執行、同年十一月落成ニ付、同月九日小石川邸ヨリ御移轉、同月十六日番場邸ヨリ高邦公御初メ御三方御引移相成ル。但シ番場御別邸ハ、明治三十二年十二月本所區藤代町四番地住近藤陸三郎ヘ御賣却相成リ、爾來本邸ヘ御移居迄御假寓相成リシナリ。小石川邸ハ、明治三十七年七月麴町區飯田町五町目貳拾八番地住井上辰九郎ヘ御賣渡相成候。



附記  
藤堂氏下  
谷七軒町

——子爵藤堂家回答居久

〔附記〕 藤堂氏下谷七軒町邸讓渡亦是頃ニ在ル歟。

御邸地取調書

下谷七軒町邸地地面四千三十拾貳坪。

御本家御二代大學頭様高次。藤堂ヨリ御初代高通公堂。藤へ御讓受。略。下

——子爵藤堂家回答居久

伊東氏屋  
鋪替

伊東氏屋鋪替

伊東祐  
豐

祐豐主膳正。始熊太郎。

伊東祐  
實

同文。寬四甲辰年九月八日、伊東出雲守實。祐麻布谷町屋敷々主膳正木挽町

築地拜領屋敷と替地奉願願之通被仰付之旨、伊澤隼人正信。政々双方家來

呼出申渡し。

——寛政呈譜

博奕禁止及  
警火下命

十四日壬寅○寛文四年九月。紀元二二三四。年九月。壬寅。三正綜覽。將軍家綱川。德町奉行ニ面命シテ、

博奕禁止及  
警火下命

博奕禁止及警火下命 柳營日次記其他ニ。

○寛文四年九月  
十四日壬寅。晴。

一、 御座之間。

村越長門守○吉勝

渡邊大隅守○綱貞

右被召出、町中爲博奕停止之義、并火之元等、堅可申付之旨、御直ニ被仰出之。

——柳營日次記

十四日○寛文四年九月。町奉行に、市人博奕を嚴禁し、火をいましむべき旨、面命あり。

——嚴有院殿御實紀

附記  
塵芥運搬  
課錢

〔附記〕 塵芥運搬課錢。

町中塵捨賃之覺

一、角屋敷表口小間ニ付、壹分五厘宛出可申事。

一、中屋敷塵捨賃を、表口小間壹間ニ付壹分宛出可申事。

一、裏町ニ表口有之所を、裏町之方ニある小間壹間ニ付五厘宛出可申事。

一、新道會所屋敷之中を、はきぬき兩ヶ輪成し、所を、片ヶ輪ニある壹分宛、表間數應出、片ヶ輪ハ塵捨無用ニ可仕し。

市街充實時代



右之通今度増以塵捨賃當七月分可出可申事。

辰〇寛文四年九月廿九日

右ハ同日〇寛文四年九月廿九日喜多村ハ町々月行事被呼寫之。

撰要永久録

武家其他ノ市街宅地録上

是月〇寛文四年九月元令シテ諸侯以下士人醫師僧徒ノ宅地ヲ市街ニ有スル者ハ地主家守ノ姓名ヲ具記シテ之ヲ町年寄ニ提出セシム。〇御觸書大成令。

武家其他ノ市街宅地録上 蓋申合也。

武家其他ノ市街宅地録上 事蹟

寛文四年九月

一、此以前も相改以通町中ニ大名衆并侍衆之屋敷御扶持人衆同醫者衆之屋敷出家衆之屋敷有之ハ、誰人之屋敷家守誰々有體ニ書付帳面ニ作り町中連判仕町年寄方ハ持參可被申シ若本屋敷主之名を隠し置家守之名計を書付張面上ケ置以以後其ウリ名之家守惡吏仕出し歟又は缺落ふと仕ハハ其屋敷ニ罷成以間自今以後此旨本屋敷主方エ申斷少も違背無之様ニ入念を可申觸書。

九月

御觸書〇大成

附記一 銀座座人處罰

〔附記一〕 銀座座人處罰。

寛文三年三月銀座座人處罰セラレタル者有ルコト既ニ之ヲ記ス四年十一月八日更ニ左ノ處罰有リ。

八日〇寛文四年十一月

- 銀座隱居 平野平右衛門
- 同年寄 平野屋平四郎
- 勘定役 喜四郎
- 同 喜兵衛
- 同 平四郎養子。

右四人私曲ニ付宥死罪一等八丈島ハ流刑被仰付。

- 京銀座年寄 山口屋了珠
- 江戸銀座年寄 小西忠左衛門

右銀座役被召放。

- 銀座役不仕 平野屋喜右衛門
- 勘定役 山口屋市郎右衛門
- 了珠子。

市街充實時代



右以上五人、御定之所ニ追放被仰付。

右之罪侶於評定所

御留守居衆

北條安房守房。正

村越長門守吉勝。吉

森川小左衛門俊。之

右出座、上意之趣演達。

御徒士目付

重本佐五右衛門

伊傳兵衛

相越ス。右銀座闕所被仰付ニ付、御跡目付、

最倉藤兵衛

庵原與右衛門

梶山五左衛門

鈴木藤左衛門

石黒源兵衛

安喰與五右衛門

右可改之旨被仰付日。柳營。

平左衛門へ申渡

一、先年駿府之銀子吹出之儀終、御役人迄不申上日。事。

一、銀座之役退去之以後、如前々座方之配當取日。事。

一、御穴藏十萬貫目之吹出取込日。上、又銀三萬枚未進仕日。事。

以上。

右之外銀座へ申渡覺

一、銀座中へ御條目之申渡、令達之事。

一、御穴藏十萬貫目之吹出之儀、其斷可申上儀ニ日。上、猶以去年急度可申上處、其沙汰不仕、御條目誓紙令違背事。

一、新役人共、親子兄弟縁者之者申付之、依怙仕儀、誓紙之面令違背事。

一、十萬貫目之吹出銀取込日。上、又三萬枚未進仕事。日。柳營。  
○寛文四年十一月十六日晴。略。

京都

野村新兵衛

末吉孫九郎

野村藤左衛門

淀屋太左衛門

右四人銀座年寄被仰付之旨、御留守衆申渡之。

一、平野助左衛門

狩野七郎右衛門

右兩人、去頃銀座年寄被仰付日。上。

右之輩ニ被差加之。

——柳營日次記



銀座平野屋平左衛門・同平四郎・同喜四郎・同喜兵衛・親子四人の者とも、今度流人ニ被仰付ひ間、右四人之金銀脇差衣類其外諸道具預ひもの有之ハハ、不穩居早々兩御番所へ可申達ひ。若隱置他所より於申出ひ者、曲事可申付ひ以上。

十一月〇寛文四年九日

正實事錄

附記二  
二丸防火

〔附記二〕二丸防火

諸侯ニ課シタルヲ停メ、持弓頭持筒頭ヲシテ之ヲ掌ラシム。

十一月十五日〇寛文四年御持弓頭御持筒頭殿中へ招之、向後御城近邊火事出來之節ハ、非番之輩一組宛、二之御丸へ可相詰之旨、被仰渡之。

殿中日記

廿五日〇寛文四年十一月二丸防火の大名を廢し、持弓持筒の頭、非番のものに其事をつかさどらしめらる。

嚴有院殿御實紀

耶蘇教禁制  
申令事蹟

十一月廿五日癸丑〇寛文四年十一月廿五日耶蘇教禁制令ヲ申ス。〇柳營日記。嚴有院實事錄紀。

耶蘇教禁制  
申令事蹟

耶蘇教禁制申令

十六日〇癸酉略。

宗門御仕置被仰出

覺

一、耶蘇宗門御制禁よりといへ共、密々弘之族有之と相見、于今斷絶無之條、向後遂穿鑿、役人を定、常々無油斷、家中并領内改之、不審成もの無之様可申付ひ。若此上吉利支丹宗門領内よ有之ハ、他所方何々ハる、よあゐてハ、可爲不念事。

一、吉利支丹宗門其所ニ有之義を、名主五人組可存ハ處、この以前高札に書載之旨趣令違背、不申出ハ、已來更きよりあらざる、よあゐてハ、せんさくのうへ、乍存知不申出ハ、可被行罪科之旨、兼々申聞ハ、無油斷相改ハ様可被申付ハ事。

一、吉利支丹宗門近年かるきものとも令露顯、法をもひろむるをき吉利支丹を不申出、すゝ勉をもいとしハ程の者ハ、ぬくくくれ可有之ハ間、入精遂穿鑿捕之様、急度可被申付事。附、宗門訴人之輩は、自此已前御定之通、御褒美可被市街充實時代



下事。 寛文四年十一月十五日

今日一萬石以上諸大名之家來を阿部豊後守○忠宅に招寄、右之書付被相渡之。

口上之覺

一、さりとて宗門穿鑿之儀、一萬石以上之面々ハ、今度如被仰出、役人を定、家中領内、毎年無斷絶可相改事。

一、九千石以下之輩ハ、役人を定、儀可難成之間、家中之者ハ不及申、知行名主年寄百姓巨細ニ遂吟味、今度書付之通申、含之、其上毎年五人組手形を取置、何時ニよらず、公儀方御尋之砌、其手形を出、様ニ番頭組頭支配方、入念急度可被申渡事。

一、御代官所之儀ハ、手代之内役人を定、無油斷、書付之通可遂穿議事。

一、此以前さりとてんよてころひ在之ものいハ、書付之、北條安房守○正保田若狹守○宗迄可相通事。

一、寺社領門外之町等ハ、其住持神主より委細遂穿鑿、様、寺社奉行所方急度可被申付、事。

一、さりとてん御制禁之高札ふるく成、文字見へ兼いハ、書直可被立之事。

以上 辰○寛文十一月廿五日

柳營日次記

○前略。柳營日次記同。右被仰出、趣、慥ニ承届申、間、町中家持ハ不及申、借屋店借下々等ニ至る迄急度相守、五人組一切ニ宗門之吟味仕、旦那寺より手形を取り置可申、若無僉儀仕、脇より訴人於有之者、如何様之曲事、も可被仰付、爲後日町中連判手形、仍如件。

寛文四年辰十二月十六日

——正實事錄

廿五日○寛文四年十一月けふ令せらるゝハ、耶蘇の教制禁せらるゝといへども、ひそかに其教をひろむるやからありて、今猶絶ざれば、このゝち考察の吏をさだめ、常にをこたりなく邸中并に封内を改め、不審なるものなきやうにすべし、このゝち邪教を奉ずるもの封内にありて、他よりあらはれなば、過失たるべし、其教を奉ずるもの郷里にあるを、其里正等高札の旨にそむき、知らざるさまなしてうたへ出ず、この後他よりあらはるゝにおいては、査覈して嚴科に處せらるべき旨、あらかじめ曉告し、をこたりなく査檢せしむべし、邪徒近年かろきものゝみ露顯し、其魁首はなを出ざれば、深く潜匿してあるべき

市街充實時代

三〇九



により、力をつくして搜索し、召とらへんやう嚴に令すべし、うたへ出しともがらには、さきくさだめのごとく褒賜あるべしとなり。よて老臣よりもさらには委しくつたふるむねあり。

——嚴有院殿御實紀

是月

○寛文四年(紀元二二四四年)十一月二

三日上水ヲ開ク。

○上水篇参照。

三田上水  
蹟三田上水事

三田上水

嚮ニ龜有上水ヲ通ジ、青山上水ヲ通ジ、是ニ於テ三田上水ヲ通ズ。顛末上水篇ニ之ヲ記ス。

三田上水の事

寛文四辰年十一月評定所に於て上水道取立堀渡可申旨、中村八郎右衛門、磯野助六といへる兩人に申渡在之。北澤村にて三尺四方の水口より上水道取立、北澤むら、代々木村、中澁谷村、三田村上目黒村、中目黒村、白金村、大崎村上水道堀割、築土手八箇築、土手上無蓋戸樋八ヶ所、惣溜樋白堀之上くゞり樋野方吐八ヶ所、大崎猿町より埋戸樋、貳本榎伊皿字通り、聖坂、三田町、松本町、新馬場、同朋町、西應寺町、角樹迄、大通り上水道、野方白堀築土手溜樋惣戸樋一式、右之兩人入用を以仕立いよし。水銀水錢年々請取之。上水道大通り也。修復割合上水引取い屋敷々出金在之い由。且麻布御殿に之上水也。元祿十一寅年仰

付らき、其後御殿類焼以後相止い由。享保四亥年十一月下澁谷村之内道城池、田子池、右二ヶ所に御用水相懸りい由。白金新堀端武家寺町上水樋榊仕立、細川越中守屋敷前より分水、大通掛渡有之由。前文北澤村代々木村より西應寺町迄、八つ山邊、高輪、浮簧、芝田町筋、新網町、増上寺新門前邊、大芝町、芝金杉邊相懸りい由。此外地名略之。享保五子年十一月八郎右衛門助六差出い書付、御普請方御役所ニ有之。此上水も享保七寅年十月相止。

——上水記

——文政町方書上

十二月十一日戊辰

○寛文四年(紀元二二四四年)十一月二

屋鋪替有リ。十五日壬申

○寛文四年

フ者若干。

○公儀日記、柳營日次記、寛政呈譜。

ニハ、鳥取

○因幡國。城主池田光仲

○松平相模守。

其他屋鋪ヲ賜

屋鋪給賜事

屋鋪給賜ハ、

○寛文四年十二月十一日晴。○市街充實時代



恒岡資久  
遠山爲庸

東京市史稿

一、恒岡新左衛門○資久

遠山新八郎○爲庸

右屋敷替、願之通被仰付、土井能登守○利久、演達之。

柳營日記

十二月十五日ノ賜邸ハ、

十五日申○寬文四年十二月、屋敷拜領面々、松平相摸守○池田仲光、細川越中守○利綱、松平安藝守○淺野光、森内記○長繼、松平右衛門佐○黒田光之、松平阿波守○賀光隆、京極丹波守○丹後守、丹羽左京大夫○重光、立花左近將監○鑑虎、松平周防守○康映、本多中務大輔○長政、松平備後守○恒元、池田土井兵庫頭○利長、永井伊賀守○尙本、本多山城守○利忠、本多吉左衛門○晴、加藤織部正○直泰、水野主膳○久忠、永井外記○尙牛、込忠左衛門○重平、北條新藏○平氏、東條民部戶田惣右衛門○道氏、永井右衛門○直右、葦山六左衛門○蔭朝、加藤三左衛門○退嘉、加藤源左衛門○重明、朝倉平十郎○宣季、各或隣明地或新屋敷被下之。

公儀日記

一、屋敷拜領之面々。

松平相摸守  
松平安藝守  
松平阿波守  
森内記

山内忠豊

細川越中守  
京極丹後守  
松平對馬守○山内忠豊  
松平右衛門佐  
丹羽左京大夫  
立花左近將監  
松平周防守  
松平覺雲

松平覺雲

堀田正俊

堀田備中守○正俊  
松平能登守○池田直政

池田政直  
本多忠英

本多中務大輔  
本多肥前守○忠英  
加藤織部正  
永井伊賀守  
本多吉左衛門  
永井外記  
本多山城守  
永井記

中西元照

水野主膳  
牛込忠左衛門  
北條新藏  
中西圖書○元照  
東條民部  
戸田惣左衛門  
永井右衛門  
松平伊織○清親

松平清親

蔭山六左衛門○持廣  
加藤三左衛門

加藤源左衛門  
朝倉平十郎

市街充實時代

三一三

朝倉藤山、加藤嘉持、蔭山直道、永井氏重、東北條氏重、牛野重尙、水野忠直、本多利直、永井利直、池田恒政、松本康鑑、立花光高、丹羽重隆、京極高重、蜂須賀光長、黒田光之、淺野綱光、細川綱光、池田綱光、



逸見義元  
朝比奈忠利

東京市史稿

逸見五左衛門元○義

朝比奈藤左衛門利○忠

三一四

右之面々、内々奉願屋敷被下旨、老中傳達略○中  
一、屋敷拜領之面々。

土井兵庫頭

永井伊賀守

蜂須賀隆重  
川窪新十郎

蜂須賀飛驒守重○隆

川窪新十郎

蔭山六左衛門

戸田惣左衛門

東城民部

柳營日次記

右之面々、願之地屋鋪被下之旨、老中演達。

加藤明張

明張○加藤豐之助、大學。

寛文四辰年十二月十五日芝新馬場前松平薩摩守津○島西隣○島ニる屋敷拜領。

寛政呈譜

内淺野光晟ノ賜地ハ、赤坂屋鋪ノ添地ナル者ノ如ク、侯爵淺野家回答○廣○左ノ如ク有リ。

光晟公○淺野

承應三年甲午

一、七月廿八日、此程赤坂地形御普請有之ニ付、ケ様之御序之刻數年被仰入ハ御下屋敷廻り根張道より内之分、御拜領被遊度旨、御老中方迄被仰入ハ所、寛文四年十二月十五日赤坂御下屋敷廻り御望之地面、町屋多有之所相除、其外地面拜領之儀、於御城、因幡守長治君へ御老中方御列座ニ被仰渡。（御直撰ニ無之）

中屋敷 赤坂一ツ木町今陸軍省用地ニ當ル。

坪數壹萬八千九百三拾坪

元和六年庚申月日不詳長晟○淺野ノトキ給フ。

但、寛文四年甲辰十二月十五日光晟○淺野ノトキ、内三千四百九十八坪五合増給。

元祿八年己亥二月廿三日綱長○淺野ノトキ上ル。

寶永七年庚寅閏八月廿七日吉長○淺野ノトキ復給。

明治二年月日不詳長勳○淺野ノトキ上地トナル。

侯爵淺野家回答○廣○藩

同年○寛文四年三石貳斗三合三勺貳才

松平安藝守様に渡ル。  
只今坊主衆に渡ル。

市街充實時代

三一五



蜂須賀光隆賜邸ハ、

江戸屋敷ノ沿革

一、寛文四年十二月十五日於目黒下屋敷(一萬坪)被下。

——侯爵蜂須賀家回答○德島藩

本多政長賜邸ハ、小石川原町名主安右衛門舊記ニ左ノ如ク見ユル者是歟。

一、高九石五斗三合三勺

右是ハ寛文五年乙二月四日本多中務殿○政長。

〔附記一〕屋鋪給賜 月日知ラズ是年屋鋪ヲ賜ヒタル者、左ノ如シ。

植村右衛門佐家貞幼名相知不申イ。初名吉。後家貞。

同年○寛文四年。武州豊嶋郡麻布領麻布村下屋鋪拜領仕イ。

宗冬○柳生。幼名主膳。内膳。後改飛騨守。

寛文四甲辰年、芝新堀端下屋敷拜領仕イ。

直長○新庄。宮内。長門守。

同文○寛文四甲辰年、芝拜領居屋敷奉願、三宅半七南八丁堀屋敷相對替仕、同年

附記、一、  
屋鋪給賜  
植村家  
貞

柳生宗  
冬  
新庄直  
長

三宅半  
七

有馬重  
廣

窪田正  
綱

松浦氏本  
所下屋鋪

六月同所引移。

重廣○三五郎。次郎兵衛。

寛文四辰年、木挽町築地ニ屋敷被下之。

正綱○五右衛門。

一、元青山宿ニ在り拜領屋敷、寛文四甲辰年本庄二之橋通馬場角貳軒目設樂源右衛門屋鋪四百八拾貳坪と相對替仕、貳十ヶ年居住。

——寛政呈譜

松浦氏本所下屋鋪

給賜ノ年月ヲ知ラズ、是年冬營作スト傳フ。今附記ス。

本所下屋敷

一、寛文四年冬本所牛島下屋敷ニ新ニ營作ス。此地松浦家ノ所有トナル年月不詳。同五年二

月松浦壹岐守様淺草邸ヨリ移居。元祿二年七月松浦肥前守○鎮信致仕シテ、

八月此ノ邸ニ移居ス。同十一年本邸全焼移居ス。

同十三年願ニ依テ本所抱屋敷ノ内五千坪下屋敷ニ與ラル。

因ニ云フ、鎮信赤穂四十七義士○鎮信儀訪ノ當時、陣太鼓ヲ聽キ分タリト世ニ

市街充實時代



傳へタルハ、此邸ニ住マハレシトキノコトナリ。

——伯爵松浦家回答〇平藩。

一ツ木町内賜地

一ツ木町内賜地

一ツ木町名主八郎左衛門記録ニ據レバ、是年一ツ木町ノ内ノ地ヲ賜ヒタル者、上記淺野氏ノ外左ノ如シ。

同(〇寛文)四辰年。壹石貳斗三升五合九勺九才

伊澤隼人正殿(〇政信)に渡ル。只今吉川勝之助殿御やしき。

寛文四辰年。貳斗三升九合九勺九才

松平外記殿(〇伊)に渡ル。

同。壹石六斗九升五合三勺貳才

柳澤伊左衛門殿屋敷ニ渡ル。只今一色仁左衛門殿屋敷。

同。拾八石三斗七升貳合貳才

伊賀衆御地頭様方三拾五人分御やしきニ渡ル。

小石川内賜地

小石川村内賜地

一、高貳石七斗三升九合三勺

右是ハ、右同(〇寛文)四年甲辰九月七日 御餌差衆四組渡。

——小石川原町名主安右衛門舊記

附記二 番士制規

嚴有院殿御實紀ニ、左ノ如ク見ユ。

(春秋休暇)十四日二〇寛文四年十(〇中略)この日令せらるゝは、番士春秋休暇給はり、采邑に赴く事、一日に往來すべき地は、上直の間兩三回も遣すべし、二日三日程の地は、上直一日を除て遣すべし、上直をかぎてまかることをはゞかり、直日の間にまかるべしとこふものは、兩回も遣すべし、直日をかぎてまかるものは、一人づゝ遣はし、人數多き時は、二人もつかはすべし、直日の間にまかるものは、一回に三人も遣すへし、道程遠く隔るとも、まからでかなはざるゆへあらば、番頭組頭相はかりて遣はすべしとなり。

(火災時心得)又火災の時、人々尋問は、親子兄弟舅甥小舅伯叔父母娚姪祖母従弟孫に限るべし、當直の時其宅地火あらば、夜中にもまかんでしむべし、父の宅地火あるは、たとへおのれ同居するとも、妻子なきともがらはまかんでしむべからず、當直の時、其宅地并に近隣火變あるよし告來らば、番頭組頭につげてまかんづべし、其頭在あはざる時は、同隊の人に告てまかんづべし、晝後夜中は、近隣の火にてもまかんづる事一切有べからず、宿直の時火災ありて、まうのぼる頃までやまざらば、斷て出るに及ばず、又火災のとき、諸隊屯所の事は、供奉の小姓組は櫻田口、大腰掛、書院番は大手大腰



掛御先に候する新番は、花圃の下、御腰物持薬込も同じ。小十人は同所、歩行士二隊は大手、持弓炮の組のうち一隊は、北拮擗橋の前に出べし、其他非番の士は、宅に在て、各頭のもとへ家人を出し置、指揮を待べし、歩行士并に弓炮の與力同心は、各頭よりかねての下知にしたがふべしとなり。こは多く屯所にまかる時は、ことさらに紛擾すればなり。  
(親屬看侍) また親屬病あるとき、看侍の事は、親子兄弟祖父伯叔父母孫甥姪舅妻危篤に至り、外に親子兄弟もなからんには、上直をゆるして看侍せしむべし、其うちにも親子は、各別たるべしとなり。

徳山氏山崎氏下屋鋪

十八日乙亥寛文四年(紀元二三二四年)十二月〇乙亥、三正綜覽。本所屋敷奉行徳山重政兵衛。山崎

重政左衛門。本所築地小屋ノ地ヲ賜ヒテ下屋鋪ト爲ス。公儀日記。

徳山氏山崎氏下屋鋪事蹟

徳山氏山崎氏下屋鋪 公儀日記ニ、

十八日乙亥 天晴。本庄屋敷奉行徳山五兵衛政。山崎四郎左衛門政。黄金三

枚。吳服貳道服一被下之。并本庄築地小屋掛之所、爲下屋敷被下。

徳山重政下屋鋪ノ北本所松平綱吉藏屋鋪ニ隣ルコト、寛文江戸圖ニ之ヲ見ル。即チ其築地小屋所在地也。山崎重政下屋鋪ハ、今其處ヲ知ラズ、寛文江戸圖堅川

南今ノ林町三丁目内ト思ハルル處ニ、山サキ三左ト有リ。重政ノ弟三郎左衛門政則ノ屋鋪ナル可シ。重政下屋鋪亦或ハ之ガ附近ニ在リタリトセム乎、徳山氏ハ北部ノ填築ヲ受持チ、山崎氏ハ南部ノ填築ニ當リシ者ニ似タルモ、果シテ然ルヤ否ヤヲ明カニセズ。

〔附記〕 水アビセ禁令

水アビセ禁令ハ、屢之ヲ見ル。弊害多カリシヲ想フ可シ。

覺

一、町中ニある水回ひせ之事、此以前々如相觸ひ、親類縁者并召仕之者迄、銘々屋鋪之内ニある水あひせ可申ひ。他人ハ壹人々出合申間敷ひ。尤笠鉾作り物以下何ニある一切仕間敷ひ。家持を不及申、借屋店借召仕等迄、堅可申觸ひ。若相背ひハ、急度可被仰付ひ。右之通、町中不殘可被相觸ひ以上。

已寛文五年。十二月廿四日 町年寄三人

撰要永久録

廿八日乙酉寛文四年(紀元二三二四年)十二月〇乙酉、三正綜覽。浅草米廩市内浅草區ヲ修理シテ成ル。柳

浅草米廩修理

營日次記。

市街充實時代

附記 水アビセ禁令



淺草米廩修理

柳營日次記ニ云フ、

○寛文四年十二月  
廿八日陰○  
中略。

一、金一枚ツ、

鈴木清兵衛  
村井十兵衛

右淺草御藏破損御修復出來ニ付。

是月

○寛文四年(紀元二  
三二四年)十二月

城壕ニ於ケル船貨揚卸制規ヲ榜示ス。○御  
制法。

城壕船貨制規榜示

御制法云フ、

江戸御堀廻之高札

條々

一、此御堀にて、舟より荷物揚之時、船を岸際よりけ、御堀より引くた不落様  
ニ仕る事。

附、荷物揚之輩其跡急度可致掃除事。

一、大船之荷物を出入三日中より取揚るし。小舟も翌日を限るし。引船久しく  
不可懸置し。荷物揚拂より引いてハ、早速相戻るし。并荷物舟場より永々不可積置  
事。

附、此御堀において、船をかけ置諸商賣不可仕事。

一、所々より引くた、舟にて捨所、永代島より札を立置之間、其所へは引くハし  
可捨之。若道筋において捨之、又夜舟より遣す儀可爲停止事。

右條々可相守之。若相背之族於有之、可被行曲事。近所辻番を可改之、自然荷  
物揚之時、押留之輩有之、是又可被所罪科者也。

寛文四年十二月日

奉行

〔附記〕 本所土手明屋鋪制規

條々

一、本庄土手之土、同御用地之土、一切取之るらざる事。

附、町屋敷前道之土より取、道あしく不可仕事。

一、有來道之外、土手不可往還事。

附、新道へちり芥を捨るらざる事。

一、明屋敷にて殺生をるらび、并下水道にて魚を取るらざら事。

右條々可守之。若於有違犯之族を、可處罪科。此外徳山五兵衛政。○重 山崎四郎  
左衛門政。○重 申付趣、不可相背者也。

市街充實時代



寛文四年十二月日

奉行

市街起立轉

是年元○寛文四年(紀  
元二三二四年)

市街ノ起立轉移シタル者若干有リ。

○文政町方書上。  
文政寺社書上。府。

御制法

内備考。

市街起立轉  
移事蹟  
長圓寺門  
前

市街起立轉移 寛文四年ノ起立ニ係ル市街ヲ舉グ。  
長圓寺門前 文政寺社書上傳ヘテ左ノ如シト爲ス。

芝二本榎松光寺末  
武州在原郡下高輪村  
淨土宗 日照山海上院長圓寺略。中

一、門前町家三軒。但、間口五間奥行六  
間之長家三軒有之。

右當寺門前境内之中ニハ得共、町方支配ニシテ、高輪小臺町之分ニシテ御座シ。尤  
寛文四甲辰年、當寺桑山氏と相對替いとし引移シ頃々、町家作建有之、其比ニ  
御代官伊奈半左衛門殿御支配之由、舊記ニ相見ヘ申シ。

赤坂表傳馬町、壹町目 是頃ヨリ居住ノ舊家有リタルコト文政町方書上ニ見  
ユ。

一、舊家

家號出雲屋  
と相唱申屋。

赤坂表傳馬町壹町目  
家持 彌 太 夫

鮫河橋谷  
町

右先祖彌太夫義之、雲州出生ニシテ、年代不知御當地ニ罷下リ、赤坂裏傳馬町壹  
町目ニ住居致、道中日雇請負渡世仕罷在、寛文四辰年三月十八日病死仕ハ處、  
三拾九ヶ年以前八○天明六代目彌太夫、當町内持地面ニ引越シ、當彌太夫ニ  
シテ八代ニ相成、右渡世之外、兩替并蠟問屋商賣仕罷在シ。  
鮫河橋谷町 伊賀者三十一人領受ス其頃ヨリ町家ノ借地起立ヲ見ルト云フ。  
領受者ハ其後幾多ノ轉移有リ。

鮫河橋谷町

一、町方起立之儀、往古ハ一ツ木村之内ニシテ、御入國之砌、御供仕ハ伊賀者一同、  
大繩給地ニ被下置シ。右伊賀者住居之儀ハ、當時半藏御門際ハ麴町邊、北ハ田  
安御門近所迄ニ住居致シ罷在シ、其後半藏御門外御堀出來ニ付、居屋敷被  
召上、爲替地四谷大通リ北南ニシテ被下置シ。依之右之場所南北伊賀町々唱ハ  
よし。其後前書御用地場ニシテ無之ものハ、其儘致仕居シ處、又々右之續御堀出  
來ニ付、残り居シもの居屋敷被召上、爲替地本所ニシテ可被下旨被仰付シ處、人  
家少之場所、且仲間ニタ分レニ成ハ、勤向不辨之儀申立、同様山之手筋之  
内ニシテ拜領仕度相願ハ、處、願之通場所見立可申旨、被仰渡シ得共、仲間三十一  
市街充實時代



人一所ニ拜領可仕場無之ハニ付給地一ツ木村之内鮫河橋之田地を屋敷ニ相願ハ處分限高も減し可申趣ニ有、支配御留守居差留ハ得共、押多相願、寛文四辰四月願之通當所ニ有、三十一人居屋敷被下置旨、御留守居伊澤隼人正殿○政被申渡、地割衆城半左衛門殿○朝北見五郎左衛門殿○重本郷庄三郎殿○泰勝殿、御立會之上、大繩地ニ有被下置ハ、其節高減シハ分、他所ニ有足地被下由、其頃々居來ハ百姓共、田地無之ニ付右拜領地之内借地ハ多シ、商賣仕罷在ハ處、元祿九子年四月町御奉行御支配ニ相成、町屋敷地ニ罷成ハ節、四方地高之中場所故前書之通町名相唱ハ哉ニ奉存ハ、右拜領地主姓名并町並抱屋鋪有之儀ハ末ニハ、拜領屋敷數、武家屋敷共三十五ヶ所有レ之候。但シ、上下一ツ木村ト相成ハ年代相知レ不申ハ、當所ハ元上一ツ木村之由申傳ハ、且鮫河橋地名起立之儀ハ、元鮫河橋より申上ハ、

一、町内里俗唱之儀ハ、町内より西之方元鮫河橋北町入江之敷入を相唱申ハ、尤同所を都入と唱ハ故ニ哉を奉存ハ、

一、武家拜領人姓名左之通、

與火之番 永井源五兵衛

一、坪數百八拾八坪七合、間口八間三尺八寸、奥行南貳拾六間北貳拾五間、三尺六寸、裏幅六間、右ハ、延寶七未年永井彥之進拜領仕ハ、元地主斷絶ハ哉、相對替仕ハ哉、相分不申ハ、

御留守居支配明屋鋪番伊賀者 渡邊幸次郎

一、坪數百八拾七坪二合、間口八間壹尺、奥行南貳拾六間北貳拾六間、四尺、裏幅六間、貳尺、右ハ、先拜領人斷絶致ハ哉、相對替仕ハ哉、相分不申ハ、元祿十三辰年渡邊利兵衛拜領仕ハ、

小普請組久世伊勢守組 平井勝四郎

一、坪數百九拾四坪五合、間口九間二尺五寸、奥行南貳拾六間北貳拾六間、四尺、裏幅五間、貳尺、

表御臺所人 大塚榮太郎

一、坪數百八拾八坪五合、間口八間四尺、奥行南貳拾六間北同、裏幅五間、五尺、右ハ、元拜領人名村勘十郎上り屋敷跡、寛政三亥年大塚三左衛門拜領仕ハ、

小普請組土屋謙岐守組 左右田喜三郎



一、坪數百七拾九坪餘。間口七間四尺。奥行南二拾五間四尺。北同斷。裏幅六間二尺。

右ハ、寛文四辰年先祖左右田五兵衛拜領仕御作支奉行支配御大工頭、御作支方、御被官山口榮之助

一、坪數百五拾四坪壹合。間口六間五尺。奥行南二拾二間五尺。北二拾二間五尺。裏幅七間壹尺。  
右ハ、先拜領人斷絶仕御廣敷伊賀者哉、相對替仕松内宇兵衛哉、相分不申地内住居。跡寶曆年中山口嘉内拜領仕御留守居支配明屋敷番伊賀者。

一、坪數百五拾六坪八合。間口六間五尺五寸。奥行南貳拾二間五尺。北貳拾二間壹尺。裏幅七間。  
右ハ、寛文四辰年先祖松内喜右衛門拜領仕御留守居支配明屋敷番伊賀者。

一、坪數百七拾五坪五合。間口七間。奥行南貳拾四間三尺八寸。北貳拾三間五尺。裏幅七間三尺。  
右ハ、寛文四辰年先祖最上甚左衛門拜領仕御留守居支配明屋敷番伊賀者。

一、坪數百六拾三坪餘。間口八間二尺。奥行南二拾四間。北二拾五間。裏幅五間。  
右ハ、寛文四辰年先祖矢部庄左衛門拜領仕御留守居支配明屋敷番伊賀者。

御細工所同心 矢島八十吉

一、坪數百五拾四坪壹合。間口八間三尺五寸。奥行南二拾三間壹尺。北二拾四間。裏幅四間三尺。

右ハ、先拜領人斷絶仕小普請組長井五左衛門組哉、相對替仕榊原鎌太郎哉、相分不申御持筒頭小笠原豐前守組與力。寛保三亥年三月矢島要助拜領仕鈴木常右衛門。

一、坪數百七拾六坪餘。間口九間壹尺。奥行南二拾貳間壹尺五寸。北二拾四間四尺五寸。裏幅五間五尺。  
右ハ、寛文四辰年吉村武兵衛拜領仕櫻田御用屋敷定番伊賀者處、其末吉村大吉代深澤大助ニ至、追放被仰付、寛政六寅年四月八日右地面被召上御持筒頭小笠原豐前守組與力處、同年閏十一月三日榊原茂八郎拜領地面ニ相成申鈴木常右衛門。

一、坪數百四拾坪。奥行南拾七間四尺五寸。北拾八間二尺。裏幅五間三尺。

右ハ、寛文四辰年四月先祖鈴木傳兵衛拜領仕櫻田御用屋敷定番伊賀者。

市街充實時代



右ハ、寛文四辰年先祖深澤勘兵衛拜領仕仕。

御留守居組永井權八郎組同心

鈴木安五郎

西御丸與火之番

小林佐左衛門

一、坪數百四拾八坪餘。間口八間四尺。奥行南二拾間二尺五寸。北拾八間壹尺。裏幅六間三尺五寸。  
右ハ、先拜領人斷絶仕仕哉。相對替仕仕哉。相分り不申仕。寶曆年中鈴木忠七。小林佐左衛門兩人ニテ拜領仕仕。

御本丸添番

三浦金十郎

地内住居

一、坪數百三拾六坪二合。間口七間二尺。奥行南二拾壹間二尺。北同斷。裏幅五間四尺。

太田内藏頭組

松下五郎吉

一、坪數百四拾壹坪五合。間口七間二尺。奥行南二拾壹間五尺。北二拾二間一尺五寸。裏幅五間三尺。  
右ハ、寛文四辰年四月先祖松下十郎左衛門拜領仕仕。

御留守居支配明屋鋪番伊賀者

遠藤平藏

一、坪數百三拾六坪九合。間口六間五尺五寸。奥行南二拾壹間五尺。北二拾壹間二尺五寸。裏幅五間五尺五寸。

右ハ、寛文四辰年四月先祖遠藤市郎兵衛拜領仕仕。

御留守居支配與火之番

池原佐助

一、坪數百六拾壹坪。間口六間三尺。奥行南二拾四間五尺。北同斷。裏幅六間三尺。

右ハ、寛文四辰年四月先祖池原六兵衛拜領仕仕。

進物取次番之頭相樂清次郎組

上番 久野後藤太

一、坪數百四拾九坪七合。間口六間五尺五寸。奥行南二拾二間。北同斷。裏幅六間五尺。

富士見御寶藏番

近藤源左衛門

地内住居

一、坪數百六拾七坪。間口八間二尺五寸。奥行南二拾一間。北二拾四間。裏幅六間壹尺。  
右ハ、寛文四辰年四月先祖近藤彦左衛門拜領仕仕。

二ノ御丸火之番

山中權平

一、坪數百三拾九坪五合。間口七間五寸。奥行南拾七間壹尺。北六間四尺。裏幅九間三尺。  
右、寛文四辰年四月先祖山中惣右衛門拜領仕仕。

吹上御庭奉行支配御花段方

岩崎定六郎

同斷御大工

上田源右衛門



一、坪數百八拾八坪四合。間口七間。奥行南二拾間二尺。北拾九間二尺。裏幅拾二間。  
 右ハ、寛文四辰年四月磯崎久太夫拜領仕、年代不知又右衛門代、甲府勤番被仰付、上り地跡上田源右衛門外一人姓名不知兩人ニ多、天明六年八月申拜領、外一人分年月不知相對替相成岩崎定六郎上田源右衛門兩人之拜領地ニ相成申候。

小普請組久世伊勢守組

堀 小兵衛

御膳所御小間使頭里見善左衛門支配御小間使役

高木友十郎

一、坪數百四拾四坪餘。間口六間三尺。奥行南拾七間五尺五寸。北拾六間五尺五寸。裏幅拾間五寸。  
 右ハ、寛文四辰年四月大竹平兵衛拜領仕、子孫平吉遠島被仰付、寛政三亥年十一月二日地面被召上、同四子年七月十日種姫君徳川家治養女。様御附御臺所頭折原榮次郎支配小間使堀兵十郎高木友十郎兩人ニ多拜領仕候。

小普請組神尾豐後守組

山岡榮次郎

抱町並屋鋪

一、坪數七拾六坪五合五勺。間口三間半。奥行南二拾四間三尺。北二拾九間二尺。裏幅三間二尺。

小普請組太田内藏頭組

重地 文吉

一、坪數右同斷。間口同斷。裏幅右同斷。奥行同斷。

右二人抱屋鋪之儀ハ、寛文四甲辰年四月伊賀者三十一人當所ニ多拜領仕、節、水溜場田地ニ多、伊賀組頭預り年貢取立、處、仲ケ間重地源右衛門無屋鋪ニ付、同人ハ預ケ、自然と拜領屋敷同様ニ成行、其後仲ケ間山岡金助、是亦無屋敷ニ付、右地所之内譲り渡し、處、享保十乙巳年御普請方より屋敷改有之、節、地借之者金助屋敷之趣申立、名主方記録ニハ、重地喜八郎屋敷之趣記シ有之、不分明ニ付、追々御僉儀之上、二人抱町並屋敷々可仕旨被仰渡シ。

御本丸御同朋支配表陸尺

山口安兵衛

地内住居

一、坪數百 拾七坪壹合。間口七間。奥行南二拾三間二尺。北二拾四間三尺。裏幅七間。

右ハ、先拜領人斷絶仕、哉、相對替仕、哉、相分不申。延享元子年九月山口安兵衛拜領仕。

御本丸御廣式書役

中根鐵太郎

一、坪數百四拾三坪四合。間口六間三尺。奥行南二拾二間壹尺。北同斷。裏幅六間三尺。

御本丸御廣式番伊賀者

中根長十郎

一、坪數百六拾壹坪壹合。間口七間。奥行南二拾壹間四尺。北二拾四間二尺。裏幅七間。

市街充實時代



右ハ、寛文四辰年四月先祖中根長右衛門拜領仕ハ。

小普請組土屋讃岐守組  
萩野彦八

一、坪數百六拾一坪餘。間口七間。奥行南二拾壹間四尺六寸。裏幅七間。

御目付支配黒鐵  
鷺谷泰次郎

右ハ、寛文四辰年四月先祖荻野作左衛門拜領仕ハ。

御本丸御廣式番之頭鈴木一學支配御小人  
新井權之助

一、坪數百七拾二坪九合餘。間口七間。奥行南二拾四間四尺五寸。裏幅七間。

御本丸御細工所同心  
日比野勘兵衛

右ハ、寛文四辰年拜領松下金左衛門斷絕仕上リ地。元祿七戌年柚原木甚助拜領仕ハ處。斷絕仕ハ哉。相對替仕ハ哉。跡地面年月名前不知。當時鷺谷泰次郎新井權之助拜領人ニ御座ハ。

御本丸御廣式番之頭鈴木一學支配御小人  
新井權之助

一、坪數百五十九坪八合餘。間口七間三尺。奥行南二拾二間二尺。裏幅七間。

御代官掛本兵五郎手附  
佐野彦六

右ハ、寛文四辰年四月拜領人新見源左衛門子孫養助。不知子細地面被召上ハ跡。文化四卯年五月齋藤德三郎拜領仕ハ處。同人悻孫八文政八酉年五月遠島被仰付地面被召上ハ跡。同年同月日比野勘兵衛拜領仕ハ。

黒鐵頭中山金三郎組  
柴山仁平次

一、坪數百七拾四坪餘。間口七間半二尺一寸五分。奥行南二拾二間四尺。裏幅七間五尺六寸五分。

御留守居石河甲斐守組同心  
石田勝之助

右ハ、寛文四辰年温井新八郎拜領仕ハ處。年月不知。御追放ニ相成。跡享保十二未年十月石田段右衛門若尾與次右衛門。佐野彦七拜領仕ハ處。若尾與次右衛門一人相對替仕ハ哉。斷絕仕ハ哉。芝山源次郎年月不知拜領仕ハ。

御留守居支配明屋鋪番伊賀者  
小平庄三郎

一、坪數百七拾九坪壹合。間口七間四尺。裏行南二拾二間二尺。裏幅八間。

田安殿御近習番  
北 蕃五郎

右ハ、寛文四辰年四月先祖小平孫右衛門拜領仕ハ。

御留守居支配明屋鋪番伊賀者  
小平庄三郎

一、飛地之分武家拜領姓名左之通、

田安殿御近習番  
北 蕃五郎

一、坪數百拾坪餘。間口五間二尺五寸。奥行南拾七間三尺。裏幅七間四尺五寸。

田安殿御近習番  
北 蕃五郎

但シ、家作無之。

田安殿御近習番  
北 蕃五郎

市街充實時代



右ハ、寛文八申年先祖北太左衛門拜領仕ル。

御留守居支配明屋鋪番伊賀者  
永持小源太

一、坪數百拾六坪九合。間口五間二尺。奥行南拾九間。北同斷。裏幅七間。

小普請組久世伊勢守支配  
木原佐次右衛門

一、坪數三百拾四坪。間口二拾一間一尺。奥行南拾五間一尺。北拾七間三尺。裏幅拾七間二尺。

右ハ、寛文八申年先祖木原專之助拜領仕ル。石高三百七拾石九斗二升三合七勺貳才。

右之内御用地ニ上リ分 上下一木村。

寛永十二年三月  
一、高六拾七石貳斗六升六合 溜池ニ上ル。

右同斷  
一、高拾五石二斗七合四勺内 尾張殿義直。德川義直。ニ渡ル。麴町十町目井上但馬守

ニ入渡ル。此所ニ道罷成ル。

右同斷  
一、高五拾二石壹斗六升六合 御堀ニ上ル。

同十三子年四月  
一、高貳拾石壹斗六升五合貳勺 御堀土置場ニ上ル。

同十九子年  
一、高八斗三升六合六勺六才 三浦長門守屋敷ニ渡ル入。

右同斷  
一、高四石壹斗三升六合九勺九才 種徳寺ニ渡ル。

右同斷  
一、高四石三斗三升六合六勺六才 淨土寺ニ渡ル。

承應二戌年正保三ノ誤カ。  
一、高六石二斗七升 服部仲元組屋敷。

右同斷  
一、高五石八斗三升 安藤千福門義直。ニ渡ル。只今ハ戸田織部・松平傳次郎・横山

五郎左衛門・雨宮十太夫此所之屋敷渡リ申ル。

右同斷  
一、高三石七斗六升四合九勺七才 千代姫君德川秀忠養女。様御屋鋪渡ル。赤坂只

今大久保左京米倉主計屋敷ニ罷成。

承應三年  
一、高四拾五石九斗六升二合壹勺八才 赤坂築地御用地新屋敷ニ罷成。只今

土岐内記・小林又左衛門此外屋敷ニ罷成。

明曆元未年  
一、高貳拾石七升三合貳勺六才 紀伊殿德川頼宣。ニ渡ル。一木町ニ在。

右同斷  
一、高五石七斗四升四合六勺四才 右同斷。

右同斷  
一、高八石四斗四升五合三勺 右同斷。

明曆二申年  
一、高三石九斗五升六才 板倉彌作屋鋪ニ渡ル。

萬治元戌年  
一、高九斗四升貳勺五才 太鼓坊主衆ニ渡ル。只今常俊預リ地。

同貳亥年  
一、高拾七石四斗 西尾右京忠成。ニ渡ル。只今靈光院專修寺屋敷。



東京市史稿

寛文二寅年

一、高六斗壹升八合 今井道通り新道ニ罷成也。

寛文四辰年

一、高壹石貳斗三升五合九勺九才 伊澤隼人正信政信に渡ル。只今松平大膳太

夫内吉河勝之助屋敷。

右同斷

一、高貳斗三升九合九勺九才 松平外記耀伊屋敷ニ入渡ル。

右同斷

一、高壹石六斗九升五合三勺貳才 柳澤八郎右衛門ニ渡ル。只今一色仁左衛

門屋敷。

右同斷

一、高拾八石三斗七升貳勺貳才 伊賀者拜領屋鋪人數三十五人分渡ル。

右同斷

一、高貳石貳升三合三勺貳才 松平安藝守光野野に渡ル。只今坊主衆に渡ル。

右之如、明和丁亥年十月中、赤坂高分年貢ニ相成以得共、一ツ木體之内ニ御

座也。

當時

一、四拾七石三斗九升九合七勺四才 上一ツ木鮫河橋町。

一、拾三石一斗四升五合壹勺九才 赤坂下一ツ木町。

右御尋ニ付此段申上。尤諸書物等燒失仕間、駢と仕と義相分り兼ひ以上。

亥十二月

名主

元鮫河橋町

又 太郎

文政町方書上

牛込御細工町

牛込御細工町 町屋敷拜受者有リ。

牛込御細工町略中

一、武家拜領町屋敷、

御鐵炮玉藥奉行寒河金六郎組同心  
小林幸七郎組同心

大野雄右衛門

一、表田舎間拾間餘、裏行同貳拾間、此坪數貳百坪餘。

右之、寛文年中月日不知拜領仕也。略中

小普請組淺野隼人組

平 岩 善 助

一、表田舎間拾間、裏行同貳拾間、此坪數貳百坪。

右之、寛文四辰年月日不知御細工所同心に被召出、右町屋敷拜領仕也。

文政町方書上

牛込揚場町 受領者有リ。

牛込揚場町略中

一、町内拜領地主姓名左之通略中

小普請組佐野豊前守支配

葛山吉次郎

市街充實時代

牛込揚場町



一、表間口京間拾壹間四尺七寸裏行南拾間四尺五寸北拾間六尺此坪數百貳拾六坪七合。

右之、寛文四辰年中月日不知先代拜領仕。

——文政町方書上

淺草田町

淺草田町 寛文四年起立ス。

淺草田町 壹町目 貳町目

町名之起不相分。右田町之儀、寛文四辰年々何方に茲御願不申上、町屋立成、御公役并地頭諸役相勤來申。其後延寶五年淺草寺北大門外西ヶ輪砂利取場、并日本堤際に尙又家作仕度願出、寶永元年申年三月願濟に相成り、新地御改近藤作右衛門様、小倉忠右衛門様御懸よて、願之通被仰付。夫迄不殘新地御奉行御懸り、御座處、同年十二月十八日松平河内守様○松野義歟。御内寄合に被召出、願之通町方御支配に相成申。

——文政町方書上

淺草山川町

淺草山川町 砂利取場ト爲リ轉移ス。  
谷中感應寺門前 淺草山川町

一、町内之儀、往古淺草寺領ニ有之、寛文四辰年八月御城御天守御普請之節砂利取場御用地とし、被召上、代地之義、同所山之宿并今戸之内ニある。同年十一月中被下置、由。其後寶永七寅年二月十六日谷中感應寺門前爲代地、右寺に被下置、當時之町名ニ相成申。何故相名付哉、相分不申。是、往古元地谷中感應寺東裏門前ニ有之、節、坪數三千五百九坪、地所同寺院家佛頂院、右場所貸地ニ相願、元祿十六末年寺社御奉行阿部飛驒守様○正御勤役之節、願之通貸地ニ被仰付。處、右場所御靈場御用向ニある、上野山内に御圍込ニ相成、付、前書之通、當時之場所代地ニ被下置、由申傳。

一、町内一圓ニ字埋堀を唱申。

右之御天守御普請之節御用地ニ相成、右之場所、砂利差出、跡堀ニ相成、由追々埋立、付、埋堀を唱、由申傳。

乍、恐小屋地所年數發端左之通、

谷中感應寺前門代地淺草山川町裏通字砂利場を申所ニ罷有、小屋頭彌右衛門居小屋、并外小屋頭共、右地面之内ニ罷在、小屋頭家數七軒有之。

一、右御地面之義、淺草寺様御領之内ニある、最初延寶五年己七月廿四日淺草砂利取場ニある、長サ二十七間、橫幅十間之地所、右淺草寺様御代官其節御姓名



不相知、右御地面小屋頭彌右衛門に被遊御預ケル處、今年迄凡百四十九年ニ相成申ル。其頃々小屋相建、當時住居仕ル。小屋頭共家數七軒。

北本所

——文政町方書上

北本所 都築某拜領町屋鋪本郷ヨリ轉移ス。北本所内何レノ地ナルヤヲ詳ニセズ。

元赤坂町略。中

一、拜領町屋鋪名前左之通略。中

一、三拾九坪六合

御小人岩崎傳兵衛組  
都築金之助

右ニ先祖甚助ト申者慶長十五戌年御成之節、千駄木ニ野邊切開可仕旨被仰付、則切開畑ニ仕ル所、水戸様御用地ニ被召上、其段申上ル所、自分居屋鋪町屋ニ可仕旨被仰付、寛永元子年々町屋ニ借來、其砌本郷ニ町屋鋪拜領、其後寛文四年右場所御用地ニ被召上、北本所ニ代地被下置略。下

——府内備考

龜戸町

龜戸町 百姓町家ト爲ル。

龜戸町

一、當町之儀者、古來より龜戸邨高之内ニ有、當時も龜戸邨高千五百八拾六石貳斗三升七合之内ニ相籠り罷在、町方起立之儀者、寛文四辰年中々百姓商賣屋取立、渡世仕罷在、天神社地ニ引續ルニ付、里俗天神町々唱來ル由、尤其頃家作御改場ニ御座ル。

——府内備考

龜戸清水町

龜戸清水町 百姓町家ト爲ル。

龜戸清水町

一、當町之儀者、古來々龜戸邨高之内、當時も龜戸村高千三百八拾六石貳斗三升七合之内ニ相籠り罷在ル。町方起立之儀、龜戸一體之儀故、龜戸町々リ委細申上ル通ニ御座ル。尤町名起立之儀、古來々當町をも龜戸町々相唱ル處、當所東裏小梅村押上邨田場之字、由來相知不申ル得共、清水耕地ト唱ル場所所有之、右近邊之町屋ニ付、後年年月不相知、龜戸清水町々相唱ル由申傳ル。

——府内備考

龜戸境町

龜戸境町 百姓町家ト爲ル。

龜戸境町

一、當町之儀者、古來ヨリ龜戸邨高之内、當時も龜戸邨高千三百八拾六石貳斗

市街充實時代



三升七合之内ニ相籠り、其後百姓商賣家取立以後之儀者、龜戸一體之儀ニ付、龜戸町方委細申上し通ニ御座し。町名起立之儀者、當町方請地部ニ相渡し境橋之儀、北者西葛西領本田、南者同領新田之間故、境橋と名付、右續之町故境町と唱し、由申傳ふる、書留等無御座し。

——府内備考

寺院ノ起立轉移シタル者若干有リ。

○文政寺社書上。續府内備考。

寺院起立轉移事蹟

長圓寺 伊皿子道往寺境内ヨリ下高輪村ニ移ル。

長圓寺

芝二本榎松光寺末  
武州荏原郡下高輪村  
淨土宗 日照山海上院長圓寺

一、惣境内古跡御年貢地四百三拾二坪。

内、九拾坪門前町家也。東西拾八間。南北貳拾四間。

但、門前町屋共。

一起立開闢、寛永八辛未年開山傳譽國道伊佐羅合道往寺境内之中、光雲寺北隣表拾四間半、裏に貳拾七間之地を、道往寺開山法譽念無方申請て、一字起立仕し。然處寛文四辰年閏五月寛永八年八月三桑山猪兵衛殿伊後ニ丹波守ト云。所

望こよつて、桑山猪兵衛殿山屋敷を替地こいとし、下高輪村也。當所ニ引移し夏。

——文政寺社書上

芝二本榎松光寺末  
下高輪村 日照山海上院長圓寺

起立之儀を、寛永八辛未年開山傳譽國通伊佐羅合道往寺境内之中拾四間半ニ貳拾七間之地を、道往寺開山法譽念無方申請、一字建立仕し。然處寛文四辰年閏五月桑山猪兵衛殿と替地いとし、當所ニ引移申し。

——續府内備考

黃梅院 年貢地ヲ持添フ。

黃梅院

下高輪泰龍山保安寺末

芝二本榎 雨寶山黃梅院○中

一、同○境 御年貢地表貳拾間五尺、裏口拾七間五尺、坪數貳百貳拾八坪。  
右寛文四辰年寺社御奉行所ニ奉願持添御年貢仕居申し。

——文政寺社書上

長昌寺 起立年代不詳。開山示寂是年ニ在レバ姑ク此ニ載ス。

長昌寺

越生長昌山龍穩寺末

麻布龍土町 禪曹洞宗 自光山長昌寺

三四五

市街充實時代



一、境内御年貢地坪數千貳百七拾五坪。

一、開闢起立之義、睨々相知不申、往古を周防國山口を申所ニ有之、同所瑠理光寺之末寺ニ有之、由、其後年代不知、當國麻布龍土町只今之長泉寺長徳寺之間龍土町之内年貢地貳百五十坪之場所、引地致、其節、龍穩寺末ニ相成、由申傳、○中

寛文四甲辰七月廿八日迂化。

一、開山鐵心御州大和尚、龍穩二十二世、勸

寛文十庚戌七月六日迂化。

一、二世中興開山傑州元智大和尚

本迹寺 權田原ヨリ元鮫河橋八軒町ニ移ル。

——文政寺社書上

本迹寺

境内古跡年貢地二百九十六坪。

元鮫河新八軒町

安房國誕生寺末  
顯妙山本迹寺

起立之儀、寛永二丙寅年今市ヶ谷と申所ニ罷在、其後權田原に引移り、寛文四甲辰年當所に引移申、○中略、以上

舊地ハ市ヶ谷本村よて尾州御屋敷前の所なりし、御用地となり、權田原へ移る。其地ハ六道辻なり。今當所北之方裏手み當り、法冷之地有之、其傍より本院日清と申法花宗之僧妙見一體を持來り、一字建立之祈願を發し、右之地ニ

あ千日之行いとし、結願之後、寛永の初市ヶ谷ニある一字相立本迹寺と號し、其後權田原に移り、又ハ元結願之地當所に引移、元鮫河橋南町書上。

——續府内備考

大慈寺

大慈寺 大塚ニ境地ヲ受領シ建造ス。

京都東福寺末  
小石川大塚  
臨濟宗 普門山天壽院大慈寺

境内拜領地千貳百坪。

當寺起立、寛永年中ニ御座、得共、審ニ相分不申、○中略。

一、大慈寺殿俗名刑部卿御由緒書左之通。當寺初之開基刑部卿と申者、台徳院様之御嫡女市姫様、御七歳之時、大坂御入輿之節、東照宮様賢慮、知謀被爲、勝ハ婦人を所々御尋之節、内藤後室被爲御撰出、初る御目見之節、被仰付、則刑部卿之官を被成下、姫君様御同輿ニ被致入輿、大坂落城迄十二年之間、忠勤、粗大切之事共多御座、得共、省略仕不申上、姫君様御入輿之後、大坂方嚴敷番仕、御供奉之人々痛心、殊ニ龜御事共多御座、得共、刑部卿計略を廻し相遁れ申、ニ御座、兼る御迎ニ可參由申上置、故、不違時、日本多平八郎殿に被仰

市街充實時代



付、京橋口伏見櫓之下に御迎船に被參、用心嚴敷に得共、姫君様爲御忍可申儀難澁之處、刑部卿之指揮よりて、内藤新十郎此時討死仕に故、番人共早々爲加勢罷出し、其隙を見合はる、姫君様奉落、無恙御番地迄供奉仕に、御凱陣之後、御對顔御祝御座に、東照宮様御上意、姫君危難を遁し事、偏に刑部卿計略と乍、申實に天壽也と被仰に故、依之御再縁之後、三之丸に被爲入はる、天壽院様を奉稱し、外にるを樹之字に奉記し得共、右之鈞命を以、當寺にるを天壽院様と奉稱來し、御尊牌は右之通壽之字に記御座に、御凱陣御對顔之節、内藤家御取立可被成下し、内藤新十郎御尋御座に處、刑部卿申上し、忝新十郎以計略爲君討死仕に故、危難を遁、姫君様無恙供奉しを申上し、忝御落涙被遊、外に子に無之歟と被仰出し、新十郎兄出家仕、無得を申、京都即宗院住職仕に由申上し得、無得呼下し、令還俗、内藤家ヲ繼よと被召呼、則御城内に召置大猷院様御文字之御師範被仰付、還俗之儀、時々被爲遊、御勸し得共、達る御辭退申上し得、遂に御機嫌を損し申はる隱居仕に、其後大猷院様又々家督之者御尋御座に故、京都即宗院後住、万古と申者、則刑部卿之孫之由申上し得、万古呼下し、可令爲家督と被仰出、又々被召寄、御城内に被爲召置、嚴有院様御

文之御師範被仰付し、其後時々還俗之事御勸御座に得共、萬古を御斷申上し、刑部卿申上し者、一度出家仕に得、何卒蒙御免除、私知行之内、切米百俵遣し、寺建立仕度由御願申上し得、則願之通被仰付し、其節天壽院様に申上しを申、刑部卿が京都即宗院に之書通所持仕し事、御許容以後、刑部卿開基として、万古禪師中興に仕、日向國大慈寺を申寺號を引移し、古河之岡に建立仕に、其時御上意に、是小分之日向ふりと被遊、御意しより、其所を今も小日向と申由に御座に、本堂、方丈、庫裡、四ツ足門、其外書院、座敷間數御座に得共、略し申に、慶安四年八月三日刑部卿死去、當寺に葬、大慈寺殿仙林榮壽尼居士を申し、居士之號を忝も從、東照宮様被下置し、此時迄ハ刑部卿知行之内にる切米百俵ツ、請取に處、被致病死、今迄之手形之書様名判裏書之通にる可被下之由、右之通相認可遣由、近江殿が松坂殿まで御尋之處所持仕し事、

寺格等宜敷被仰付、御内禮仕に由、御帳面を小日向大慈寺刑部卿開基と御認、金地院之次に御記御座に由、傳承し、大猷院様嚴有院様薨御之節、猷經拜禮被仰付、鳥目五拾貫文頂戴仕、殊に大猷院様猷經之節、寺社御奉行安藤右京進殿○重、金地院僧錄最山大和尚が、猷經首尾能相勤し、刑部卿迄賀儀之書



狀、兩通ともニ所持仕ハ事。

寛文三年刑部卿十三回忌之節御立寄之節當寺ニケ様非可捨置御建立可被成下由被仰出刑部卿造立之寺引移ハ御建立不相成故今迄之寺ニ有縁之方ニ可遣旨被仰出ハ故刑部卿被願上被附置ハ百俵之寺領其節御差上方丈ニ洞家深川禪徳寺ニ遣シ表門ニ當寺同派駒込龍光寺ニ遣シ唐門ニ日蓮宗鮫ヶ橋妙高寺ニ遣右之日記御座ハ。

寛文四年早速御建立可被仰付所寺地ニ可相成所御吟味之上相應之明地無之明年之夏迄相延ハ所急ニ天壽院様ハ屋鋪地御渡し可被成様ニ御催促御座ハ故傳通院領を被召上替地被遣今之大塚ハ境地被下ハ其節神社御奉行加々爪甲斐守殿○直井上河内守殿利御地割衆ニ喜多見五郎左衛門殿城半左衛門殿本郷庄三郎殿ニ御座ハ天壽院様御家老長田十太夫殿迄手紙ニ多申參ハ大慈寺ハ屋鋪之儀天壽院様御望ニ付被下ハ間其段大慈寺ハ申渡ハ様ニ御老中中被仰ハ間大慈寺甲斐守所迄被參ハ様可被仰遣ハ直ニ御老中ニ御禮ニ被參可然ハ左ハハ壹人も如何ニハ間天壽院様御衆御差添可被遣ハ哉々餘ハ略之書付所持仕ハ事。

御普請奉行ニ佐藤駿河守殿○成被仰付ハ由寛文五年之冬繪圖等出來ハ處往還之道寺之軒下ニ罷成ハ故如何可然哉駿河守殿御伺被成ハ處見分之上普請可申付々御意有之普請相延ハ處不豫故御見分不相調天壽院様寛文六年二月六日御逝去ニ付御建立相止居申ハ先達ハ刑部卿造立之寺ニ有縁之方ニ遣ハ節百俵之御切米も差上置ハ處別ニ寺領寄附可被成下之所被爲入御不豫諸事不相調内御逝去ニ付差上置ハ御切米其儘頂戴仕度奉存ハ近江殿ハ普請相止之百俵之切米其儘被下置ハ様ニ御城代衆迄可申上との御挨拶之御文松坂殿ハ御城代衆迄寺領御訴訟可申との御挨拶之御文兩通共ニ所持仕ハ事。——文政寺社書上

——小石川原町名主安右衛門舊記

宗慶寺 小石川原町名主安右衛門舊記ニ

一、高五斗六升壹合

右是ハ右四年○寛文四年宗慶寺ハ相渡。

市街充實時代



永福寺 本郷六丁目喜運寺境内ニ借地ス。

勢州專修寺御門跡末  
本郷六丁目  
淨土眞宗高田派 西木山永福寺

當寺ノ開基了意法師ハ、總州下妻栗山村永福寺ヨリ出寛永六己巳歲深川新田島ニオヒテ一字ヲ起立シ、村名ノ栗山ニ依テ西木山ト號シ、寺務相續廿五ヶ年ヲヘタリ。此處教導ノ夕ヨリ機縁薄ニヨリ、承應二癸巳歲小石川白山前エ轉地ス。四年ノ後明曆二丙申歲火災ニヨリテ堂宇悉ク類燒ス。翌年丁酉年御府内大火。此時ニアタリ住僧生國ニ引込居、去年燒失ノ儘圍無之捨置故ニヤ、カノ地處被召上、天台宗ノ寺院エ代地トシテ下置シ、密藏寺ノ地處是ナリ。其後寛文四甲辰年本郷六丁目禪曹洞宗喜福寺境内東南ノ方、門前町屋ノ地尻ニテ南北拾間東西拾三間、惣坪數百三拾坪ノ地處、中年拾年季ニテ借地仕

瑞松院 谷中玉林寺境内ニ借地ス。

——文政寺社書上

- 一、御朱印拜領地 表間口十二間。裏行九十五間。坪數一萬千百坪。
- 一、曹洞宗駒込吉祥寺末、谷中、望湖山玉林寺 略。中

一、寺領境内貸地寺院 十二ヶ寺 略。中

禪宗妙心寺派 瑞松院

一、表間口十二間半、裏行三十間。

右坪數三百七十五坪。

外ニ貸添地裏續七十五坪。

寛文四甲辰年々境内ニ罷在シ。

——文政寺社書上

瑞松院 善光寺坂下ニアリ、祝融山ト號ス。京華園妙心寺末ナリ。起立ノ年代詳ナラス。元ハ今ノ湯島大根島ノ地ニ創建シ、今ノ地ニ移リシハ寛文四年ノコトナリト云フ。 略。中 境内三百七十五坪、玉林寺境内借地ナリ。

——府内誌殘編

勝運寺 開山德譽寛文四年入寂ス。

京都知恩院末  
淺草今戸町  
末枝山勝運寺

一、除地七百七拾五坪

内、貳百拾二坪御年貢地。 略。中

市街充實時代



一、開山德譽上人寛文四年七月廿八日。

——文政寺社書上

善徳寺

善徳寺 増林寺境内ヨリ深川海邊大工町中通ニ移ル。

四谷龍昌寺末  
深川海邊大工町中通  
曹洞宗 祥雲山善徳寺

一、境内御年貢地五百貳拾坪。

一、抱地<sup>御年貢地</sup>境内北續キ 三百九拾五坪。

右者、享保六丑年拙寺且家八右衛門所持之町地、寄進致し事。

一、抱地<sup>御年貢地</sup>境内東續卵塔場三百七拾八坪。

右之、元祿十六年拙寺且家八右衛門所持之地面奉願上し、則卵塔場處致寄進し事。

一、抱地<sup>御年貢地</sup>境内北續菜園場四百八坪。

右者、寶曆十一巳年隣寺萬祥寺ヲ讓受し事。

一、抱地<sup>御年貢地</sup> 二百四拾坪。

右之文化十三年隣寺眞光寺ヲ讓受し事。

一、當寺起立 寛永六巳年也。

本ハ四谷押衆柿野間角左衛門屋敷ニ取立十二年ニ相成し。夫ハ寛永十七年辰ニ深川に越、町人助右衛門屋敷ニ致借地、十七年罷成し。又明暦二申年同處増林寺中ニ致借地、則八年罷成、則寛文四辰年當寺地所に移りし、嶋與右衛門野屋敷之内永代申請住居仕し事。及當暦迄百六十五年ニ相成し事。尤元祿五申年五月寺社御奉行本多紀伊守<sup>○正</sup>様より古跡並ニ被仰付、庵室を改、只今之寺號ニ相成し事。

——文政寺社書上

善徳寺 海邊大工町ニアリ、祥雲山ト號ス。四谷龍昌寺末ナリ。寛永六年孤溪秀頼ト云僧、四谷忍町ニ庵室ヲ草創シ居住セシカ、同十七年當所ノ商賈助右衛門ト云者ノ持地ヲ借地シテ移住シ、明暦二年萬年町増林寺ノ境内ニ移リ、寛文四年今ノ地ニ移轉セリ。<sup>○中</sup>略。境内年貢地千九百四十一坪、内千四百貳拾一坪ハ持添地ナリ。

——府内誌殘編

〔附記一〕 寛文初ノ演劇

寛文元年三月桐大藏芝居ヲ取建ツ。

三月<sup>○寛文元年</sup> 桐大藏木挽町五町目へ芝居取建免許之處、地所割方坪數等の事ニ付、外座と訴答ニ及び、終り間口七間奥行十間と定めらる。八月より興

市街充實時代

三五五

附記一、  
寛文初ノ  
演劇